

ヨハネの黙示録

すぐに起ころるはずのこと 第2巻

ゴットホルド・ベック著



すぐ起きるはずのこと

第2巻

ヨハネの黙示録

見よ。わたしはすぐに来る。(黙示録 22・12)

黙示録 4章~7章

ゴットホルド・ベック著



すぐに起ころるはずのこと

ヨハネの默示録

第2巻

ゴットホルド・ベック著

イエス・キリストの默示。これは、

すぐに起ころるはずの事をそのしもべたちに

示すため、神がキリストにお与えになつた

ものである。そしてキリストは、その御使いを

遣わして、これをしもべヨハネにお告げになつた。

(ヨハネの默示録 1・1)

まえがき

ゴットホルド・ベック

聖書の中で、イエス様は「一つのこと」を私たちに命じておられます。「わたしのもとに来なさい」というのが、その一つです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」
(マタイ 11・28)

このイエス様の呼びかけは、「キリスト教に入りなさい」という意味ではありません。イエス様は、ただ、「わたしのところに来なさい」と言わされたのです。

私たちは、人間がこしらえあげた「宗教」なるものによつてだまされではなりません。「宗教」に入ることこそ、まことの救いを得るための大きな妨げです。

最近私は、イエス様を信じて救われた、かつてお坊さんであり、仏教の研究者だった方の証しを聞きました。彼は、こう言つたのです。「イエス様」自身を信じたとたん、私は宗教を卒業した。樂になつた」と。その証しをご紹介しようと思ひます。ここで彼の証しをご紹介するのは、決して仏教を批判するためではありません。「宗教」と「信仰」の違いが、切実な体験として語られているからです。仏教が批判されるとすれば、同じように今日の組織されたキリスト「教」もまた批判されるべきです。

私は、かつてドイツの国教会に所属していました。私はキリスト「教」を宣べ伝えることはできません。ただ、イエス・キリストご自身を紹介したいのです。なぜなら、イエス様だけが、人間の罪の問題を解決してくださったからです。あらゆる宗教は、罪ほろぼしのために何もできません。人間は人間を救えません。しかしイエス様は、主なる神のひとり子でありながら、私たちの罪を一身に負つて十字架につき、その血によつて私たちを罪から贖いだしてくださつたのです。

なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。

(レビ記 17・11)

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(ヨハネ 1・9)

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(ヨハネ 1・7)

以下は、仏教の研究者であつた方が体験されたことの証しの要約です。

「私はお寺の生れです。長男なので、当然住職になることを期待され、何の疑問も抱かずに、高校を出ると東京の仏教関係の大学に進学しました。仏教のいくつかの宗派が合同で作っている

大学です。その仏教学科で四年間勉強しました。大学では仏教青年会というサークルに入つていきました。

卒業後、父やお寺の方々の勧めもあって、京都の、ある宗派の本山に二年間行きました。本山では事務的な仕事と坊さんのお勤めの両方をやりました。本山にも檀家があり、法事や葬式があります。お寺の坊さんは法事や葬式でお経を読むわけですが、それが何のお経であり、どういう意味なのか、ほとんどの坊さんは知っていないようです。ただ漢字の棒読みだけ、中にはお経の題名すら読めない坊さんがいる。それでも、宗派から書類をもらうと坊さんとして通る。そういうことを知るに付れて、これでいいんだろうか、と思つたんですね。

意味もわからないお経を読んでお布施をいただく。なぜそれがいただけるかを飛び越して、その金額の多少が話題になる。戒名というのも、金額によつて差があつて、ありがたみが違う。最近ＮＨＫでもとりあげていましたが、偉い坊さん方はそれがお寺の『経営』のために必要だと言つっていました。仏教の教えをはじめている人々のことはあまり考えられていない。経営なんですね。

私はそういつた実情を知るに付れて、これではいけない、何とかしなくては、特に教えの基本であるお経についてもつと深く究めなければ、と真剣に思いました。

それで私は、卒業した大学の、大学院修士課程に戻り、三年かけて勉強しました。学べば学ぶほどに仏教は難解で、三年では足りず、博士課程に進んで十年間勉強しました。そしてさらに、同じ東京にある宗派の研究所で数年間研究員をし、仏教の学会に研究発表の論文を書いて発表し

続けました。

しかしやがて、勉強をすればするほど、お経を身を入れて読むことができなくなつてきました。研究発表は不本意ですし、自分で何をやつているのか、その意義がよく分からぬ。仏教は二千五百年続き、大変な量のお経があるのに、世の中に生きて役立つてゐるとは思えない。私が勉強しているお経は、いつ、どこで、どのように人の役に立つことができるのかと、いつも思つていました。その答えは、私が仏教の世界に身をおいている間にはついに出せませんでした。

そのころ、私はあるお寺の娘さんと結婚しました。そこの住職に、お寺の本来のありかたについて疑問をぶつけました。疑問はふくらむばかりでした。やがて、離婚しました。私はますます、『自分は自分で歩くしかない、暗闇の中を手さぐりで歩くしかない』と、思いこみました。

仏教の世界に幻滅していたので、こんどは儒教はどうだろう、コーランはどうだろう、聖書はどうだろう、と思い、かたづぱしから買つてきて読みました。でも、ちつともわからない。納得できない。心霊学、易教にまで手をだしました。自分は坊さんだったんだから、なにか世の役につことをやらなきやいけないということで、易もやつてみました。

そんな時期に、今の家内と出会い、結婚しました。彼女は中学の時に洗礼を受けていました。私はお寺を出て、仏教の勉強しかしていないものですから、社会的には偏った人間です。就職もまなりません。お店を始めましたが、これもうまくいきません。私は自暴自棄になつていて、家内にもずいぶんひどいことをいいました。「お前といつしょになつたからだ」と。

そんな頃、キリスト集会のあるご婦人がたが、「ベックさんに会つてみたら」と勧めてくださ

いました。私は『絶対に、いやだ』と思っていたのですが、その時突然『会ってみます』と口から出てきたんですね。聞いていた家内がびっくりしました。

ベックさんにお会いしたとき、こう言われました。『イエス様を知つていれば、必ず救つてくださいます』。私はその言葉が言えなくて、どれだけのたうちまわっていたことか。そして『いつしょに祈りましょう』と言われました。私は祈り方も何もわかりません。仏教では『祈る』ではなく、『拝む』ですから、拝むときの正しい作法があります。どこへいって、どうやるのかな、と思つていたら、そのまま、そこで祈つてくださつて、最後にベックさんが『アーメン』と言われたとき、私も『アーメン』つて言つてしましました。その時、私の今までの二十五年のすべてが崩壊しました。

そして知りました。『宗教と信仰は違う』ということを。私は今まで『宗教』の中でもがいていた。『ああ、信仰つてこういうものなんだ』。初めてそのとき、『信仰』にみちびかれて、『宗教』の重荷から解放されました。

ほんとに体が軽くなりました。妻は見ていてそれがわかつた、というんですね。私の中にあつた、『世の中がこんなになつていて、私がなんとかしなくてはいけないんじやないか』とか、『これだけのお経があるんだから、もつと世の中に役立つはずだ』。というような考ふが、その瞬間にどこかへ消し飛んでしまつたのです。そしてさらに、『人間が世の中をよくできない』、『よくする必要もない』とお聞きして、もうぐしゃぐしゃになりました。一日でこんなに碎かれてしまふものなのか。ショックでしたが、でも、そのとき、信じられた喜びというか、何かいままで

見たことも聞いたこともないものに触れた喜びというか、それを知ることができました。実際にこんなことがあるなんてこと、学問の世界では語りようがないです。二十五年勉強してきたことの中に、無かつたです。

ということで、その日はほんとに喜んで帰つてきました。それで、家のなかに観音とか仏像とか置いてあつたんですが全部片付でしまいました。何の未練もありませんでした。ああよかつたと思いました。そして、聖書を信じたんだから、ただ聖書を読めばいいんだ、と思い、聖書を買いいにいき、読み始めました。次から次へと、もう、今まで読んでた活字の聖書ではありません。聖書が生きていて、私の目に飛び込んできて、ほんとにみことばを食べるつてこういうことなんですね。感動するばかりでした。

イエス様が私たちの罪のために、十字架について死んでくださったこと。その血によつて、私たちひとりひとりを贖つてくださったこと。そして愛のゆえにこの私のような者の罪を洗い流してくださったということ。そして救つてくださったこと。それが身にしました。

聖書の中で、私が強く主の存在を感じたのは、創世記1章2節の、「そのとき、神が、「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。神はその光をよしと見られた。そして神はこの光とやみとを区別された。」というところです。頭をたたかれたようでした。

なぜなら、私がこれまで所属してきた宗派の本尊は大日如来といつて、光の如来です。ところがその光すら、主なる神が創られたものではないか。私が今まで拝もうと努力し、信じようと努力し、信じたふりをしてきた本尊の如来つていつたい何だつたんだろう。すべては天地の創り

主であるまことの神に帰するではないか。ほんとにそう思いました。創世記の一一番初めですから、それまで何遍もここを読んでいたんですが、こんな受け取り方をしたのは初めてでした。

山ほどあつた経典や仏教書も、東京の神田に持つていき、売り払ってしまいました。

私はそれまで、攻撃する対象としてしか聖書を読んでいませんでした。どこかに矛盾がないか。どこかにあらがないか。実際、揚げ足取りもしました。しかし、心の目を開いてただいた今は、肉の糧は食物でいただいているけれど、靈の糧は【聖書のみことばと祈りと賛美】でいただいています。

キリスト集会は、お寺とちがいます。坊さんはお經の意味もよく分からぬでいる人が多いのに、集会に集う皆さんは、ひとりひとりがイエス様を心から愛し、聖書をほんとに真剣な目で読まれ、日々生きていく糧としておられる。そして主を礼拝し、賛美しておられる。主が生きて働いておられる。それを実感します。私たち夫婦も、やがて朝早く祈つて一日を始め、夜も賛美し、祈るようになりました。

今、私はパウロの気持ちがよくわかります。なぜかれがダマスコに向かう道で目がみえなくなつて、イエス様の声を聞いた瞬間に回心したのか。彼は肉の目も、靈の目も見えなくなりましたが、私の場合は肉の目はそのままに、靈の目を開いていただきました。パウロは言っています。

しかし、私にとつて得であつたこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思ふようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知つてることのすばらしさのゆえに、いつさいのことを損と思つています。私はキリストのためにすべて

のものを捨てて、それらをちりあくたと思つています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

(ピリピ 3・7～9)

私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出でており、私たちもこの神のために存在しているのです。また唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものが主によつて存在し、私たちもこの主によつて存在するのです。

(コリント 8・6)

私がこれまで研究してきたのは、『真理はどのよつた言葉で語りうるか、それはどこにあるか』ということでした。しかし、真理はここにありました。研究しなくとも、すでにそこにありました。しかも私は、その真理に瞬間的に目覚めさせられたのです。聖書を何年間研究したかでなく、何十回聖書を読んだかでなく、生まれて初めてイエス様に析り、アーメンといつた途端に、『宗教』がどつかへ飛んでしまつたんです。今まで『宗教』をどれほど重荷だと思っていたことか。それが消えてしまつたのです。

仏教の側の哲学者の方が書いておられます。『キリスト教はユダヤ教を母体とし、砂漠的な風土に成立した。その自然観は自然に対し敵対的であり、自然は征服されるべきものとして存在す

る。このキリスト教の自然観が、自然を量と要素へと還元する自然科学という鬼っ子を生みだすのであり、ヨーロッパのみならず、現代の自然科学を理解するためには、キリスト教の本質の理解が必須である」と。この方は、いわゆる宗教としてのキリスト教の一般概念で考えておられます。真の信仰とは、それとは全く別なものです。

キリスト教会の、ある医者の方は、次のように書いておられます。「科学は、神様が創造された被造物とその仕組みを調べることによって、いかに神様のみわざが偉大なものであるかを知つて神様をおそれ、神様を賛美するために、神様が私たち人間に与えられたものです。その科学を、人間の側から神様を知る物差しとして使うのは、まったく見当ちがいであり、神様をおそれない考え方です」。私は言葉を失いました。こんなに違つて。今まで二十五年間、なにを研究し、もがいていたのか…。

また、仏教では如来についての教えがあります。「人間の心は本来清らかな鏡のようなもので、それによそからきた埃がつく。それを一生懸命自分で磨いて、きれいにしなさい」というものです。しかし、聖書は次のように言っています。

内側から、すなわち、人の心から出来るのは、悪い考え方、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。

(マルコ 7・21～23)

ですからイエス様は、ご自身で十字架についてくださつたのです。本来、罪だらけの人間を、

そのまで、ただイエス様を知ることによって、罪を全て、赦してください。救ってくださるのです。

聖歌を贊美していく思いました。ああ、ただ、イエス様のそばにいるだけでいいんだ、自分が努力して仏になる必要なんか全くないんだ、と。そしたら妻が、「それでいいじゃない、イエス様のそばで何が不足なのよ」と言いました。今までの仏教の価値観では、私は自分が修行して、成仏、つまり仏にならないといけないんだ、と思いこんでいたんですね。イエス様を信じてすべてをゆだねれば、イエス様は必ず救ってくださるし、私が今までおかしてきました罪も、すべて洗い流してください。このことがほんとに嬉しかったです。

そして、これから一生イエス様につき従つていくことを証しするため、洗礼を受けました。

主は、私を見捨てられなかつた。そして私の罪を赦して洗い流してください。救つてくださつた。しかもこの世を創られた主は、今も厳然と存在して、私のことを愛し、導いていてくださつた。うれしくて、うれしくて、その喜びで毎日すごさせていただいています。私のような塵を、みもとに引き寄せてくださつたことを、ほんとに感謝しています。かつて、自分ひとりで、暗やみを手探りして生きていかなきやならないなんて考えていたなんて。

私の経験において、人間を救つてくださるのは、主イエス・キリストだけです。

人間が、人間を救えるわけはありません。人間を救えるのは、ただイエス様だけです。」

キリスト集会で、最も高齢な方は九十五歳の男性で、スイス、バンコク、ロサンゼルスなどで

開かれるバイブル・キャンプ、「よろこびの集い」に元気に参加しておられます。彼は七十余年前にクリスチヤンになり、長い間教会に通っていました。しかし、何年か前にこのキリスト集会に来て、ショックを受けたのです。なぜかというと、キリスト集会の人々は、祈りの中で、単に「神様…」とか「イエス様…」とは言わずに、「愛するイエス様…」と祈っているからです。イエス様につながっているからです。イエス様を信じているだけでなく、心から愛している人々がいる。それで彼の考え方、人生観がいつぶんに変わってしまったのです。それから彼は、「イエス様、私はどうしたらいいんですか」といつも尋ねるようになります。「イエス様に喜んでいただけにはどうすればいいか」を第一に考えるようになりました。そしてそれが彼の喜びとなつたのです。

イエス・キリストについていろいろと調べ、知識をふやすことと、イエス様ご自身を知ることは、考えられないほどの大きな違いです。「イエス様のところへ行く」とはどういうことでしょうか。それは本当の意味でイエス様の前に「降参」することです。

私たちは、罪ほろぼしのために全く何もできないと知つて、祈るようになります。「イエス様、私は罪人です。憐れんでください。私のわがままを赦してください」という、碎かれた心がなければ本物の救いは得られません。

イエス様がお命じになることの一一番めは、「全世界に出ていきなさい」です。
「全世界」の中には、身近な家族、兄弟姉妹、親戚、知人も当然含まれます。まず、身近な人々

に福音が宣べ伝えられなければなりません。そして、自分が住んでいるところだけでなく、あちらにもこちらにも福音を運ぶように導かれるようになります。ですから私たちは日本だけでなく、アメリカにも、カナダにも、バンコクにも行くようになったのです。

多くの教会は、自分たちの教会のことしか考えていません。これは悲劇的なことです。そういう教会はせいぜいが「仲良しクラブ」になってしまい、主に用いられることがありません。救われていらない人々に対する重荷を感じない人々は、イエス様とつながつていないと言えます。

イエス様は、全ての人々が真理を知ることを望んでおられます。

イエス様に対する愛は、妥協のない態度となつて現われます。ギデオンは、自分の家族に対するはつきりした態度をとつたから、主に用いられたのです。すこし長いですが、引用いたします。

その夜、主はギデオンに仰せられた。「あなたの父の雄牛、七歳の第二の雄牛を取り、切り倒したアシェラの像の木で全焼のいけにえをささげよ。」そこでギデオンは、自分のしもべの中から十人を引き連れて、主が言われたとおりにした。……

町の人々が翌朝早く起きて見ると、バアルの祭壇は取りこわされ、そのそばにあつたアシェラ像は切り倒され、新しく築かれた祭壇の上には、第二の雄牛がささげられていた。そこで彼らは互いに言つた。「だれがこういうことをしたのだろう。」それから、彼らは調べて、尋ね回り、「ヨアシュの子、ギデオンが、これをしたのだ。」と言つた。ついで、町

人々はヨアシユに言つた。「あなたの息子を引っ張り出して殺しなさい。あれはバアルの祭壇を取りこわし、側にあつたアシエラの像も切り倒したのだ。」

するとヨアシュは自分に向かって立っているすべての者に言った。「あなたがたは、バアルのために争っているのか。それとも、彼を救おうとするのか。バアルのために争う者は、朝までに殺されてしまう。もしバアルが神であるなら、自分の祭壇が取りこわされたのだから、自分で争えよいのだ。」

こうして、その日、ギデオンはエルバアルと呼ばれた。自分の祭壇が取りこわされたのだから、「バアルは自分で争えよ。」という意味である。

イエス様を宣べ伝える妥協のない態度について、キリスト集会のあるご婦人が、次のような体験を証しています。

私は六十五歳を過ぎてからイエス様を知り、イエス様を私の主として受け入れ、その証として洗礼をうけました。しかし、長年の生活の中で染み付いた仏教の行事への妥協の心が私のどこかに残っていて、それに対してもつきりとした態度をとることができず、いつも言い訳を見つけては妥協の道ばかりを歩んでいました。しかし、主人の母の法事が近づくにつれ、だんだんと心が落ち着かなくなり、苦しくなつて、どうしたらしいかわからなくなり、ただ祈っていました。そんな時に、別府のよろこびの集いで、集会の方々とお話ししているうちに、そのことが明るみにだされました。私は、「これから生涯イエス様に従います」ということをおおやけにする洗礼

まで受けていながら、イエス様よりも回りの人の目を恐れて、親戚はもちろん実の弟や妹にさえも「イエス様を受け入れた」と話せないでいたのですが、その至らなさを主にはつきりと示されました。私はイエス様を信じてることを、親戚や近所の人々、友人に伝えることができないまま、この世を終わるだろう、と思つていました。しかし、イエス様はそのことを許されず、そのままにしてはおかれませんでした。生きているうちに、イエス様のことを伝え、証ししにいくよう示されました。現実を見ればとても恐ろしく、私にはとてもできないと思われました。でも、イエス様はすべてのことを行えてくださり、一つ一つ、導いてくださいました。

先祖代々の納骨堂はお寺にありました。が、イエス様だけに従つていくためにも、この際お寺とはつきりと訣別し、新しく墓地を購入することにしました。そして法事ではなく、記念式と納骨式を、主の御名のもとに行うことを親戚に話しました。親戚は驚き、困惑したようです。「なんでいまさらイエス様を信じなければならないのか」と言いますが、この歳だからこそイエス様が必要なのです。残された人生は、ただイエス様の御手にすがつて、イエス様だけを信じ、頼りにして生きていきたい、と思つています。親戚の中には反対する者もありますが、私の喜びを見て、すこしでもイエス様のことを知つてくれれば、と思います。私がいつも主にあつて喜び続けていますことを、心から祈つております。」

このような妥協のない態度を、また、身近な人々にイエス様のことを証ししようとする気持ちを、イエス様はどんなにお喜びになることでしょう。そして、イエス様だけを信じきり、頼り切り、いつもイエス様のことを宣べ伝えようと/orの方々を、主は大きく祝福してくださいます。

目次

すぐに起ころばずのこと ヨハネの黙示録（第2巻）

まえがき

ゴットホルド・ベック 6

第3部

(黙示録対応章・節)

ヨハネの黙示録4章を学ぶ前に	1	23
宇宙の中心としての神の御座	2	11
御座におられる神と小羊	3	14
小羊をとおしての封印の開封	4	14
白い馬に乗っている者とそれに続く者	5	2
殉教者の数が満ちるまで	6	8
世界全体が揺り動かされる	7	17
大きな患難の始まりと終わりにおける神の民	8	11
	7	12
	1	9
	8	11
	217	174
	159	148
	148	132
	132	82
	82	55
	55	4
	4	1
	1	11

目 次

写真特集 ドイツでのよろこびの集い（カラーページ）	7・9～17		
基礎的なみことば		
「実を結ぶ命」「光よあれ」「神の愛」「絶えず祈れ」のおすすめ		
キリスト集会、家庭集会のご案内		
257	250	248	193

第3部

1 ヨハネの黙示録4章を学ぶ前に

- 1 地上の教会とイスラエル民族（黙示録2・3章）
 - 1 エペソの教会—エジプトから救われた民—婚約時代
 - 2 スミルナの教会—患難の民—殉教の時代
 - 3 ペルガモの教会—王を欲した民—妥協の時代
 - 4 テアテラの教会—イゼベルに殺された民—暗黒の時代
 - 5 サルデスの教会—敵の手に落ちた民—捕囚の時代
 - 6 フィラデルフィヤの教会—連れ戻された民—覚醒の時代
 - 7 ラオデキヤの教会—拒絶された民—終わりの時代
- 2 天の教会—主のみもとに引き上げられた教会
- 3 教会の撲滅
- 2 勝利を得る者の報い
- 裁きの御座の前にある教会

さて、いよいよヨハネの黙示録の第4章に入ります。これから学ぶのは、黙示録全体のうちの第3部にあたるところです。この第1部、第2部、第3部の分け方については、すでに黙示録1章19節で学びましたが、ここでもう一度整理しておきましょう。

つまり、第一部（黙示録1章）の内容は、ヨハネが見た、イエス様の「裁き主としての現われ」でした。第二部（黙示録2、3章）の内容は、ヨハネが見た、イエス様からの「七つの教会にあてられた手紙」でした。この第二部では、五旬節での教会の誕生から、携挙の日までの「教会の歴史」の概略を見ることができました。

そして、今から学ぶ第三部、黙示録の4章以下には、「後に起こること」が記されています。つまりイエス様の花嫁である「真の教会が天にあげられてからのこと」が書かれているのです。ここで、第三部の学びに入る前の準備として、今一度黙示録2、3章で見てきたことを振り返つて、そこに書かれてあることと、実際の教会の歴史、イスラエル民族の歴史を比較してみます。

1 地上の教会とイスラエル民族

1 エペソの教会—エジプトから救われた民—婚約時代

まず、エペソの教会は、ヨハネの時代の教会を現わしています。この教会は、規律を熱心に守り、間違った教えをはつきりと拒絶していました。しかし残念なことに、イエス様に対する「初めの愛」が失われてしまつたのです。また、兄弟姉妹の間にあるはずの「心からの愛」もなくなつていきました。そこでイエス様は、彼らに対して「初めの愛に立ち返りなさい」と呼びかけられた

のです。

このことはまた、エジプトから救い出された後のイスラエル民族の姿を象徴しています。紅海を渡ることができ、エジプトの支配から完全に自由になつたとき、イスラエル民族は主に対する愛と感謝に満たされていました。

「わたしは、あなたの若かつたころの誠実、婚約時代の愛、荒野の種も時かれていらない地でのわたしへの従順を覚えている。イスラエルは主の聖なるもの、その収穫の初穂であつた。」

(エレミヤ 2・2、3)

「あなたがたはわたしにとつて祭司の王国、聖なる国民となる。」

(出エジプト 19・6)

しかし、このような主に対する「婚約時代の愛」は長続きせず、まもなく消えうてしましました。エペソの教会の場合も同じです。

イザヤ書43章1節には「恐れるな。わたしがあなたを贖つたのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」とあります。私たちにも、イエス様が「あなたはわたしのもの。」と言つてくださいり、私たちもイエス様に全ての愛を捧げたときがありました。しかし今日、私たちのイエス様に対する愛はどうでしょうか。私たちは心をいつも主に向いているでしょうか。

2 スミルナの教会——患難の民——殉教の時代

次に、スミルナの教会は迫害と殉教の時代の教会を示しています。この教会に対してイエス様は「迫害を恐れてはならない」と呼びかけておられます。

イスラエル民族は、約束の地カナンに入る時に、そしてカナンの地に入つてから後も、絶えず闘いを経験しなければなりませんでした。闘いの中で彼らが妥協せず主の側に立つたとき、彼らは勝利を与えられましたが、主の側に立とうとしなかつたときには、敗北してしまいました。

3 ペルガモの教会——王を欲した民——妥協の時代

ペルガモの教会は、キリスト教がローマ帝国の国教となつてからの国教会の歴史を示しています。この時代の教会は、この世と妥協することによつて名声と誉れを受けましたが、内面的には靈的な力と主の証しを失つてしましました。

これはちょうど、イスラエル民族が他の諸民族にならつて、人間の「王」をもちたいと願つた旧約の時代に似ています。彼らは、神だけに支配されることを望まないで、他の諸国民と同じように自分たちの「王」が欲しいと願つたのです。彼らの願いによつて最初の王サウルが与えされました。しかしこの王サウルは他のイスラエル人より人間的にははるかに優れた人であつたにもかかわらず、彼自身は悲劇的な最期をとげることになつてしまつたのです。

4 テアテラの教会——イゼベルに殺された民——暗黒の時代

テアテラの教会は、中世の教会を示しています。この時代にローマ・カソリック教会は何千人の真の信者たちを殺害しました。これは、アハブ王の妻、イゼベルがイスラエル民族に偶像礼拝を強制した時代に似ています。イゼベルと同じようにローマ・カソリック教会も悪魔の道具にされたのです。これに対するイエス様のみことばは「愛する者たち。靈だからといって、みな信じてはいけません。それらの靈が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。(ヨハネ4・1)」というものでした。

5 サルデスの教会—敵の手に落ちた民—捕囚の時代

そしてサルデスの教会は、宗教改革後のプロテスタント教会を示しています。この時代の教会は、靈的には死んでいました。名前だけが生きていて、実際には死んでいたのです。

イスラエル民族もまた立派な名前をもっています。例えば「ベニヤミン」は「神の愛する者」、「イスラエル」は「神の戦士」、そして「ユダ」は「神の誉れ」という意味です。しかしそれらは、名前だけのことであり、実際には名前にふさわしくない者が大ぜいいたのです。確かに「モルデカイ」や「エステル」、また「ダニエル」と三人の友だちのように勝利を得た人々も少しはいましたが、イスラエル全体では神の民としての証しにはなっていませんでした。イスラエル民族は敵の手に陥り、神のご榮光は消え失せてしまつっていました。これが捕囚時代のイスラエルの姿です。

6 フィラデルフィヤの教会—連れ戻された民—覚醒の時代

フィラデルフィヤの教会は、覚醒の時代を示しています。捕囚時代に主はイスラエル民族の中の少数の人々に覚醒を与えて、彼らを敵の地から奪い返し、イスラエルの地へ連れ戻されました。フィラデルフィヤの教会へのイエス様のみことばは「わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持つているものをしつかりと持つていてなさい。（黙示3・11）」であり、それに対するこの教会の応えは「アーメン。主イエスよ、来てください。（黙示22・20）」でした。これらの人たちは、残された少数の人たち（エレミヤ31・7）であり、小羊の婚姻に招かれている賢い娘たち（マタイ25・4）でした。

7 ラオデキヤの教会—拒絶された民—終わりの時代

最後にラオデキヤの教会は、終わりの時代を示しています。宗教化してしまったキリスト教は、イエス様の再臨を待ち望むことをしないで、イエス様に対してもまじめく無関心になってしまつたのです。この教会は閉ざされた戸の前にむなしく立っている娘のようなものでした。イスラエルの人々も同じようにイエス様によって拒絶され、ただその中の少数のものだけがイエス様との交わりをもち、イエス様と共に支配することになるのです。

2 天の教会—主のみもとに引き上げられた教会

黙示録の4章1節で、ヨハネは天から「ここに上れ。この後、必ず起ころる事をあなたに示そう。」と命じられています。このとき、ヨハネのおかれていた状況が一変したのでした。2節には「た

「まち私は御靈に感じた」とあります。それは、ヨハネが御靈に満たされたということではなく、彼が「天に引き上げられた」ことを意味しているのです。なぜならヨハネはすでに御靈に満たされた人だったからです。ヨハネは恐らくその時「靈のからだ」をもつようになつたのです。ヨハネはイエス様に出会つて、榮光のからだに変えられました。そして、ヨハネはイエス様を見ることができたのです。

パウロも同じようなことを語っています。

私はキリストにあるひとりの人を知つています。この人は十四年前に——肉体のままであつたか、私は知りません。肉体を離れてであつたか、それも知りません。神はご存じです。——第三の天にまで引き上げられました。私はこの人が、——それが肉体のままであつたか、肉体を離れてであつたかは知りません。神はご存じです。——パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知つています。

(Ⅱコリント 12・2-4)

私たちも将来、同じように「靈のからだ」、「榮光のからだ」をもつようになるでしょう。私たちは今の「肉のからだ」をもつてゐる間は、イエス様を見ることができません。私たちは今は地上にあって、土の器の中に宝をもつてゐる状態にすぎないのです。宝とは神の靈、私たちの内におられるキリストです。土の器とはこの死ぬべきからだのことです。

また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお

生きていることはできないからである。」

(出エジプト 33・20)

さて、黙示録1章12節では、ヨハネがイエス様を見るためには振り向くこと、つまり視点を変えることが必要だったことがわかります。しかし黙示録4章1節では、ヨハネは主に会うために場所を移しかえられる必要があつたのです。場所の転換とは「携挙」、つまり天に引き上げられることを意味しています。

黙示録4章では、イエス様はもはや七つの燭台の間を歩かれるのではなく、御座についておられます。そして教会はそのまわりにいるのです。つまり、教会はイエス様のみもとに引き上げられているのです。

ここで、「携挙」、つまりまことの教会が天に引き上げられるということを学んでみましょう。黙示録では、「携挙」はただ暗示されているだけですが、聖書の他の箇所では、詳しく書かれています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(I テサロニケ 4・16、17)

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましよう。私たちはみなが眠つてしまふのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(Iコリント 15・51、52)

黙示録の4章から先、ヨハネはすべてのものを天から見るようになつていています。これ以後19章7節まで、「教会」という言葉は出てきません。そしてそこでは教会は「花嫁」として記されています。

「教会の携挙」は黙示録の3章と4章の間に起こっています。ヨハネが天に引き上げられたことは、教会の携挙の象徴です。4節に出てくる二十四人の長老たちは、旧約時代の神の民と新約時代の神の民との両方を現わしています。また「長老」という言葉は、教会では特別な意味をもつています。

また、御座の回りに二十四の座があつた。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶつた二十四人の長老たちがすわつていた。

(黙示 4・4)

よく指導の任に当たつている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えるためにほねおつている長老は特にそうです。

(Iテモテ 5・17)

私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。 (テトス 1・5)

二十四人の長老たちは冠を与えられ、栄光を与えられ、御座の回りにすわつていると書かれています。長老たちは神の裁きの座におられるイエス様に固く結びつき、その回りにすわつているのです。長老たちがかぶつてある「冠」は、聖書の中でただ忠実な者だけに与えられる報いです。ここで、私たちは、封印された「裁きの書」がまだそのままであることに注目しなければなりません。それが開かれるのは黙示録6章になつてからです。そして予告されていた「最後の裁き」は黙示録6章から18章に出てきます。ですから、4章で天に引き上げられた教会は、最後の裁きに会うことはないのです。

また、神が死者の中からよみがえらせなさつた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになつた。。

(I テサロニケ 1・10)

兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言つてゐるそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨む

ようなもので、それをのがれることは決してできません。

しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのでですから、その日が、盜人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。ですから、ほかの人々のように眠つていなくて、目をさまして、慎み深くしていましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。

しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸當てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶつて、慎み深くしていましょう。神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになつたのではなく、主イエス・キリストにあつて救いを得るようにお定めになつたからです。主が私たちのために死んでくださつたのは、私たちが、目ざめていても、眠つっていても、主とともに生きるためです。ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。

(Iテサロニケ 5・1～11)

「あなたが、わたしの忍耐について言つたことばを守つたから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」

(黙示
3・10)

1 教会の携挙

まず、みことばから学んでみましょう。

「そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持つて、花婿を出迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かつた。愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかつた。賢い娘たちは、自分のともしびといつしょに、入れ物に油を入れて持つていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。

ところが、夜中になつて、「そら、花婿だ。迎えに出よ。」と叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言つた。「油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。」しかし、賢い娘たちは答えて言つた。「いいえ、あなたがたに分けてあげるにはどうてい足りません。それよりも店に行つて、自分のをお買いなさい。」そこで、買いに行くと、その間に花婿が來た。用意のできていた娘たちは、彼といつしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、「ご主人さま、ご主人さま。あけてください。」と言つた。しかし、彼は答えて、「確かにところ、私はあなたがたを知りません。」と言つた。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」

(マタイ 25・1～13)

その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言つた。「ここに上れ。この後、必ず起ることをあなたに示そう。」たちまち私は御靈に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があつた。

(黙示 4・1～3)

教会の携挙は、これから世界に起ころうとしていることの中で、最も大きな歴史的なできごとです。イエス様の再臨は疑う余地のないことです。

キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をさげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

(ヘブル 9・28)

イエス様はかつて、罪を取り除くためにこの世に来てくださいました。この次には教会を引き上げるために来てくださいます。イエス様はそれをはつきりと約束しておられます。

「わたしの父の家には住まいがたくさんあります。もしなかつたら、あなたがたに言っておいたでしよう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行つて、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをおらせます。」

(ヨハネ 14・2、3)

テサロニケ第一の手紙の中に、イエス様の再臨についてたくさんのが書かれています。

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

(I テサロニケ 2・19)

また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。

(I テサロニケ 3・13)

私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残つてゐる私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

(I テサロニケ 4・15)

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの靈、たましい、からだが完全に守られますように。

(I テサロニケ 5・23)

私たちイエス様を信じる者の生活の中には、イエス様が再び来られるという望みが生き生きと流れていなければなりません。イエス様は空中の雲のところまで来られ、そこで教会を引き上げ

られます。この世の人々は、それを見ることはできませんが、その時には真の信者たちが地上から突然消えてしまうことに気がつくでしょう。

この時、教会の携挙を経験する信者は誰でしょうか。

私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。

(Iテサロニケ 4・14)

イエス様が罪のために死なれ復活されたことを信じる人々だけが、つまり、真に新しく生まれ変わった信者だけが、引き上げられるのです。

携挙は「イエス様の救いの成果」であって、決して信者の成功の程度によつて与えられるものではありません。パウロは全ての信者が変えられると言つています。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましよう。私たちはみなが眠つてしまふのではなく、みな変えられるのです。

(Iコリント 15・51)

つまり、かならずしも模範的と言えなかつたコリントの信者たちも、この中に含まれているのです。そして、聖霊の宮になつてゐる人々だけが、この携挙にあずかることができるのです。

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御靈が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住

んでおられる御靈によつて、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。

(ローマ 8・11)

では、どのようにして携挙は行なわれるのでしょうか。

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(1コリント 15・52)

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残つている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

(1テサロニケ 4・16、17)

その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があつた。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言つた。「ここに上れ。この後、必ず起ころ事をあなたに示そう。」

(黙示 4・1)

神の声がラッパのように響くときに、死んでいた信者は全て目を覚まし、栄光のからだに変え

られるのです。またそのとき、地上に生きている信者たちも一瞬にして栄光のからだに変えられます。このようにして、よみがえられた信者たちも、造り変えられた信者たちも、いつしょに天に引き上げられるのです。コリント人への手紙第一の15章52節の「一瞬のうち」とは、「まばたきする間」ほどの非常に短い時間を指しています。

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。 (ピリピ 3・21)

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

(ヨハネ 3・2、3)

私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。

(コロサイ 3・4)

よみがえった信者と、天の幕屋を着せられた信者とが、雲の中でイエス様と出会うのは、何とすばらしい光景でしょうか。

確かにこの幕屋の中には、私たちは重衡を負つて、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえつて天からの住まいを着たいからです。そのことによつて、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。

(Ⅱコリント 5・4)

イエス様が雲に乗つて天にあげられたように、私たちも雲に乗つて天に引き上げられるのです。
こう言つてから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられました。

(使徒 1・9)

私たちの携挙も、イエス様の昇天と同じように一瞬のうちに起ります。私たちがイエス様と顔と顔を合わせてお会いできるとは、何とすばらしいことでしょうか。

このことは空中において起ります。しかし、空中にはまた、悪霊も存在しています。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの惡靈に対するものです。ですから、邪惡な日に際して対抗できるよう、また、いつさいを成し遂げ、堅く立つことができるよう、神のすべての武器をとりなさい。では、しつかりと立ちなさい。腰には真理の帶を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。

(エペソ 6・12～15)

イエス様は悪靈が存在しているそのまつただ中において、完全な勝利を与えてくださるのです。すべての生まれ変わった人々がそこにいます。イエス様は信仰の弱い者をも引き上げてくださるのです。ちょうど、イスラエル民族がエジプトを脱出する時に、残される者が一人もなく全員エジプトを脱出できたのと同じように。

私たちは家畜もいつしょに連れて行きます。ひづめ一つも残すことはできません。私たちは、私たちの神、主に仕えるためにその中から選ばなければなりません。しかも私たちは、あちらに行くまでは、どれをもつて主に仕えなければならないかわからないのです。

(出エジプト 10・26)

つまり、イエス様を信じ、従う者であるなら、すべての人が引き上げられるのです。この約束をいただいているのですから、私たちはお互いに慰め励ましあいましょう。

こういうわけですから、このことばをもつて互いに慰め合いなさい。

(Iテサロニケ 4・18)

このことをはつきりわきまえて、動かされることなく、共に主に仕えようではありませんか。ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立つて、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。

(Iコリント 15・58)

さらに、主に忠実な者に対する報いが与えられます。これについて、考えてみましょう。

2 裁きの御座の前にある教会

挙げるので、教会は主の裁きの御座の前におかれます。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に応じて報いを受けることになるからです。

(Ⅱコリント 5・10)

なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。

(ローマ 14・10)

良いことを行なえば、奴隸であつても自由人であつても、それぞれその報いを主から受けけることをあなたがたは知っています。

(エペソ 6・8)

このとき問題となるのは、「滅び」か「永遠のいのち」かということではありません。信者はすでに朽ちないのちをもつているからです。

また、「大きな白い御座」(黙示録20・11)の前ににおける「最後の審判」とも関わりがあります。最後の審判においては、救われている人々が対象ではないからです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移つているのです。」
(ヨハネ 5:24)

そしてもちろん「過去の罪」が問題となるのでもありません。過去の罪はすでに赦され、イエス様が私たちと父なる神とを和解させてくださいました。

神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によつて世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。
(ヨハネ 3:17, 18)

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」
(ヨハネ 6:37)

ですから、信仰によつて義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによつて、神との平和を持つています。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ 8:1)

私たちは自分の罪が完全に取り除かれたことを知っています。

あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であつたのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。

(コロサイ 2・13、14)

それは、神がその愛する方によつて私たちに与えてくださつた恵みの栄光が、ほめたえられるためです。私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

(エペソ 1・6、7)

キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によつて、永遠に全うされたのです。

(ヘブル 10・14)

私たちは、父なる神がイエス様を愛されたのと同じように、私たちのことをも愛しておられるのを知っています。

「わたしは彼らにより、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つ

となるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。」 （ヨハネ 17・23）

ですから、ここでは私たちがイエス様から離れていたときの生活が問題となるのではなく、私たちが信仰を与えられてから後の生活が裁かれるのです。

黙示録は「裁きの書」です。神の裁きは神の家から始まります。

なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。 （Iペテロ 4・17）

挙げたあとに、まず信者にたいする裁きが行われます。これは信者の働きにたいする報いのための裁きです。主の光の下に、すべてのものが明らかにされます。

私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畠、神の建物です。与えられた神の恵みによつて、私は賢い建築家のよう、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真偽をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は

報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自身は、火の中をくぐるようにして助かります。 (Iコリント 3・9～15)

多くの人々が、裁きの火によつて木や藁のように焼きつくされてしまいます。ここで、私たちが神のみことばに忠実であつたかどうかが明らかになるでしょう。たとえば私たちには、次のようなみことばが与えられています。

望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。 (ローマ 12・12)

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによつて、あなたがたの願い事を神に知つていただきなさい。 (ピリピ 4・6)

そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。

(Iテモテ 2・1)

何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。

(Iペテロ 4・8)

ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにします。神は喜んで与える人を愛してくださいます。 (Ⅱコリント 9・7)

その日には、私たちが許さなかつたこと、愛さなかつたこと、批判したことなどの全てが明るみに出されます。

信者は生まれ変わりを通して、神の家の生きている石となるだけでなく、神の家を共に建て上げる者、神の同労者とされます。

あなたがたも生ける石として、靈の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる靈のいけにえをささげなさい。

(Ⅰペテロ 2・5)

私たちは自己中心の生活をしていいでしょうか。集会の兄弟姉妹たちを心にかけているでしょうか。主の裁きの御座の前におかれられた時、これらのことことが明らかにされます。ですから私たちは報いの日を日指して、モーセが歩いたように歩まなければなりません。

彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかつたのです。 (ヘブル 11・26)

勝利を得る者の報い
それぞれ自分自身の働きに従つて自分自身の報酬を受けるのです。

(コリント 3・8)

神は正しい方であつて、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

(ヘブル 6・10)

すべての信者は、いろいろなやり方でイエス様に仕えています。イエス様に仕えることをまったくしなかつた信者というのはありえません。

すると、王は彼らに答えて言います。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」

(マタイ 25・40)

聖書には報酬として「冠」が与えられると書かれていますが、これから六つの「冠」について簡単に見てみましょう。

・ 栎ちない冠

競技場で走る人たちは、みな走つても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるよう走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分のからだを打ちたいて従わせます。それは、私がほかの人宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

(1コリント 9・24～27)

信者の生活は、競技場でゴールを目指して全力疾走しているようなものです。その結果、主から「朽ちない冠」をうけることができるのです。パウロは、賞を得るために自分の体をうちたいたい人でした。

モーセもまた私たちの模範となります。

彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかつたのです。 (ヘブル 11・26)

いのちの冠

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束さ

れた、いのちの冠を受けるからです。

(ヤコブ 1・12)

「いのちの冠」は試練を通つて勝利を得た者に与えられます。ダニエルは主を否定して生きるよりも、獅子の穴に投げ込まれる方を選びました。彼の三人の友も神に対する忠実さを捨てるくらいなら、自分の体が焼かれる方を選びました。アブラハムは自分の一人息子を犠牲の供え物として捧げようとした。悪魔のあらゆる攻撃にもかかわらず、ヨブは主への信仰を堅く守りました。これらの人々はすべて「いのちの冠」を得たのです。悩んでいる信者にとって、これらの方は大きな励ましです。

義の冠

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

(II テモテ 4・8)

「義の冠」を受けるには、日常生活の中で主に忠実であることと、主の再臨を待ち望む信仰がなければなりません。主の再臨を待ち望んでいる人は自分自身をきよめることに熱心になります。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

(ヨハネ 3・3)

私たちには日々「主よ、来てください」と祈りましょう。

・ 誇りの冠

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。
(イテサロニケ 2・19)

そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあつてしっかりと立つてください。私の愛する人たち。
(ピリピ 4・1)

「誇りの冠」は、他の人々を主のみもとに導いた者に与えられる報酬です。人々を導くためにイエス様は来られたのであり、今も働いておられます。

人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。

(ルカ 19・10)

人を導くことは、パウロの望みでもありました。

また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御靈の力によつて、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回つてイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。
(ローマ 15・19)

ダニエルは、人を導く者のことを次のように預言しています。

思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。

(ダニエル 12・3) 星

榮光の冠

そうすれば、大牧者が現わるときに、あなたがたは、しほむことのない榮光の冠を受けるのです。

(イペテロ 5・4)

「榮光の冠」は、教会をよく牧した牧者に与えられる報酬です。自分のことを考えないでイエス様のことだけを考え、群の模範となつた人に与えられるものです。パウロもこのような奉仕をした人でした。

私は謙遜の限りを尽くし、涙をもつて、またユダヤ人の陰謀によりわが身にありかかる数々の試練の中で、主に仕えました。益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、ユダヤ人にもギリシャ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはつきりと主張したのです。

(使徒 20・19～21)

けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福

音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

(使徒 20・24)

あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもつて買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになつたのです。

(使徒 20・28)

金の冠

また、御座の回りに一十四の座があつた。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶつた二十四人の長老たちがすわつていた。

(黙示 4・4)

「金の冠」は、地上にあつてイエス様に仕えた長老たちが報酬として受けるものです。

その日には、私たちが利己的な動機によつて行なつたことと、イエス様に対する愛から行なつたことが明るみに出されます。

その日には、私たちが自分自身の力により頼んでやつたことと、聖霊が私たちを通じてなされたことが明るみに出されます。

その日には、救われた者すべてが裁きを受け、冠を受ける者と受けない者に分けられます。ですから私たちは、日々、自分自身を主の光の前に差し出して、主が私たちの心の内側を明らかにします。

かにしてくださいるようにしましよう。

神よ。私を探り、私の心を知つてください。私を調べ、私の思い煩いを知つてください。
私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をどこしえの道に導いてください。

(詩篇
139
・
23、
24)

2

宇宙の中心としての神の御座

黙示録4章1節から11節まで

1 啓示の準備

・教会の携挙—閉ざされてしまう扉
・御座と、御座に座つておられる方

・御座の不動性と神聖さ

・たとえとしての碧玉、赤めのう、緑玉
・御座のまわり

・二十四人の長老たち

・四つの生き物

・神への礼拝

・四つの生き物
・二十四人の長老たち

¹その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッバのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言つた。「ここに上れ。この後、必ず起ることをあなたに示そう。」たちまち私は御靈に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があつた。²また、御座の回りに二十四の座があつた。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶつた二十四人の長老たちがすわつていた。

御座からいなすまと声と雷鳴が起つた。⁵七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御靈である。御座の前は、水晶に似たガラスの海のようであつた。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。⁶第一の生き物は、ししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであつた。⁸この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」⁹

また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言つた。

「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と譽れと力とを受けるにふさわしい方です。あな

たは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから」

(黙示 4・1～11)

「默示録4章全体のテーマは「宇宙の中心としての神の御座」です。そしてこのテーマはまた、「神の支配の御座」、「神の御座の近くにおいて」、「御座の上におられる神」、「生きておられる神」、あるいは、「世界の主」、「歴史の主」、「宇宙の支配者」、「神は支配する」、「すべての者に対する神の支配」、「創造者に対する誉れ」、さらに「引き上げられた教会」と言うこともでき、これらのすべてが默示録4章の主題だと言えるでしょう。

そして、默示録4章は四つの部分、つまり、1節から2節前半まで、2節後半から3節まで、4節から8節前半、8節後半から11節までに分けることができます。これらを順に学んでいきましょう。

1 啓示の準備

教会の携挙——閉ざされてしまう扉

「その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのよくな声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言った。「ここに上れ。この後、必ず起ることをあなたに示そう。」たちまち私は御靈に感じた。

(黙示 4・1、2)

「啓示の準備」とは、まことの教会の携挙のことを指しています。世の光となつていない、かたちだけのいわゆる「教会」はこの時には捨て去られます。サルデス、ティアテラ、ラオデキヤの教会に予告されている裁きが、この時に行なわれます。この予告された裁きは、キリストの花嫁である教会が、この世におかれている間は受けることがありませんが、イエス様が眞の教会を天に引き上げられる時には、信者とは言えない信者たちは、みなイエス様の口から吐き出されてしまうのです。

「このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないでの、わたしの口からあなたを吐き出そう。」

(黙示 3・16)

このことは、教会の携挙と同時に、恵みの門の扉が閉ざされてしまうことを意味しています。用意をおこたつた「愚かな娘たち」は遅れて来て、扉の前に立つて叩きますが、扉は開きません。しかし、扉の内側では、「賢い娘たち」が安全な場所をみつけています。この「賢い娘たち」とは、あらゆる時代の信者たちを意味し、黙示録4章4節で二十四人の長老たちとして示されています。彼らは白い衣を着て、御座の回りに座し、金の冠を与えられています。

ヨハネは天に開かれた扉を見ました。この扉は、昔から開かれている扉です。ステパノは石で打たれて殺される前、天が開けて人の子が神の右に立つておられるのが見える、と証しました。しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立つておられるイエスとを見て、こう言つた。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立つて

おられるのが見えます。」

(使徒 7・55、56)

イエス様が十字架につかれて勝利をおさめられたので、天のみ国の扉は信じる者すべてに向かって開かれています。この天国への「扉」は、イエス様ご自身を意味しています。イエス様は「わたしが門である」とおっしゃいました。開かれた扉は自由に入ることができます。しかし、扉が閉ざされると、もはや入ることはできないのです。

「わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」

(ヨハネ 10・9)

イエス様を救い主、そして主として、すでに受け入れている人々は、今この瞬間も、父なる神への開かれた道をもつており、さらに後には天国への開かれた道を見いだすことができるのです。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によつて、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

(ヘブル 10・19、20)

ヨハネは「ここに上れ」という声を聞きました。それはラッパのような響きだったと述べています。ラッパについては聖書の他の箇所に次のように出ています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つ

て来られます。

(イテサロニケ 4・16)

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(1コリント 15・52)

「ここに上れ」という言葉は「携舉」を象徴しています。イエス様ご自身が降りて来られ、その時教会をご自身のところへ呼び寄せられるのです。

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをおらせるためです。」

(ヨハネ 14・3)

この「ここに上れ」というヨハネへの呼びかけは、神の裁きが行なわれる直前のことです。黙示録6章から、神のこの世への裁きがはじまるのですから。ヨハネは黙示録2、3章において教会の歴史を一瞬のうちに見せられましたが、4章以降では、世界の歴史を非常に短い間に見せられるのです。

イエス様はフィラデルフィヤの教会に対して、「全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」(黙示3・10)と約束されました。

旧約聖書でも、教会の携舉を象徴した記事を数カ所で見ることができます。例えば、エノクは

来ようとしているできごとを預言した後、洪水の起る前に天に引き上げられました。

エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなつた。

(創世記 5・24)

またロトは、主がソドムを滅ぼされる前に、町から助け出されました。

こうして、神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からのがれさせた。

(創世記 19・29)

主はエジプトの軍勢を紅海で滅ぼされる前に、ご自分の民を安全な岸へと渡されました。

パロの馬が戦車や騎兵とともに海の中にはいったとき、主は海の水を彼らの上に返されたのであつた。しかしイスラエル人は海の真中のかわいた土の上を歩いて行つた。

(出エジプト 15・19)

エリコの町が滅ぼされる前に、ラハブはそこから救い出されました。

ヨシュアはこの地を偵察したふたりの者に言つた。「あなたがたがあの遊女に誓つたところ、あの女の家に行って、その女とその女に属するすべての者を連れ出しなさい。」斥候になつたその若者たちは、行って、ラハブとその父、母、兄弟、そのほか彼女に属するすべ

ての者を連れ出し、また、彼女の親族をみな連れ出して、イスラエルの宿営の外にとどめておいた。

(ヨシュア 6・22、23)

「ここに上れ」という呼びかけは、世界の裁きが始まる前になされるのです。イエス様は世界の裁きの起こる前に、ラッパの響きのような声で私たちを安全な所へ導こうとなさいます。信者はちは裁きに会う方へ進んでいるのではなく、イエス様の再臨に向かって進んでいます。ですから、私たちイエス様を信じる者の使命は、「開かれた門を見なさい。そしてその門から入り、イエス様を受け入れなさい」と人々に宣べ伝えることです。

2 御座と御座に座つておられる方

天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのよう見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があつた。(默示 4・2、3)

ヨハネは「一つの御座」を見ました。默示録では「御座」について四十七箇所で語られていますが、そのうちの十二箇所は4章にあります。ヨハネはここで、彼の印象や感想を語っているのではなく、見たままを忠実に語っています。御座はいつも、「御座の上に」、「御座のまわりに」、「御座の前に」、「御座の真ん中に」というように語られています。この御座に関しては、次のことが言えます。

・ 御座の不動性と神聖さ

まず、御座の不動性です。この世の権力の座はむなしく移り変わるものですが、神の御座は移り変わることはありません。神の御座とは、揺らぐことのない神のご支配を表わしています。神は世界の支配者です。ヨハネはこの世の裁きの来る前に、神の御座と御座におられる方を十分によく見ることを許されたのです。

次は、御座の神聖さについてです。5節に「御座からいなずまと声と雷鳴が起こつた」とあります、これは最高の権威を現わす御座から起くる、罪と、かたくなさに対する裁きを意味しています。

今の時代は、まだ「恵みの御座」が続いている。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。
(ローマ 3:25)

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなつた助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。
(ヘブル 4:16)

しかし、携挙のあとでは、この「恵みの御座」は「裁きの御座」に変わってしまうのです。

たとえとしての碧玉、赤めのう、緑玉

ヨハネは御座を見ただけではなく、御座におられる方をも見ました。しかし、神を見たとは言つていません。ヨハネは神の御名を指すことを避けて、その現われすらも書こうとしなかつたのです。人は神を描くことができません。人が神を描くことができないので、ここでも神の名が語られていないのです。詩篇の作者が言つていてるように、神は何にもたとえようのないお方です。わが神、主よ。あなたがなさつた奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語つても、それは多くて述べ尽くせません。

ん。

(詩篇 40・5)

ヨハネはそこでたとえとして、碧玉、赤めのう、緑玉などをあげることしかできませんでした。これらのたとえも神の真の姿からはほど遠いものですが、たとえにあげられた三つの宝石について、ここで少し考えてみましょう。

まず碧玉は、白い透き通った石で、神には完全な明るさと清さがあることを示しています。ヨハネは光を神の象徴として記しています。

都には神の栄光があつた。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであつた。

(默示 21・11)

その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。都の城

壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三は玉髓、第四は緑玉……

(默示 21・18、19)

神にはこの世に見られない光と清さがあるのです。

あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。

(詩篇 104・2)

光は闇に対立します。光には良いもの、真実なもの、神聖なものがすべて合さっています。

光は罪からの清めを意味します。光はこの世からの完全な分離と、神との眞の交わりを意味しています。

ヨハネの手紙第一の1章5節に「神は光であつて……」とありますが、この言葉は「神は聖なるものであり、全ての悪を明るみに出し、滅ぼされる方である」という意味でもあります。神は私たちのうわべも内側も全てを「存じ」であり、神の前には隠されたものが一つもありません。そして、神はご自身を啓示され、私たちを救つてくださるのであります。

次に、赤めのうは赤い石です。これは神の愛と憐れみとを現わしています。私たちは、碧玉から神の清さと高さをうかがい知ることができ、赤めのうから神の愛と憐れみを象徴的に見ることができます。

3節に「緑玉のように見える虹」とありますが、緑玉は緑の石で、虹の中にある緑色は特に目立つ色です。

旧約時代、神はノアに虹をお見せになつて、「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」（創世記9・11）と約束なさいました。虹は神の寛容と恵みを象徴しています。いま、虹は終わりの日の裁きの前にも現われており、神の恵みが約束されています。しかし、黙示録20章に記されている「白い御座」の裁きの時には、もはや虹が出ていません。これは、裁きの時には神の恵みと憐れみの期間がすでに過ぎ去つてしまつていてることを意味しています。だからこそ、「神との和解を受けなさい」と呼びかけることが私たちの使命です。今は恵みの時、恵みの期間だからです。今なら神が、罪の赦しと、真の平安と、永遠のいのちとを提供しておられるからです。

3

御座のまわり

二十四人の長老たち

また、御座の回りに二十四の座があつた。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶつた二十四人の長老たちがすわつていた。⁴御座からいなずまと声と雷鳴が起こつた。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御靈である。⁵御座の前は、水晶に似たガラスの海のようであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。⁶第一の生き物は、ししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであつた。

この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。⁸

(黙示 4・4～8)

ヨハネは、御座に続いてその回りにある二十四の座のことを記しています。回りにあるということは、これらの座が御座の支配の下にあることを表わしています。では、この座に座っている二十四人の長老たちは一体誰のことでしょうか。それは旧約時代と新約時代の信者たちを意味しています。聖書では「天使」のことを「長老」と呼ぶことはありませんし、天使は冠もなく、座につくこともありません。「長老」という呼び名は、ただ救われた人々にだけつけられるものであり、「冠」や「座」は、イエス様が救われた信者に対してだけ、褒美として与えようと約束されたものです。

そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従つて来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」
(マタイ 19・28)

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

(II テモテ 4・8)

あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従つて、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現わるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです。

(ペテロ 5・2～4)

默示録4章、5章には、造られた全てのものが神を礼拝していることが記されていますが、これらの礼拝しているものたちは四つのグループに区別されています。まず「二十四人の長老たち」、次いで「四つの生き物」、そして「天使たち」、さらに「天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの」です。ここでもし、この二十四人の長老たちが信者たちでないとしたら、信者たちは一人としてこの礼拝に加わっていいことになりますが、そのようなことはありえません。二十四人が座っている座は、イエス様が教会に約束されたものです。

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

(默示 3・21)

二十四人の長老がかぶっている冠は、イエス様が勝利を得る者に約束された冠です。

「わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持ついるものをしっかりと持つていなさい。」

(默示 3・11)

「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」

(黙示 2・10)

二十四人の長老が着ている白い衣もまた、イエス様が勝利を得る者に約束されたものです。

「しかし、サルデスには、その衣を汚さなかつた者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。勝利を得る者は、このよううに白い衣を着せられる。∴ わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。」

(黙示 3・4、5、18)

白い衣は、イエス様から与えられる清さ、正しさ、神聖さを現わしています。また、祭司の務めをする者の衣服でもあります。そして金の冠は王の役目を果たす者がかぶっています。

また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださつた方である。キリストに栄光と力とが、どこしえにあるように。アーメン。

(黙示 1・6)

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた

民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださつた方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

(イペテロ 2・9)

王として、また祭司として主に仕えることが、私たちの生活の目的でなければなりません。

次にヨハネは「御座からいなすまと声と雷鳴が起こつた」のを聞きました。これは神が世界を支配しておられること、この瞬間に裁きによって支配されることを意味しています。主は歴史の中に力強く働きかけておられ、主のみこころでなければ、この世界にはいかなることも起こりえないのです。

三日目の朝になると、山の上に雷といなすまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿營の中の民はみな震え上がつた。

(出エジプト 19・16)

そのあとでかみなりが鳴りとどろく。神はそのいかめしい声で雷鳴をとどろかせ、その声の聞こえるときも、いなすまを引き止めない。神は、御声で驚くほどに雷鳴をとどろかせ、私たちの知りえない大きな事をされる。

(ヨブ 37・4、5)

イエス様は働かれ、行動され、また命令を与えられます。イエス様はそのご計画を必ず成し遂げられます。

ヨハネは御座の前で「七つのともしび」が燃えているのを見ました。これは「主の七つの御靈」でした。ともしびが燃え続けているのは、主の靈が絶えず働かれているという証拠です。ここで私たちは三位一体を見るることができます。つまり、父なる神、子なる神、そして、ともしびとしての靈なる神です。聖靈はきょうも、人々にその人の眞の状態を示し、主への悔い改めとイエス様への信仰と永遠のいのちを贈ろうとして働かれています。

ヨハネはまた、御座の前が「水晶に似たガラスの海のようである」のを見ました。これは何を表わしているのでしょうか。

旧約時代、幕屋の中には青銅の洗盤が置かれていました。

「洗いのための青銅の洗盤と青銅の台を作つたなら、それを会見の天幕と祭壇の間に置き、その中に水を入れよ。アロンとその子らはそこで手と足を洗う。彼らが会見の天幕にはいるときには、水を浴びなければならない。彼らが死なないためである。また、彼らが、主への火によるささげ物を焼いて煙にする務めのために祭壇に近づくときにも、その手、その足を洗う。彼らが死なないためである。これは、彼とその子孫の代々にわたる永遠のおきてである。」

(出エジプト 30・18～21)

ソロモンは神殿を建てるとき、その中に鑄物の海を作りました。

それから、鑄物の海を作った。縁から縁まで十キユビト。円形で、その高さは五キユビト。その周囲は測りなわで巻いて三十キユビトであった。

(I 列王記 7・23)

この幕屋または神殿で、神に仕える祭司は、聖所に入る前に必ずここで手と足を洗わなければなりませんでした。しかし、実はこれら二つのもの、洗盤と鑄物の海は、天にあるものの雛形であり、ヨハネが記した「水晶に似たガラスの海」を型どつて作られたものだつたのです。

ですから、天にあるものにかたどつたものは、これらのものによつてきよめられる必要がありました。しかし天にあるもの自体は、これよりもさらにすぐれたいにえで、きよめられなければなりません。

（ヘブル 9・23）

天国では全員が清められており、もはや汚れを洗い清める必要はありませんから、「ガラスの海」のようになつてゐるのです。

一方、聖書において「海」という言葉は国々を象徴しています。このことは、人の目から見ると謎ばかりに見える人間の歴史も、神の日から見れば水晶を見るように明らかであることを物語っています。主はお定めになつた計画を遂行しておられます。世界中のあらゆるできごとは、この主のご計画に従つて起つてゐるのです。

・ 四つの生き物

ヨハネはさらに、御座のまわりに四つの生き物がいるのを見ました。この四つの生き物とは天使たちのことです。この天使たちは神が地上に創造された被造物そのものではなく、全知全能の神の権威を象徴する生き物です。これらの生き物は私たちにケルビムやセラフィムを思い出させ

ます。

ケルビムは神の栄光と支配とに関係をもつ存在です。

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

（創世記 3・24）

アダムとエバは罪を犯したために、エデンの園から追放され、エデンの園の東にケルビムがおかされました。神はアダムとエバの罪の恥を隠すため、人間の罪と関係のない動物をほふって、皮の衣を作り、彼らに着せてくださいました。これは私たちの罪のために死なれたイエス様の象徴です。もし罪を贖うための犠牲が神に捧げられていなかつたら、罪人である私たち人間は、神の御前に出られなかつたのです。

セラフィムは神の清さと関わりのある天使です。

ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィムがその上に立つていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おののその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言つていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。」その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。そこで、私は言つた。

「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」すると、私のもとに、セラ

フィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」（イザヤ 6・1～7）

天使セラフィムは「目」で満ちていて、この天使が神のご計画を知り尽くしていることを表わしています。また二つの翼で顔をおおい、神に対する恐れを表わしています。別の二つの翼で両足をおおい隠して謙遜を表わし、残りの二つの翼を使って飛んでいますが、これは神のご命令に即座に行動できるよう準備していることを意味しています。セラフィムは絶えず、「聖なる、聖なる、聖なるかな」と叫びながら神を賛美しています。

さて、ヨハネが見た四つの生き物は、それぞれ獅子のようであり、雄牛のようであり、また人間のような顔をもち、鷲のようでした。これらたとえは重要な意味をもつています。これらの四つはすべて、異教の宗教で礼拝の対象とされていたものです。バビロン帝国では、神は獅子のように強いものとされていました。またエジプトでは、神は雄牛のように生命を創るものだとされていました。イスラエルの民がエジプトから脱出した直後に、金の子牛を作つて礼拝しようとすることは興味深い事実です。ギリシャでは、神々は人間のように知恵があり、また肉感的なものでした。ローマにおいては、神々は鷲のように勝利を得るものとされ、ローマ帝国の旗には鷲の紋様が描かれていました。このように、異教の宗教では、人間が作りだしたもののが拝まれていたのです。それは、彼らが自分たちの創造主についてよく知らされていなかつたからです。

しかしこの默示録4章においては、人々が誤って礼拝してきたものたちが、創造主そのものを礼拝するために「御座の回り」にいるのです。

主なる神は、この地上に造られたものと比較できるような存在ではなく、また比較されるべきでもありません。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。」

（出エジプト 3・14）

あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造つてはならない。

（出エジプト 20・4）

默示録12章7節に天使の長「ミカエル」が出てきますが、「ミカエル」という名前は「誰が神のようでありえようか」という意味です。誰も、何者も、神に比較できるような存在ではありえないのです。

四つの生き物はまた別の面から見ることができます。

まず「獅子」は、主がご自身の計画を成就されることを意味しています。

「雄牛」は、犠牲としてしばしば捧げられました。ですから、この動物は失われた者を救われる

主のみこころを象徴しています。

「人間」は、自らを人間の姿に変えられるほどに人間を愛された主の御姿を象徴しています。
「鷲」は、あらゆる座よりもなお高い位置につき、敏速にご自身の計画を成就なさる主の御姿を象徴しています。

つまり四つの生き物は、主のご栄光と清さを象徴し、同時に神の裁く力と神の持続力と知恵と速さとを表わしているのです。

さらにこの四つの生き物は、内側も外側も「目で満ちて」います。内側に目を持つということは、神を知り、神の導きを受けることを意味します。私たちは、神を知り、神に導かれたいといつも願っているでしょうか。また、外側に目があるということは、周囲の環境と困難をよくわきまえて、しかも無条件に神のご計画を成しとげることを意味しています。聖書にはイエス様が「ごらんになつた…」と何度も何度も記されています。私たちは、神の目をもつて人を見ているでしょうか。神の思いをもつて、神の靈と神の力をもつて行動しているでしょうか。

4 神への礼拝

この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。
彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、

¹⁰二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言つた。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と譽れと力を受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたののみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

(黙示 4・8～11)

・四つの生き物

これら四つの生き物は、二十四人の長老と違つて冠も座も豎琴も持つていません。長老たちはひれ伏し、冠を投げ出して神を礼拝していますが、生き物たちは栄光と誉れと感謝を叫び続けています。

四つの生き物は神の聖さと栄光を慕つて、夜も昼も賛美を捧げています。主は聖いお方であり、永遠に聖くあり続けられます。多くのことは変わりますが、しかし、主の聖さは変わりません。主の聖さによつてすべて汚れているものが碎かれます。主はご自身を、その聖さにおいて、そしてその次にはたとえようのない恵みにおいて啓示されます。

アダムの場合は、救い主が来られるという約束を与えられました。アダムがエデンの園を追われたときには、主のご栄光と主の聖さを体験しましたが、その後で主の恵みを体験したのです。イザヤは、祭壇から出た炭火によつて聖められました。これは罪が滅ぼされ、消されるためのイエス様の犠牲の死を象徴しています。

ヨハネが見た二十四人の長老たちは、主に守られ、主に聖められて御座の前に座っていました。

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの靈、たましい、からだが完全に守られますように。あなたがたを召された方は眞実ですから、きっとそのことをしてくださいます。

(イテサロニケ 5・23、24)

・二十四人の長老たち

四つの生き物も長老も、共に感謝を捧げていますが、長老たちはさらに、主を自分たちの救い主として礼拝しています。四つの生き物がこれをしないのは、彼らが罪を犯さなかつたので、救いを必要としないからです。ですから彼らは冠も持つていません。なぜなら、長老のように勝利を得る必要がなかつたからです。長老たちはかつては滅んでいた者でしたが、彼らはそこから救い出されたのです。それだけに、彼らは深くひれ伏して礼拝せざるを得なかつたのです。長老たちは自分から冠をとり、投げ出して御座の前で礼拝しています。これが眞の礼拝の姿です。

礼拝は默示録全体のテーマです。私たちは誰に礼拝を捧げているのでしょうか。誰を愛し、誰に仕え、誰に聞き従うのでしょうか。すべての者が主の足元にひれ伏すことが大切です。きょう、私たちも主に自らを明け渡そうではありませんか。きょう、主は礼拝する者を探しておられます。眞の礼拝者が眞の奉仕者となるのです。

「しかし、眞の礼拝者たちが靈とまことによつて父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は靈ですから、神

を礼拝する者は、靈とまことによつて礼拝しなければなりません。」

(ヨハネ 4・23、24)

聖餐式で私たちは、心を主に向けて救いを感謝します。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と尊れと力を受けるにふさわしいお方です。」と。

黙示録が記された当時のローマ皇帝ドミティアヌスは、自分自身を「主」、また「神」と呼ばせ、人々に皇帝崇拜を強要しました。オリーブで編まれた冠が皇帝ドミティアヌスの足元に投げられ、ともしびや宝石が捧げられました。

しかし黙示録のこの部分では、礼拝は皇帝ではなく、生けるまことの神に捧げられているのです。まことの神が礼拝される理由は「あなたは万物を創造し、あなたの御心ゆえに万物は存在し、また創造されたからです」というものです。たとえ皇帝であつても、人間であるドミティアヌスが礼拝を受けるべきではなく、宇宙の支配者であるお方、まことの主こそがこれをお受けになるべきです。ドミティアヌスは「あなたはそれにふさわしいお方です」というあいさつを自分が受け入れ、主に罪を犯しました。しかし、天にいる四つの生き物と二十四人の長老たちは、神こそがすべての尊れと栄光にふさわしいお方であることを知つており、礼拝を捧げています。

生けるまことの神、主だけが、力をもち、尊れを受ける権利を持つておられます。生けるまことの神、主のみが支配し、すべての権力を持つておられます。生けるまことの神、主にのみ、尊れと贊美がふさわしいのです。

この宇宙を支配しているのは主であり、悪魔ではありません。悪魔が地上に占めている座のそ
の上に高く高く神の御座があるのです。主は全知全能ですから失敗なさることがありません。

このような「主よ、あなたは栄光と誉れと力とを受けるにふさわしいお方です」という贊美に
反して、地上では「信仰が何の役に立つのか」、「イエス・キリストに従つて行くことは何の益に
なるのか」、「神を礼拝することで、自分が認められるのだろうか」という自己中心的な問いが起
こります。

しかし、詩篇の作者は真の礼拝者として祈りを捧げました。私たちもまた、イエス様の本質と
偉大さをさらに深く知ることによって、真の礼拝者になれるよう主に祈りましょう。

：正しい者たちは喜び、神の御前で、こおどりせよ。喜びをもつて楽しめ。神に向かつ
て歌い、御名をほめ歌え。雲に乗つて来られる方のために道を備えよ。その御名は、主。
その御前で、こおどりして喜べ。

みなしごの父、やもめのさばき人は聖なる住まいにおられる神。神は孤独な者を家に住
まわせ、捕われ人を導き出して栄えさせられる。しかし、頑迷な者だけは、焦げつく地に
住む。

神よ。あなたが御民に先立つて出て行かれ、荒れ地を進み行かれたとき、地は揺れ動き、
天もまた神の御前に雨を降らせ、シナイも、イスラエルの神であられる神の御前で震えま
した。

神よ。あなたは豊かな雨を注ぎ、疲れきったあなたのゆずりの地をしつかりと立てられ

ました。あなたの群れはその地に住みました。神よ。あなたは、いくしみによつて悩む者のために備えをされました。

主はみことばを賜わる。良いおとずれを告げる女たちは大きな群れをなしている。

(詩篇 68・3-12)

3

御座におられる神と小羊

黙示録5章1節から14節まで

神の計画を実現されるイエス様

1 封印された巻物

1 絶対的な支配の印

- ・神の行なう手

- ・勝利を得る手

- ・天に引き上げられたイエス様

2 絶望的な悲しみ

- ・天にもいない

- ・地上にもいない

- ・地の下にもいない

3 大いなる勝利者を指し示すもの

- ・ユダ族の獅子

- ・ダビデの根

- ・ほふられたと見える小羊

2 小羊の死の意味と与えられた権威

1 力を得る手段

2 終わりにいたるまでの愛

3 全世界に対する裁き

3 小羊への礼拝

1 四つの生き物と二十四人の長老たちの礼拝

- ・新しい歌の根拠

- ・新しい歌の内容

- ・新しい歌のテキスト

2 多くの御使いたちの礼拝

3 あらゆる造られたものたちの礼拝

¹ また、私は、御座にすわつておられる方の右の手に巻き物があるのを見た。それは内側にも外側にも文字が書きしるされ、七つの封印で封じられていた。² また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」³ と言つてゐるのを見た。

³ しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻き物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかつた。⁴ 巷き物を開くのにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかつたので、私は激しく泣いていた。⁵ すると、長老のひとりが、私は言つた。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」⁶

さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立つてゐるのを見た。これに七つの角と七つの目があつた。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御靈である。

⁷ 小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取つた。彼が巻き物を受け取つたとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱいはいつた金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。

⁸ 彼らは、新しい歌を歌つて言つた。「あなたは、巻き物を受け取つて、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司

とされました。彼らは地上を治めるのです。

¹¹ また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であつた。¹² 彼らは大声で言つた。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」¹³ また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

また、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拝んだ。

(默示 5・1～14)

「ここから默示録第5章の学びがはじまりますが、まず5章と4章が密接に関連していることに注目しなければなりません。4章は5章の序論のようなもので、4章では御座におられるのは「父なる神」お一人だけのような印象を受けますが、5章になると御座には「父なる神」だけでなく、「子なる神、主イエス・キリスト」もいつしょにおられることができます。父なる神は御子イエス・キリストによつて世界を創造され、御子イエス・キリストによつて救いをもたらし、そしてきょうも、御子イエス・キリストによつて世界を支配しておられます。ですからこの4章と5章の表題は「御座におられる小羊」というのが最も適切だといえます。また、「世界史の転換をもたらしたキリストの犠牲」、「神のご計画を実現するキリスト」ということもできるでしょう。

これから、5章を「封印された卷物」、「小羊の死の意味と与えられた権威」、「小羊への礼拝」の三つに分けて見ていきましょう。

1 封印された卷物

はじめに、「封印された卷物」（1～5節）が何を意味しているのかを考えましょう。この卷物は絶対的な支配の印であり、ヨハネの激しい嘆きを招いたもとであり、大きな勝利者を指示示すものだと言えます。

黙示録4章で最も重要な言葉は「御座」でしたが、5章では「卷物」という言葉が大切です。エゼキエル書1・2章でも、はじめの1章では「御座」のことが述べられ、2章で「卷物」のことが書かれていて、ことと似たような書き方がされています。

この「封印された卷物」とは、この地の所有権が悪魔の手から主イエス・キリストの手に移ったことを証明する法律的文書のようなものです。

アダムの堕落以来、悪魔はこの地の所有権を握り、自分のものにし、「この世の君」と呼ばれています。

今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

（マタイ 4・8、9）

「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。」

(ヨハネ 12・31)

「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」(ヨハネ 16・11)

そなばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかる福音の光を輝かせないようにしているのです。(IIコリント 4・4)

しかし、イエス様は十字架上の死によってその代価を支払われ、この世を贖つてくださいました。イエス様はご自身の死を通して、悪魔の手から、人間だけではなくこの地も買い取り、贖われたのです。そしていまや、信じる者たちには聖靈という「証印」が押され、御国を受け継ぐことが保証されています。

またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖靈をもつて証印を押されました。聖靈は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

(エペソ 1・13、14)

そして、地に造られたもの全体が、主なる神のものとされるのを待ち望んでいると、聖書に記

されています。

私たちには、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御靈の初穂をいただいている私たち自身も、心中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

(ローマ 8・22、23)

エレミヤ書32章を見ると、「封印された巻物」がどのように使われていたのかがわかります。エルサレムがバビロンの軍勢に包囲されていたときのことです。その中にあってエレミヤは、敵の手に渡つていた畠を買い戻すよう主に命じられました。エレミヤはその畠の相続権を持つていたので、代価を払つて畠を買い戻すことができたのです。このときエレミヤは、封印されたものと封印されないものと、一枚の購入証書に署名しなければなりませんでした。「封印された購入証書」はその畠の所有権を証明するもので、畠を買った人が受け取りました。そして、封印を破るとき、その「封印された購入証書」の持ち主が実際に畠を使うことができました。

創世記のはじめ、この地はアダムに与えられ、アダムによつて耕され、アダムに治められるようになっていました。この地はアダムを通して神の御支配が明らかにされるはずの所でした。地は美しく、秩序があり、全てが目的にかなつていました。あらゆるもののが一つの目標に向かつて努力し、力の釣り合いがとれていて、お互に助け合うことができました。ところが、アダムが悪魔の奴隸となつたために、この地は悪魔に支配されるようになつてしまつたのです。動物や植

物や人間の病気、虚しさ、死、生活のための闘い、地震、噴火、洪水など、これらはすべて悪魔がこの地を支配するようになつた結果なのです。

イエス様は、悪魔からその支配権を奪い返すためにこの地上に来られました。イエス様はご自身の貴い血潮によって、この世を贖われたのです。イエス様は、偉大な救い主であり、この地の相続権を持つ唯一のお方です。次の聖句はイエス様に対して言われたみことばです。

「わたしは國々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」

このみことばが言おうとしているのは、神が神の国をイエス・キリストを通してこの地上に打ち建てられるということです。ダニエルもすでに「終わりの時」、「神の国の実現」を預言していました。そして彼もまたその書物を終わりの時まで封じておくことが命じられていました。

「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このみことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」…

私はこれを聞いたが、悟ることができなかつた。そこで、私は尋ねた。「わが主よ。この終わりは、どうなるのでしよう。」彼は言つた。「ダニエルよ。行け。このみことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。」

(ダニエル 12・4、8、9)

黙示録5章では、卷物は神の御手の中におかれています。御座におられる方の手の中にあるのです。これは神のご支配を意味しています。卷物が神の御手の中にあることは、予言者を通して人々に与えられていた神の約束がご自身の手によって成就する時、つまり「終わりの時」がきたことを意味しています。

エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の靈がとどまる。それは知恵と悟りの靈、はかりごとと能力の靈、主を知る知識と主を恐れる靈である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによつてさばかず、その耳の聞くところによつて判決を下さず、正義をもつて寄るべのない者をさばき、公正をもつて国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。正義はその腰の帶となり、眞実はその胸の帶となる。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追つていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。

その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

(イザヤ 11・1~10)

主なる神はご自分の御座をこの地上に与えようとなさっています。悪魔の手の中にあるこの世を贖い出し、再びもとの秩序の中におこうとされているのです。

ユダヤ人の伝承によると、エルサレムが破壊された後、神はその右の手を背中の後ろに回してものはや何もなさらないのだそうです。

なぜ、あなたは御手を、右の御手を、引っ込めておられるのですか。その手をふところから出して彼らを滅ぼし尽くしてください。

（詩篇 74・11）

しかし、ここでは神はその御手を前方に差し出しておられ、働くとしておられます。大きなことが起こりつつあるのです。「終わりの時」が始まろうとしているのです。「終わりの時」は、言いかえれば「完成の時」です。

主の右の手について三つのことが言えます。

まず、主の「右の手」は、ことを行われる手です。

また、右手に七つの星を持ち、「口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。：エペソにある教会の御使いに書き送れ。「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。：」

（黙示 1・16、2・1）

また、主の「右の手」は、勝利を得る手です。イエス様は十字架上で「完了した」（ヨハネ19・30）と言わされました。イエス様は完全な救いを成就されました。

喜びと救いの声は、正しい者の幕屋のうちにある。主の右の手は力ある働きをする。

(詩篇 118・15)

さらに、主の「右の手」は、引き上げられたイエス様です。イエス様は天に引き上げられ、すべての名にまさる名を与えられておられます。

ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖靈を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖靈をお注ぎになつたのです。

(使徒 2・33)

すべてが見えるように、主なる神の御手の中に巻物がおかれています。主なる神はいま、大きなことを行なおうとなさつておられます。そのために今、主なる神はこの巻物を誰かに与えようとしておられます。誰かにご自分の計画を成就させようとしておられるのです。

この巻物は内側にも外側にも字が書かれ、七つの封印で閉じられています。同じような「巻物」がエゼキエル書の中にもでてきます。

「人の子よ。わたしがあなたに語ることを聞け。反逆の家のようにあなたは逆らつてはならない。あなたの口を大きく開いて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。」そこで私が見ると、なんと、私のほうに手が伸ばされていて、その中に一つの巻き物があつた。それが私の前で広げられると、その表にも裏にも字が書いてあって、哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあつた。

(エゼキエル 2・8～10)

この巻物の中に書かれてあつたのは、哀歌と嘆きと悲しみの言葉だつたと記されています。黙示録6章以降の章でもそれと似たことが書かれていますが、巻物の扱い方には違いがあります。エゼキエル書の中では封印はそのままで破られてはいませんでした。そこでは、記すこと、認識することが重要なのであって、封印を解くことができるかどうかは問題ではなかつたのです。エゼキエルは巻物を食べなければなりませんでした。それによつて彼は知識を得て、預言者となつたのです。

「巻物」は、昔は二種類の書き方がありました。内側には正式なテキストが細かく書かれ、外側には電報の文章のような簡単な文が書かれてあり、その文字は誰にでも読めるようになつていました。ですから「巻物」の封印が解かることは、未知だつたことが明らかにされるということではなく、巻物に書かれていることが実行に移されることを意味していました。

黙示録5章でも、巻物に書かれている内容に興味をひかれている者はありません。御座の周囲にいる者たちは、巻物に書かれていることが「何であるか」ということに興味を持つていたのではなく、巻物の封印を解く者は「誰か」ということに関心をもつっていたのです。ここでは新しい知識が問題なのではなく、神のご計画の成就ということが問題だつたのです。

巻物には次のようなことが書かれています。悪魔が追放され、罪が贖われ、もはや誰も罪の奴隸、自我の奴隸でなくなつたということ、自由を望むすべての者が自由になるということです。きょうも私たちは、失われた罪人としてイエス様のみもとに行くことができます。自分の罪を告白し、自分の生活の支配権をイエス様に明け渡し、自由にしていただくことができます。そし

3-3 御座におられる神と小羊

て、救いのみわざをなしとげてくださったイエス様に感謝を捧げるならば、イエス様は決して私たちを拒ません。

「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」

(ヨハネ 6・37)

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

(マタイ 11・28)

「ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

(ヨハネ 8・36)

イエス様の救いのみわざにより、すべての被造物の救いが成就したのです。そして、イエス様の救いと勝利と栄光が現わされるときが近づいています。

封印が破られるということは、悪魔が滅ぼされ、イエス様が完全な勝利を得られることを意味しています。

昔、王がその位に就くときには、渡された巻物を手に持っていました。

こうしてエホヤダは、王の子を連れ出し、彼に王冠をかぶらせ、さとしの書を渡した。

彼らは彼を王と宣言した。そして、彼に油をそそぎ、手をたたいて、「王さま。ばんざい。」

と叫んだ。

そして封印が破られ、王の家臣がその巻物を大きな声で読み上げると、まわりで王に仕えている人々は皆いつせいにひざまづいて「万歳」を唱えました。この時、王の即位が全ての人々に正式に認められたのです。ですから中世のローマの皇帝たちは、手に巻物を持った絵を好んで描かせていました。

黙示録5章1、2節では、神が巻物を誰かに与えようとしておられることがわかります。巻物を受け取る者が現われ、巻物の封印が破られるとき、「終わりの時代」の全てが始まるのです。

2 絶望的な悲しみ

さて、ここで問題なのは、「誰」が封印を解くことができるかです。「誰」が被造物を救い、解放することができるのでしょうか。「誰」が真の平和を地上にもたらすことができるのでしょうか。「誰」に神の永遠のご計画を成就する力があるのでしょうか。

「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言う御使いの呼びかけに応答できる者は一人もなく、そこには沈黙だけがありました。つまり「天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかつた」、「巻物を開くのにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかつた」のです。「だれひとりできる者はいない」、「だれひとり見ることのできる者はいない」、「だれも見つからない」と書かれてい

ます。ふさわしい人が見つからなかつたということは、封印を解くことのできる人が誰もいないという意味です。そのため、ヨハネはどうしていいかわからなくなつて「激しく泣いて」いたのです。

ヨハネの時代は、ローマ皇帝ドミティアヌスが人々に平和と幸せとを約束し、皇帝への崇拜を強要していました。しかし、彼は実際はどのような人物だったでしょうか。ドミティアヌスは神のご計画を成就できるような人、聖潔で、正しい、清い人だったでしょうか。神のご計画の成就是、知識や意志によるのではなく、実現できる力があるかないかが問題です。人間はあるいは、「世界はどうすればよくなるか」という知識を持っているかもしません。しかし、誰もこれを本当に実現する力を持つてはいりません。

ガブリエルやミカエルという天使たちでさえ、神のご計画を実現することはできませんでした。神によつて地から取り去られたエノクも、神の友とされたアブラハムも、神の御心にかなつたと言われたダビデのような信仰の人さえも、神のご計画を実現することはできなかつたのです。

この世は神の御心に反した状態にあります。悪魔と悪霊とが神の御心を否定するよう働いています。誰が神のご計画を成就することができるのでしょうか。多くの人間がローマの皇帝のようにそれを約束しますが、誰も実現することはできません。

ローマの皇帝は「あなたはそれにふさわしい者である」と國民からあいさつを受けていました。しかし、その当時のキリスト者は眞実を見抜いて、ローマの皇帝がそのような者ではないことをあえて表明したのです。

古い書物に次のような言葉が残されています。「王が町に入つてくるときに、人々は次のように言つたものである。『彼は強い』と。人々はそう言うが、われわれキリスト者は『人間にすぎない彼は弱い』と言う。人々が『彼は富んでいる』と言つても、われわれは『彼は貧しい』と言い、人々が『彼は物知りである』と言えば、われわれは『彼は無知である』と言う。人々が『彼は慈悲深い』と言えば、われわれは『彼は残忍である』と言い、人々が『彼は正しく忠実である』と言えば、われわれは『それらがみな嘘で、彼は偽善者である』と言う。」

聖書には「善を行なう人はいない。」（ローマ3・12）と書いてあります。すべての人が罪人で、「義人はいない。ひとりもいない。」（ローマ3・10）と述べています。誰も自分自身を救うことができず、誰も自分自身をよりよくすることができないのです。だれもこの世の中に平和と調和の国を実現することなどできません。

当時このことを知つて絶望し、またノイローゼになつてしまつた人々がいました。ヨハネは封印を解く人がいなかつたので涙を流しました。ヨハネはどうすればいいのかわからなくなつて、うちのめされてしまいました。「これから先も、この地は悪魔の支配下におかれなければならないのだろうか」「被造物のうめきは、まだ続かなければならぬのだろうか」。ヨハネは深い絶望的な悲しみに捕らえられ、この世界が呪われていると思いました。多くの努力、多くの苦しみ、多くの涙にもかかわらず、この世は少しも良くならない。この世は闘争と降伏、勝利と敗北、得ることと失うこと、抱くことと叱ること、生きることと死ぬことの、意味のない繰り返しのようと思えたのです。いろいろな事が起りますが、いつも同じ虚しい繰り返しのように思えたので

す。「なぜ、こうなのだろう」。ヨハネはこの現実を見、苦惱し、激しく泣いたのです。

私たちキリスト者もまた、この世の苦しみと、この世の矛盾の下で悩んでいます。しかし、主に救われた人々は、ただ悩んでいるだけではありません。「封印を解くのにふさわしい者」が人間のうちにはいないということを知つたなら、人は主なる神のみもとに立ち返らなければなりません。真の「救い」は人間によつてではなく、神であるイエス・キリストによつてのみ、もたらされるものだからです。

放蕩息子はまず、本心に立ち返り、そして、父の家へ帰つてきました。悔い改めなしには、罪との断絶なしには、聖靈の働きによる回心なしには、誰も救われません。

3 大いなる勝利者を指し示すもの

神の手にある封印された巻物は、まず、神の絶対的な支配権を表わしました。次に、ヨハネを恐ろしい困惑、絶望的な悲しみの中に陥れました。なぜなら、封印をとくのにふさわしい者が全く見つからなかつたからです。しかし、それに続いて、神の手にある封印された巻物は大いなる勝利者を指し示しました。黙示録の中では、イエス様に対していろいろな呼び方がされています。例えば、「忠実なる証人」、「アルファでありオメガである方」、「万物の支配者」、「死者の中から最初によみがえられた方」、「地の王」、「神の子」、「王の王」、「主の主」などです。

5章では、この大いなる勝利者に対して、「ユダ族のしし」、「ダビデの根」、「ほふられたと見える小羊」という三つの呼び名が与えられています。ヨハネは「泣いてはいけない。見なさい。ユ

ダ族から出たし、ダビデの根が勝利を得た…」（黙示5・5）という声を聞いたのです。勝利はすでに得られました。

次に、これらの三つの呼び名について考えてみましょう。

「ユダ族のしし」という名前は、まだ見ることはできないけれど約束されている救い主に与えられた名前です（創世記49・8～10）。こう呼ばれることによつて、彼がこの地を解放するよう約束された者であることがわかります。ユダ族は王家の部族で、イエスの母マリヤはこの部族の出身でした。ダビデもまたユダ族の出身で、神の敵であるペリシテ人を打ち破りました。しかしここでは、ダビデよりも偉大なお方、イエス・キリストのことが示されています。イエス・キリストは「ユダ族のしし」であり、十字架上で悪魔を打ち破り、悪魔からその力を奪いとるために死なれました。イエス様の十字架の死は、この世の目からみれば「敗北」のように見えますが、実は、悪魔に対し永遠の勝利を得るためのものでした。

神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。

（コロサイ 2・15）

イエス・キリストの犠牲の死は、父なる神が悪魔の使いの蛇に言い渡されたこと、「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼（救い主）は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとにかみつく。」（創世記3・15）という約束の成就でした。これは、悪魔に対する世界史上で最大の闘いでした。イエス様がご自身のいのちを犠牲

になさることによつて、世界と被造物は救われたのです。

「ユダ族のしし」という呼び名は、この方が再臨なさることを指し示すものであります。イエス様は「王の王」として再びこの世に来られます。

その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

(黙示 19・16)

イエス様は再臨の後、イスラエルと全世界とを祝福し、敵を滅ぼされるのです。「ユダ族のしし」であられるイエス様が、神の国をこの地上に打ち建てられるのです。

イエス様は「ダビデの根」とも呼ばれています。これはダビデの子孫としてのイエス様を指しているではありません。イエス様は肉から言えば、ダビデの子孫ですが、ダビデの後から来られた者ではなく、ダビデの前にすでにおられた方でした。

その日、エッサイの根は、國々の民の旗として立ち、國々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

(イザヤ 11・10)

さらにまた、イザヤがこう言つています。「エッサイの根が起ころる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける。」 (ローマ 15・12)

イエス様は「根」であつて、そこからダビデが生まれたのです。これによつて人類誕生以前にイ

エス様がおられたことがわかります。「ダビデの根」であるイエス・キリストは、ダビデよりも前から存在しておられ、ダビデにとつても主なのです。

主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。」

(詩篇 110・1)

すべてのものはイエス様を通して造られたのです。

なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によつて造られたのです。万物は、御子によつて造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあつて成り立つています。

(コロサイ 1・16、17)

すべてのものは、この方によつて造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。∴この方はもとから世におられ、世はこの方によつて造られたのに、世はこの方を知らなかつた。

(ヨハネ 1・3、10)

「ダビデの根」という言葉によつて、私たちは「神としてのイエス様」を知ることができ、「ダビデの若枝」という呼び方によつて、「人の姿となられたイエス様」を知ることができます。

エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。(イザヤ 11・1)

「神」として、また「人の姿」となつて、イエス様は悪魔を打ち破られたのです。このイエス様こそが封印を解くのにふさわしいお方であり、神のご計画を実現することができる唯一のお方です。イエス様だけが平和を、そして天国を、この地上に建てあげることがおできになるのです。

イエス様は大いなる勝利者として神のご支配を実現されるのです。

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」
（黙示 3・21）

「わたしに求めよ。わたしは國々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち碎き、焼き物の器のように粉々にする。」それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。

（詩篇 2・8～11）

イエス様は来るべき世の支配者です。イエス様は神のご計画を実現なさる権利と力を持つておられるお方です。

ヨハネは「ほふられたと見える小羊」が立つていたと言つています。あとでもつと詳しくこのことを学びますが、黙示録の中で二十八回、イエス様は「小羊」と呼ばれています。イエス様は私たちにとって、「過越の羊」です。つまり、イエス様は私たちの身代わりとして罪の裁きをご自身でお受けになつてくださいり、呪いを受けてくださつたのです。イエス様は私たちと被造物とを

悪魔の支配下から贖い出すために犠牲になり、血を流してくださつたのです。

この「小羊」に関する三人の証しを読んで見ましょう。

パウロは次のように語りました。

新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほぶられたからです。

(1コリント 5・7)

ペテロはこのように証しました。

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わつたむなし生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。

(1ペテロ 1・18、19)

ヨハネは次のように挨拶を送りました。

また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださつた方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。

(黙示 1・5、6)

小羊の死の意味と与えられた権威

⁶さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があつた。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御靈である。小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取つた。

(默示 5・6、7)

彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のよう⁷に育つた。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々から⁸のけ者にされ、悲しみの人で病を知つていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかつた。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになつた。だが、私たちは思つた。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によつて、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のよう⁹にさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほぶり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙つている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さ

ばきによつて、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思つたことだろう。彼がわざしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかつたが。

(イザヤ 53・2～9)

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗つて来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれたこの方に、主権と光榮と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになつた。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その國は滅びることがない。

(ダニエル 7・13、14)

黙示録5章6、7節では、勝利者としての「小羊」の完全な権威を見ることができます。「四つの生き物がいる」御座と長老たちの間に、小羊であるイエス様がおられます。聖靈に満たされ、力に満たされたイエス様が中心におられ、その権威を見ることがあります。ここでは何が中心であるかということが強調されているのです。

イエス様は常に中心におられました。ゴルゴダで一人の罪人といつしょに十字架につけられたときも、イエス様はその真中におられました。イエス様には罪はありませんでしたが、私たちの罪のために神の裁きと刑罰とをお受けになられたのです。そしてイエス様が復活なさったとき、弟子たちは閉めきつた部屋に集まつていましたが、イエス様が突然彼らの真中に現われ、彼らに

手と足とにある釘の跡をお示しになりました。彼らに「自身の愛とご自分が死んで約束のとおり復活されたことを知らされたのです。

今日もなお、イエス様は、ご自身の名によって人々が集まっている所では、その真中に立つておられます。

「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

(マタイ 18・19、20)

この箇所で、ヨハネは「ユダ族から出たしし」、全世界の権威を持つておられるイエス様が勝利を得て卷物を受け取り、そして、卷物が開かれるようになつたことを聞きました。ヨハネはそのユダ族のししを見ようと後ろを振り向きましたが、彼が見たのは「しし」ではなく、「小羊」でした。その小羊はほぶられたと思われる傷を負つていましたが、死んではいませんでした。地に横たわっていたのではなく、しっかりと立つていたのです。

この「ほぶられたと見える小羊」が意味している、三つのことを考えてみたいと思います。それは「力を得る手段」であり、また「終わりにいたるまでの愛」の表われであり、「全世界に対する裁き」です。

捧げられた小羊がほふられることは、イエス様が力の満たしに至る道でした。イエス様は「ユダ族のしし」でしたが、イエス様に勝利が与えられたのはイエス様を「しし」にするためではなかったのです。多くの国々はその国の象徴として「しし」とか「鷲」とか「熊」のようなしるしを選びます。ししのような性格をもつた支配者はいつの時代にもいますが、このような性格の支配者が国を統治すれば、流血と涙が一層大きくなってしまうのです。イエス様はししのように力によってではなく、犠牲の供え物である「小羊」として、ご自身がいけにえの動物となることによって、世界の歴史の転換をなしとげられたのです。

イエス様はご自身の犠牲の死を通して、人と神との間にある罪の壁を取り除かれました。イエス様は「小羊」として勝利を得られたのです。この世では「力」を使うことによつて人は勝利を得ますが、イエス様はご自分を「犠牲」とし、「引き渡されること」を通して勝利を得られたのです。ユダ族のししが供え物の小羊のようにはふられ、いのちの君であられるイエス様が犠牲になられたのです。イエス様は死の苦しみを受け、そして死に打ち勝たれたので、世界の支配権を獲得なさつたのです。

その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言つた。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずで

(ヨハネ 1・29)

はなかつたのですか。」

(ルカ 24・26)

彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあつた。「ほふり場に連れて行かれる羊のよう、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。」

(使徒 8・32)

キリストは罪を犯したことなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。のしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためにです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

(Iペテロ 2・22、24)

新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにはぶられたからです。

(Iコリント 5・7)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わつたむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い

血によつたのです。

(ペテロ 1・18、19)

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

(ヘブル 12・2)

2 終わりにいたるまでの愛

さて、過越の祭りの前に、この世を去つて父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。

(ヨハネ 13・1)

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によつて私たちを罪から解き放ち、：

(黙示 1・5)

ほぶられた小羊、イエス様の死は、愛の実践的な現われを示しています。イエス様は誰の血も流されませんでした。イエス様は神様だけがおできになる仕方で人間を愛されたのです。イエス様は愛のゆえに死なれ、その愛はいつまでも絶えることがありません。イエス様は愛のゆえにご自身を犠牲として引き渡され、死なれたのです。十字架につかれたときにイエス様は「父よ。彼

「お赦しください」と祈られました。これよりも大きな愛はほかにありません。この愛は同時に最も大きな力でもあります。

3 全世界に対する裁き

イエス様の死は、力の満たしと愛の現われであるばかりでなく、全世界に対する裁きでもありました。

イエス様は罪を知らないお方でした。聖なるお方であるイエス様が、天で所有しておられたすべての栄光と力を捨ててこの地上に下られたのです。それは人を支配するためではなく、人に仕えるためでした。このイエス様が十字架につけられたのです。

このことの中に、この世界の本当の姿が現われています。イエス様の十字架と死はこの世が呪われた世界であることを語っているのです。神はイエス様の十字架と死を通して、この世と悪魔とを捨て去り、勝利を得られたのです。

私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対しテ十字架につけられたのです。

(ガラテヤ 6・14)

この世には正義、自由、平和、真理などのために自分を犠牲にする人々がいますが、神の目から見るとそれらの人々は「この世に属する人々」でしかありません。神はイエス様の死を通して、

悪魔によって支配されているこの世界を打ち破られました。イエス様の勝利はこの世界に対する裁きを意味しているのです。自分の罪を明かにし、これを言い表わして罪を離れる人々は、主の裁きを自分の身に受けることがなく、「過越」を経験するのです。

私たちは始めに「小羊」が真中に立つておられるということを学びました。一人の御使いが「この巻物を解くのにふさわしい者は誰か」と叫んだのですが、それにふさわしい人は一人もいませんでした。そのため、ヨハネは泣いていました。彼はどうしていいかわからなかつたのです。その時すでに、イエス様はそこにおられましたが、すぐにご自分を現わし「わたしがその者である。わたしが勝利を得た」とは言われませんでした。なぜおっしゃらなかつたのでしょうか。それは、イエス様の本性に反することだったからです。小羊は決して「わたし」、「わたし」、「わたし」と、「わたし」の名譽を求めず、「あなた」の御名のために、と言われます。小羊は「わたしの願い」と言わずに、「あなたのみ旨が」、「あなたのみこころが」と言われます。小羊は「わたしの報いが」と言わずに、「あなたの報いが」と言われます。

小羊であられるイエス様がこのような態度をとられる方だからこそ、小羊は巻物をとり、これを解くのにふさわしいお方なのです。イエス様は神のご計画を成就し、神の王国をこの地上に建設するのにふさわしいお方なのです。イエス様は武器をもたずに勝利を得られ、他の人々の血を流すことをなさいませんでした。ご自身の血と死を通して、イエス様は勝利を得られたのです。イエス様の勝利は完全なものでした。聖書には、イエス様が勝利を得るために「再び」戦うであろうとか、第二の戦いをなさるなどとはどこにも書いてありません。

「ほふられたと見える小羊」は七つの角をもつています。「角」は常に力の象徴です。七つは完全数です。ですからイエス様は全能にして完全な権威をもつたお方なのです。

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いつさいの権威が与えられています。」

(マタイ 28・18)

そこにわたしはダビデのために、一つの角を生えさせよう。わたしは、わたしに油そがれた者のために、一つのともしびを備えている。

(詩篇 132・17)

ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた。

(ルカ 1・68、69)

これは私たちにとって大きな慰めです。なぜなら私たちは、たとえどんな権力を持つてゐる者にも、またどのようなことがあつても引き渡されることなく、イエス様こそが私たちの主であるからです。

小羊はまた七つの目をもつておられます。これはイエス様がこの世界に起ることを全てご存じで、知恵に満ちておられることを表わしています。

見よ。わたしがヨシュアの前に置いた石。その一つの石の上に七つの目があり、見よ、わたしはそれに彫り物を刻む。——万軍の主の御告げ。—— (ゼカリヤ 3・9)

だが、その日を小さな事としてさげすんだのか。これらは、ゼルバベルの手にある下
げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を行き巡る主の目である。

(ゼカリヤ 4・10)

なぜなら、神はみこころによつて、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、…

(コロサイ 1・19)

神の力も知恵も、すべてがイエス様の内に宿っています。それはイエス様がこの地上に神のご
計画を成就なさるためです。どんな罪もイエス様の目からおおい隠されることはあります。イ
エス様の目は罪を見逃さず、これを明るみに引き出すばかりではなく、これらの罪を赦そうとな
さっている目です。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦
し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(ヨハネ 1・9)

けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によつて明らかにされます。

(エペソ 5・13)

主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵れますように。

(民数記 6・25)

神よ。私たちをもとに返し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。：万軍の神よ。私たちをもとに返し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。：万軍の神、主よ。私たちをもとに返し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます。

（詩篇 80・3、7、19）

さて、「ほぶられた小羊」イエス様の手に巻物が渡されました。これは、神の知恵と力をもつておられるイエス様こそが、神のこの地上に対する裁きを神のご計画通りに行なうのにふさわしいお方だということです。悪魔は討ち滅ぼされましたが、この世はまだ悪魔の支配を受けています。将来において最後の裁きがくだされるときに、そして、悪魔が御使いによつて縛りあげられるときに（黙示 20・1～3）、そして神の国がこの地上に実現されるときに、はじめて平和と正義とが支配するようになるのです。

十字架につけられ復活されたイエス様、「ほぶられた小羊」が、釘を刺された手で巻物を受け取られました。このとき、天に強い緊張感が走りました。「誰もできなかつたことを小羊がなしとげられた」という驚きです。そしてその驚きはすぐに、喜びの声に変わりました。巻物が小羊の手にのせられました。小羊は巻物を受け取りました。この巻物といつしょに全世界がイエス様の手の中におさめられたのです。イエス様が世界の歴史の主なのです。

釘を刺されたその手が、巻物を持つていて目に留めましょう。十字架に釘づけられた小羊こそが、偽りのない愛の方であり、絶えることのない愛の持ち主であることを意味しているか

らです。黙示録の6章から「世界の審判」が始まりますが、その中で、私たちは「愛のゆえにほふられた小羊の手の中に、私たちと世界がおかれている」ことを、しっかりと心に留めておきましょう。

すると、長老のひとりが、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」⁵さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる。——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があった。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御靈である。

(黙示 5・5、6)

また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によつて私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。

(黙示 1・5、6)

ヨハネは、神の御座の真中にいる小羊と、その周りに長老たち、生き物たち、御使いたちといつしょに、全ての者たちが集まっているのを見ました。全てのものが、小羊の周りに引き寄せられているのです。全てのものが小羊の周りで光を得、全てのものが小羊によつて治められているの

です。

私たちの場合もこれと同じように、小羊イエス様が中心におられるでしょうか。神は御座にまで小羊を引き上げられたのです。私たちもまた「ほぶられた小羊」を生活の中心に置こうではありませんか。

なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によつて造られたのです。万物は、御子によつて造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあつて成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めてであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによつて、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によつて平和をつくり、御子によつて万物を、ご自分と和解させてくださつたからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によつて和解させてくださつたのです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからにおいて、しかもその死によつて、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

(コロサイ 1・16～22)

3 小羊への礼拝

私たちは今まで、どのようにして御座におられる小羊に権威が与えられたかということを見てきました。

小羊が巻物を手に取つてからは、礼拝がはじまります。神の書物といつしょに世界の運命がイエス様の手の中におされたのです。今や神のご計画が実現される時がきました。ご自身の血を流された小羊こそが救い主であり、死を克服したお方であり、そして世界の支配者なのです。このお方に對して礼拝が捧げられるのです。今すべてのものがこのお方の足元にひれ伏し、このお方を賛美するのです。

ヨハネの時代に默示録を読んだ人々は、ここを読んだときつと、皇帝が王位につくときのありますを思い浮かべたことでしょう。当時の即位式では、最初に皇帝に直接に仕える人々が礼拝を捧げ、次にそれらを守る人々が礼拝を捧げ、そのあとで帝国に住むすべての人々が礼拝を捧げました。この默示録の箇所でも、はじめに御座の最も近くにいた者たち、つまり、四つの生き物と二十四人の長老たちが主に礼拝を捧げました。一番目に天の軍勢たちが、三番目にすべての造られたものたちが礼拝を捧げたのです。

これらの三つの群れの間には、はつきりとした違いがあります。つまり、第一の群れが少なく、第二の群れがそれよりも多く、第三の群れが最も多數です。第一の群れの人々を、ヨハネはよく見ることができ、その声もまたよく聞こえました。第一の群れの人々の姿はよく見ることができなくなりましたが、声はよく聞こえたのです。第三の群れの人々の礼拝になると、ヨハネはも

はや全く見ることができませんでしたが、それでもその声はよく聞くことができたのです。

第一の群れの人々が礼拝をリードし、第二の群れの人々がこれをくり返し、第三の群れの人々がこれに賛同したのです。さらに、これらの三つの群れが小羊に呼びかけたその呼びかけ方にも違いがあります。第一の人々は「あなたがふさわしい方です」、第二と第三の人々は「彼がふさわしい方です」と呼びかけています。私たちはこれらの三つの群れについてさらに詳しく見てみましょう。

1 四つの生き物と二十四人の長老たちの礼拝

四つの生き物と二十四人の長老たちは、御座の一番近くにいました。「四つの生き物」とは、4章に記された神の御座の中央と回りにいた御使いの頭たちです。これらの御使いの頭たちは、神の支配と栄光と聖さを表わす者たちでした。「二十四人の長老たち」は、天に引き上げられ、ほうびを与えられた教会を示しています。彼らは白い衣を着ています。それは彼らが小羊の血で着物を洗われたばかりでなく、彼らが祭司だからです。彼らはさらに「王」でもあります。なぜならば、二十四人の長老たちは、神の御座の回りの座につき、冠をかぶつていたからです（黙示3・21、4・4）。彼らは王としての、また裁くための権威をもって、イエス様と共に支配することになるのです。

あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによつてさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がな

いのですか。私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということを、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありますまい。（Ⅰコリント 6・2、3）

また祭司としての彼らは、「香」のいっぱい入った金の香炉を持つて、小羊の前にひれ伏します。この香は、地にいる聖徒たちの祈りです。

私の祈りが、御前への香として、私が手を上げることが、タバのささげ物として立ち上りますように。

（詩篇 141・2）

天国においては、すべての必要が満たされているので祈る必要がなく、ただ礼拝のみが捧げられます。ですから二十四人の長老たちが持っている金の香炉の中の「香」というのは、地上にあつて大きな患難を通っている信者たちの祈りです。患難の時代にも、まことの信仰を持ち続ける人々はいるのです。

「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにささきをつけないで、いつまでもそのことを放つておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいささきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

（ルカ 18・7、8）

私たちがこの地上にあってしなければならない最も重要なご奉仕とは、「祈りと礼拝」です。主

の願いは、私たちが祈りを通して主と一つになつて支配することです。金の香炉が火の炉を通して作られたと同じように、苦しみと悩みとを通ってきた人々の祈りだけが、世界の歴史を変えることができるのです。自己中心的な祈りは何の役にも立ちません。祈りによって、私たちは神のご計画が成就するよう、共に力を合わせることができるのです。

二十四人の長老たちは歌う人々でもあります。彼らは立琴を鳴らして歌っています。

かつて、旧約の時代に、ネブカデネザル王が造った金の像を拝むときにも立琴が奏でられました。（ダニエル3・5）ローマの皇帝もまた立琴を奏でて崇拜され、彼の前には香さえも焚かれました。「香のいっぱい入った金の鉢」や「立琴」、「歌」という言葉は、このような時代背景があるのです。

さて、これから、「第一の群れが捧げた新しい歌」について考えてみましょう。

「新しい歌」については聖書の中に非常に多く書かれています。（詩篇33・3、40・3、96・1、98・1、144・9、149・1、イザヤ42・10など）私たちは、新しい歌が生まれた根拠、歌の内容、歌詞という三つの点について見てみましょう。

はじめに、なぜ、この歌が「新しい歌」と呼ばれるのでしょうか。それは、この歌が新しく作られたからではなく、「神が新しいことをなさるので」歌われたからです。新しい歌の根拠は神のなさる奇跡です。

黙示録15章3節では、神のしもべモーセの歌と小羊の歌とが歌われています。それはこの二つの歌の間に共通性があるからです。神はその敵に打ち勝たれました。つまり、モーセはエジプト

に対して、イエス様は悪魔に対して打ち勝たれました。また、神は絶対的な王です。モーセの時代には神はご自身が買い取られたイスラエルの民の王であり、現代では、イエス様が、信者たち、つまりイエス様の血をもつて買い取られた民の王です。そして、モーセの時代も、今日も、イエス様に買い取られた者は、神から離れている人々のために生きた証人として奉仕しなければならないのです。

「新しい歌」で大切なのは、人間が何を経験したかではなく、神がなされた奇跡です。「新しい歌」が生まれたのは、神の勝利と神の支配が成就し、救われた民が神への奉仕をするためです。次に、この「新しい歌」の内容で大切なことは何でしょうか。それは、歴史上の一点における神の一時的な勝利ではなく、「最終的な神の勝利」が歌われていることです。新しい歌では、神の最終的な支配と最終的な栄光が主題です。小羊は罪と死と悪魔とに打ち勝たれ、今や、支配しようとおられます。そしてすべてのものは終わりに近づき、神はご栄光を現わそうとしておられます。

では、「新しい歌」の歌詞はどうでしょうか。その歌詞の中で、三つの小羊の尊厳が歌われています。「あなたは巻物を受け取つて、その封印を解くのにふさわしい方です」。そして、「あなたはほぶられて、その血により…人々を贖い」、「この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」というもののです。

巻物を受け取り、そして、封印を解くことは、何を意味しているのでしょうか。それは、今まであつたいかなる宗教、いかなる文化、いかなる政治形態もそれをなしとげることができなかつ

たことをイエス様がなしとげられるということです。つまり、イエス様は「全く新しいことをなしとげられる」のです。

この新しいことは、「罪からの贖い」であり、「神と人との和解」です。すべてのこの世の悩みは、神との分離から起ります。聖なる神と人との間には、罪という壁がでています。罪と咎とが人を神から引き離しているのです。イエス様は、反抗と闇と不安の国から、平和と安息と光の国へと橋を架けられたのです。イエス様はこのことをご自身の血をもつて、ご自身がほふらることを通して、なしとげられました。さらにイエス様は、ただ単に橋を架けられただけではなく、悪魔の奴隸となっていた私たちを贖つて、買い取つてくださったのです。罪を通して、悪魔は私たちの上に力を振ります。しかし、イエス様は、ご自身の血の代価を払つて、私たちを死と罪と悪魔の奴隸の状態から贖い出してくださったのです。

あなたがたは、代価を払つて買い取られたのです。ですから自分のからだをもつて、神の栄光を現わしなさい。

(Iコリント 6・20)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わつたむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。

(Iペテロ 1・18、19)

このことを信じ自分の罪を悔い改めて感謝を捧げるときに、私たちは解放を体験することができます

ます。イエス様によつて解放された人は、本当に自由になれます。しかしこの自由とは、自分自身の生活のための自由ではなく、イエス様のために生きる自由です。

信仰生活は、主イエス様の血の価値を心の眼で見、そして、それに対して感謝をすることから始まります。血によつて贖われた者だけが、このことに感謝することができます。ですから、まず初めに、自分の罪を認め、それを告白することが必要です。

あらゆる部族、民族、国民の中にイエス様によつて贖われた人々がいます。イエス様の教会は、あらゆる民族の中の救われた人々で構成されていますが、人々の間には眞の一一致があります。これは将来、すべての国民がイエス様の足元に一つになつてひれ伏すときの一つの象徴です。そしてイエス様は、私たちを王とし、祭司としてくださつたのです。

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によつて私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださつた方である。

(黙示　1・5、6)

默示録5章10節に「彼らは地上を治めるのです。」とあるのは、未来における支配を意味するだけではなく、現在においても私たちが祈りを通して主と共に支配していることを意味しています。私たちがイエス様の御手に全てをゆだねるときに、イエス様は奇跡を行なわれます。「イエス様と共に支配する」とは、「イエス様の支配が私たちを通して現わされる」ということです。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださつた方によつて、これらすべてのことの中に

あつても、圧倒的な勝利者となるのです。

(ローマ 8・37)

私は、私を強くしてくださる方によつて、どんなことでもできるのです。

(ピリピ 4・13)

このように、新しい歌は「贖いの歌」です。ですからこの歌は、贖われた者だけが歌います。しかも彼らは歌うだけでは満足せず、立琴やいろいろな楽器を奏でて小羊を讃えているのです。イエス様は贖いの死を通して神の御座の中心につかれましたから、新しい歌は、イエス様が中心です。ですから、「あなた」、「あなた」、「あなた」と書かれているのです。では、反対に「古い歌」とはどうのようなものでしようか。古い歌の歌詞は、古い人のつぶやきと、「私」、「私」、「私」という言葉で満ちています。その結果は「私は何という惨めな人間だろうか」ということにしかなりません。

イエス様こそがあらゆる思いと喜びの中心です。

イエス様こそがすべての被造物の中心です。「新しい歌」において大切なことは、贖われた者が何かを受け取るのではなく、小羊に礼拝を捧げることです。そして、彼らがただ「歌つた」というだけではなく、「今なお歌つている」ということ、つまり、彼らの礼拝が永久的なものであることが大切です。

神はすべての誉れが「自身に帰せられ、同時にそのことによつて人間が祝福を受けることを望

んでおられます。それに反して悪魔の目的は、神の誉れを奪い取り、人から祝福を奪い取ることです。そして、悪魔はアダムをそそのかしてその目的を果たしました。悪魔は人に、「あなたは神のようになる」と語りかけました。アダムとエバはこの悪魔の嘘を信じたのです。その結果、彼らはエデンの園を追われ、神の祝福を失いました。人が悪魔の奴隸となってしまったために、神の誉れもまた失われてしまったのです。

しかし、イエス様が失われた者を救い出し、罪の問題を解決し、悪魔を討ち滅ぼすために、この地上に来てくださいました。イエス様は神の誉れと人の救いのために死んでくださいました、永久に崇められるべきお方なのです。

イエス様は今もなお、失われている人々にそのことをわからせるために眼を開かせ、ご自分のものとし、救いの確信を与え、そして、永遠のいのちを与えるようとしておられます。永遠のいのちを与えられた人は、直ちに新しい歌が歌えるようになるのです。

忘れてはならないのは、新しい歌が、個人的な救いだけを歌うものではなく、悪魔がその支配の座から追い落とされ、神と人との間に新しい創造が行なわれたことに対する賛美だ、ということです。

2 多くの御使いたちの礼拝

今まで四つの生き物と二十四人の長老の礼拝について考えてきましたが、次に、11、12節についてくる、さらに大ぜいの御使いたちの礼拝について考えて見たいと思います。

御使いたちは二十四人の長老たち、つまり、引き上げられた教会のように、小羊に向かって親しみのこもった「あなた」という呼びかけはしていません。彼らは「救いの歌」を歌っているではありません。なぜなら、彼らは救いを必要としなかつたからです。これらの天使たちは、罪と関わりがありませんから、イエス様に贖われる必要はないのです。

主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。

(ヘブル 2・16)

しかし小羊が巻物を手にしたときには、やはりこれらの御使いたちも黙つていることができず、賛美の声をあげたのです。御使いたちは、小羊の尊嚴をほめたたえて次のように言いました。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です」と。ここには神の力あるみわざを表す七つの言葉が続いています。七は完全数ですから、イエス様は、全ての力と栄光と富を持つておられるのです。

ところで、小羊をほめたたえている御使いたちは非常に大ぜいでした。「その数は万の幾万倍、千の幾千倍」でした。この時代、ローマ皇帝を崇拜するに集まつた群衆など、小羊をほめたたえるために集まつた天の御使いたちに比べれば、ほんのとるに足りない数でした。今日生きているすべての人々でさえも、この天の軍勢に比べれば、ほんの少数だとえます。そして御使いたちは、罪を犯さず、清い者であり、神を離れたことのない者たちでした。したがつて、神様は人間がいなくても決して孤独なわけではないのです。それにもかかわらず、神が人間を召しだして、

神の子としてくださるとは、真に驚くべきことです。しかも、神の御前ではこのような御使いたちよりも、二十四人の長老たち、つまり天に引き上げられた教会の方が神により近い所に立つているのです。神に恵みを求める者は、救いを見いだすのです。恵みを求める者は神の子となり、そして、キリストの花嫁となるのです。何という恵み、何という特権でしょうか。聖書には、このような証しがあります。

人間が何者だというので、これをみこころに留められるのでしょうか。人の子が何者だと
いうので、これを願みられるのでしょうか。
(ヘブル 2・6)

3 あらゆる造られたものたちの礼拝

黙示録5章の13節では、御使いたちよりもさらに大ぜいの、すべての造られたものたちが賛美と礼拝を捧げています。天に引き上げられた教会と天の御使いたちを除いた、すべての残りの生き物たち、人や魚や鳥や獸などあらゆる被造物が、第三の群れとなつて礼拝しているのです。

天は喜び、地は、こおどりし、海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。野とその中にあるものはみな、喜び勇め。そのとき、森の木々もみな、主の御前で、喜び歌おう。

(詩篇 96・11、12)

海と、それに満ちているもの。世界と、その中に住むものよ。鳴りとどろけ。

(詩篇 98・7)

地において主をほめたたえよ。海の巨獸よ。すべての淵よ。火よ。電よ。雪よ。煙よ。みことばを行なうあらしよ。山々よ。すべての丘よ。実のなる木よ。すべての杉よ。獣よ。すべての家畜よ。はうものよ。翼のある鳥よ。

(詩篇 148・7～10)

息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。

(詩篇 150・6)

今日、すべての生き物は、悪魔の支配の下でため息をついています。すべての造られたものが解放を望んでいます。まもなくこの希望は叶えられることでしょう。私たちイエス様を信じる者の希望は、言い表すことのできないほど大きな広がりをもっています。個人の救いだけが問題なのではなく、すべての造られたものの解放が問題なのです。小羊の血を通して、あらゆる造られたものの夜の時が過ぎ去るのです。つまり、植物や動物たちの生存競争や病と死、地震や噴火などの天災もなくなります。ローマ人への手紙にある、次のみことばが成就されるのです。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。

(ローマ 8・19～21)

造られたものの定めは、神をほめ賛えるということです。イエス様を通して神のご支配がこの

地上に実現されるときに、すべての造られたものが、ひとりのこらず、神をほめ賛えるのです。

13節で「地の下」とあります。これは、ピリピ人への手紙2章10節にある「地の下」とは意味が違います。黙示録の場合は「地上」を意味し、ピリピ人への手紙の場合は「地獄」を意味しています。黙示録は、地上に住んでいるすべての生物が神を礼拝するようになる、と言つてゐるのであり、ピリピ人への手紙は、地獄へ落ちた者、神なき者たちがキリストの足元にひざまずいて「イエス・キリストは主である」と告白すると書かれているのです。黙示録によれば、空にいるものも、水の中にいるものも、地の上、地の中にいるものも、その全てがキリストの救いを自発的に賛美するようになります。全ての生きているものは、このような賛美を捧げることができ、また捧げることがふさわしいのです。「あらゆる造られたもの」とは、全ての目に見える生物を意味しているのです。悪魔や悪霊のことではありません。

しかし、ひざまずいている者がすべて救われているとは限りません。なぜなら旧約においては、屈服させられた者もひざまずくことがあったからです。

パウロの福音は、「キリストにいます神」でした。同じことをヨハネは「御座にいます方と小羊」という言葉で表現しています。「御座にいます方と小羊」という表現は、黙示録の中にもくり返して用いられています。

山や岩に向かつてこう言つた。「私たちの上に倒れかかつて、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまつてくれ。」

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を持つて、御座と小羊との前に立っていた。彼らは、大声で叫んで言つた。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」

(黙示 7・9、10)

なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取つてくださるのです。」

(黙示 7・17)

また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあつた。

(黙示 14・1)

彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。

(黙示 14・4)

私は、この都の中に神殿を見なかつた。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。都には、これを照らす太陽も月もいらない。という

のは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。　（黙示　21・22、23）

御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、…もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にはあって、そのしもべたちは神に仕え…

（黙示　22・1、3）

終わりの14節を見ると、四つの生き物、つまり天使の頭と、長老たちとの間にも違いがあることがわかります。四つの生き物たちは「アーメン」と言い、世界の支配者であり、救い主である方をほめ賛えているのに對して、長老たちは小羊に対する愛と感謝に満たされていたので、小羊を「ひれ伏して」礼拝したのです。

神から離れた人々は、力と富と知恵と勢いと譽れと栄光と賛美とを自分のものにしようと努力し、それらを誇つて自分自身の名をあげようとなります。しかし、イエス様は、これらのものを永遠のはじめから持つておられたにもかかわらず、すべてを捨て去つてしまふのかたちをとり、かえつて辱めと貧しさとを身に負われました。なぜでしょうか。それは、神の栄光が現わされるためと、私たちの救いのためでした。イエス様はご自分から地上においてこれらの富を捨て去つて、悪魔に打ち勝ち、人間を救い、そして神の栄光を現わされたのです。

しかし今では、イエス様はそのときに捨て去られたこれらすべての力、富、知恵、勢い、譽れ、栄光、賛美を持つておられるのです。

世界の支配者であり救い主であるイエス様は、聖靈によつて私たちの真中におられます。もしイエス様に、私たちの内にある不信仰と疑い、ごうまんと汚れ、自我や不眞実、ねたみなどの封印を破つていただくなれば、私たちの目は、主ご自身の偉大さと力と愛とに向かつて開かれるでしょう。

私たちはイエス様のみもとに来て、赦しを求め、自分の支配権をイエス様に明け渡そうではありますか。そうすれば、私たちの中にイエス様への喜びが起こり、新しい歌をもつてイエス様をほめ賛えるようになることでしょう。

4

小羊をとおしての封印の開封

默示録6章1節から2節まで

神のご計画と裁き

1 裁きの時

2 裁きの根拠

3 裁きを行なうお方

1 白い馬に乗っている者はだれか

2 白い馬に乗っている者が何をしたか

3 結果はどうだったか

また、私は見た。小羊が七つの封印の一つを解いたとき、四つの生き物の一つが、雷の
ような声で「来なさい。」と言うのを私は聞いた。私は見た。見よ。白い馬であつた。そ
れに乗つてゐる者は弓を持つていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得よう
として出て行つた。

(默示 6・1、2)

默示録の第6章については、いくつかの題名が考えられます。「十字架につけられたイエス様
を通じての、神の世界計画の実現」、「小羊をとおしての封印の開封」、または「小羊が支配され
る」などです。

最初に、私たちはこの章の第1節から第2節についてごいっしょに考えて見ましょう。この箇
所は、三つに分けて考えることができます。「裁きの時」、「裁きの根拠」、そして「裁きを行なう
お方」です。

ここで、これまでに学んできたことを、簡単に要約しておきましょう。

1章で、私たちは、イエス・キリストの啓示について学んできました。2章から3章では、い
ろいろな時代の教会をとおしてのイエス様の啓示を見てきました。そして、4章から5章では、
まことの教会が引き上げられた天のありさまとさること、そして神の御座に着いておられる神と
小羊とが、世界を支配しておられるを見できました。

さて6章からは、私たちは神の世界計画の実現、「世界の審判」について、見ていくことにな
ります。

1 裁きの時

この裁きの時は、いつ始まるのでしょうか。默示録の示すところによれば、それは、「恵みの時が終わった後で」、「まことの教会の携挙の後で」、そして「巻物が渡された後で」、世界が揺り動かされ、それとともに始まります。

ルカの福音書4章17節から20節には、イエス様は、ナザレにいたある日、イザヤ書61章1節から2節を朗読なさつたことが書かれています。

すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。

「わたしの上に主の御靈がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。したたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみんなの目がイエスに注がれた。

(ルカ 4・17～20)

しかし、イエス様は、恵みの年を告げる箇所で朗読を中断されました。そしてイザヤ書61章2節の後半に書かれている神の裁きの預言の箇所はお読みにならなかつたのです。なぜイエス様は、その時、神の復讐と裁きの日のことを語られなかつたのでしょうか。それは、

その当時も今も、神の恵みと救いの日が続いているからです。

神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。
(IIコリント 6・2)

恵みの日が続いている間は、「神の復讐と裁きが臨む」とはありません。そのためイエス様は、その箇所をお読みになられなかつたのです。

イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

(マルコ 2・17)

今日もなお、この恵みの時は続いています。イエス様は、今この瞬間もあなたを招いておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」
(マタイ 11・28)

これはイエス様の、「来なさい」という恵みに満ちた招きであり、呼びかけです。ではイエス様は、誰に向かつて「来なさい」と招いておられるのでしょうか。全ての人々、全ての重荷を負っている人々に向かつて、招いておられるのです。誰を「休ませて」くださるので

しようか。全ての疲れた人、重荷を負っている人々を休ませてくださるのです。
あなたはすでに、イエス様のところに来られたでしょうか。あなたはすでに、ご自分の罪を告白して神の救いに感謝なさったでしょうか。これは何よりも大切なことです。

しかし、黙示録6章1節で、四つの生き物の一つが雷のような声で言った「来なさい」という言葉は、まったく別の意味をもつています。ここでの「来なさい」という呼びかけは、恵みのための「来なさい」ではなく、裁きのための「来なさい」です。

ここでは罪人たちが、罪の赦しと、永遠のいのちと、神との平和を得るためにイエス様のおそばに来るよう招かれているではありません。その逆に、馬に乗っている者が、「裁きのために出て來い」というイエス様の命令を受けているのです。

ここでは、十字架につけられ、よみがえり、そして天に上げられたイエス様が、巻物を手にして支配をしておられます。今や、小羊イエス様が封印の一つを解き、最後の審判が始まろうとしているのです。この裁きの時に、行動と決定をなさるお方はただ一人、小羊イエス様だけです。このことは、キリストの血によつて罪を洗われた人々にとっては、何という慰めでしよう。キリストの血が私たちの罪を赦し、裁きの時に私たちを守ってくださるのです。人はキリストの血の下に立つか、小羊の怒りの下に立つかのいずれかです。あなたはどちらの下に立つておられるでしょうか。

最後の裁きは、教会の携挙のあとで、恵みの時の終わりとともに始まります。

2 裁きの根拠

裁きの根拠は何でしょうか。それは、「悪魔の意図を明らかにする」、「悔い改めのない者に対する神の答」、そして「神の計画の実現の手段」の三つです。

私たちはすでに、この巻物の封印を解くことのできるお方、イエス・キリストこそ、唯一正当なこの地上の所有者であり支配者であるという事実を見てきました。そしてそのためにイエス様が支払われた代価は、ご自身の血でした。そしてこの6章からは、どのようにしてイエス様がこの地を支配していかれるかが、私たちに示されていきます。裁きは、神のご計画が成就していくための道なのです。

古い家のかわりに新しい家が建てられる時には、まず古い家が取り壊されなければなりません。裁きをとおして、古い物が壊され、弱点や悪魔の意図が明らかにされるのです。

イエス様は悪魔に全力を出すことを許され、そのあとで悪魔を裁き、そして悪魔を滅ぼし尽くされるのです。イエス様は、外科医が腫れ物が膿むまで待つてからメスを入れるように、ご自身もそのように働かれるのです。

裁きの根拠は、悪魔の意図を明らかにすることです。さらに裁きは、悔い改めをしようとしない人に対するイエス様の答です。

そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かつたからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほう

に来る。その行ないが神にあつてなされたことが明らかにされるためである。

(ヨハネ 3・19～21)

「これは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ。』と彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。」

(ヨハネ 15・25)

神の愛が拒まれるところにおいては、神は無関心でいることがおきにならず、裁きを行なわれるのです。

神のご本質は光であり、神には暗いところがありません。したがって、光と闇とは区別される必要があります。

罪は闇です。したがって、神は隠れた罪を明らかにしようとしておられるのです。神が裁かれる時には、隠れているものが明るみに出されます。ですから神の裁きは、神の愛と矛盾したものではありません。

神のみこころは、人が救われることです。

彼らにこう言え。「わたしは誓つて言う。——神である主の御告げ。——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえつて、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」

(エゼキエル 33・11)

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」
(ルカ 5・32)

「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」
(ルカ 19・10)

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まこと
であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。
(イテモテ 1・15)

神は、すべての人があわれて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

(イテモテ 2・4)

神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によつて世が救われる
ためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じな
かつたので、すでにさばかれている。
(ヨハネ 3・17、18)

救うことと裁くこととは矛盾しません。救うためには裁きが必要です。裁くことなくしては、
救いはありません。神が救おうとなさる時に、神は「分けられる」のです。だれでも、その人

の生活の中で光と闇とがはつきりと分けられていないなら、その人を救うことがおできになりません。したがつてイエス様は、人に、「分けられる」ことと決断することを薦めておられるのです。イエス様を信じて受け入れ、イエス様に感謝する人は、救われ、裁かれることがありません。

御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。

(ヨハネ 3・18)

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移つているのです。」

(ヨハネ 5・24)

しかし、自分の罪をイエス様よりも愛し、イエス様を信じないで、光よりも闇を愛する人は裁きを受けます。イエス様よりも自分のことを愛する人々がそうなのです。そして、このような人に対してもこそ、救い主であるイエス様は救いを与えようと望んでおられます。しかし、人が救いを拒むなら、イエス様は裁き王として臨れます。

「また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子（イエス様）にゆだねられました。…また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。」

(ヨハネ 5・22、27)

「わたし（イエス様）は、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」
(ヨハネ5・30)

イエス様は、あなたを救い、解放し、きよめ、光を与え、助けようとしておられます。しかし、その救いが拒まれるところには、裁きが来るのです。

3 裁きを行なうお方

裁くお方について考える前に、黙示録6章における中心人物が誰であるかを考えてみましよう。それは小羊イエス様です。この章の中に「小羊」という言葉が七回出てきます。したがつてまず、小羊イエス様をよく見ることが大切です。

ヨハネは6章1節で、「私は見た。小羊が…」と言っています。あなたはすでに、小羊イエス様を見られたでしようか。あなたは心の目で、十字架につけられたイエス様を見られたでしようか。イエス様は、あなたの代わりに十字架の上で罪の裁きをお受けになりました。イエス様の貴い血は、あなたのためになされたのです。もしあなたがそれについて感謝したことがないなら、今すぐ、感謝をしてください。

「私は見た。小羊が…」とヨハネは証ししました。私たちが裁きについて考える時、このように小羊イエス様をしっかりと見上げることが大切です。

イエス様は、ほかの誰の血でもなく、イエス様ご自身の血を流されました。イエス様は、全ての人の罪のために死なれ、限りなく罪人を愛しておられます。このイエス様に、全ての権威と力が与えられたのです。

そしてこのイエス様が、封印を解いて神のご計画を成就しようとしておられるのです。神のご計画とは、この地上に神の国を建設することです。

今まで私たちは、黙示録の4章と5章で神の御座の前にささげられた礼拝と賛美とについて見てきました。6章では、私たちはサタンの座のある地上に目を注いでいます。ここで裁きを行なう者は、一見白い馬に乗っている者に見えます。しかし、裁きの主導権は、この馬に乗る者の手の中にあるのではなく、小羊イエス様の手の中にあるのです。

黙示録のこの部分で、まず最初に小羊が巻物の封印を解き、次に四つの生き物の一つが「来なさい」という命令を与え、その後に白い馬に乗る者が出ていく、という順序が特に大切です。

次に、「白い馬に乗っている者はだれか」、「白い馬に乗っている者が何をしたか」、そして「結果はどうだったか」について、考えてみましょう。

1 白い馬に乗っている者はだれか

馬に乗っている者がだれかについては、今までに多くの間違った解釈がなされてきました。多くの人々は、黙示録19章でイエス様が白い馬に乗って現われて来られるために、この6章の場合も乗り手はイエス様だと考えてしまいます。これは間違いです。

ここでは、四つの生き物の一つ、つまり天使の長が、「馬に乗っている者」に向かって、「来なさい」と命令しています。しかし、天使がイエス様に向かって命令を与えるということはありえません。ですから馬に乗っている者はイエス様だという説は、はつきりと間違います。また、馬に乗っている者に冠が与えられた、と書いてありますが、イエス・キリストにはすでに冠が与えられています。

イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と讃れの冠をお受けになりました。

(ヘブル 2・9)

はつきりさせておきましょう。この白い馬に乗っている者は、イエス・キリストの模倣者です。この馬に乗っている者は、13章で「獸」として表わされている、反キリストのことです。

この馬の乗り手は、ほかの三人の馬に乗っている者と同じ性質を持つ者であり、この乗り手が、裁きのなれを引き起こす最初の石となるのです。

小羊イエス様が世界の支配権を天においてお持ちになつたあとで、反キリストが地上に現われ、神の国をこの地上で実現することになります。悪魔は、19章にあるように、イエス・キリストが白い馬に乗り、その名が「忠実また真実」と呼ばれるお方として来られることをあらかじめ知つていて、その前に自分の手先である反キリストを白い馬に乗せて遣わしたのです。この白い馬に乗っている者は、19章の白い馬に乗っているお方と対立している者です。

黙示録の中では、このような対立をいたるところで見ることができます。たとえば、一人の女

性がで出來ますが、一人は身ごもつてゐる女であり（12章）、もう一人は姦婦です（18章）。また二つの場所がで出來ますが、一つは新しいエルサレムであり、もう一つはバビロンです。さらに二つのほふられた動物がで出來ますが、一つは小羊であり、もう一つは獸です。

2 白い馬に乗つてゐる者が何をしたか

白い馬に乗つてゐる者は、混乱したこの世界に一種の秩序をもたらそうとしたのです。そのために彼がとつた方法は、戦争ではありません。彼は、多くの血を流すことなく、大きな領土を獲得します。彼は外交と戦略とを用いて、多くの国々を獲得します。この「白い馬に乗つてゐる者」は、「平和の君」としてのイエス様を模倣し、自分のことを平和の君といつわつてゐるのです。彼は多くの人々をだまし、盲にしてゐるのです。ですから、裁きの最初は、悪魔の手先が人々をあざむくこと、人々を盲にすることから始められるのです。

3 結果はどうだつたか

最後に、白い馬に乗つてゐる者がひきおこす結果について考えてみましょう。彼は、勝利の上にさらに勝利を得るのです。彼はおそらくヨーロッパを一つの国にすることでしょう。

勝利者は、常に白い馬に乗つています。白という色は勝利の色であり、きよめの色であり、そして光の色です。しかし、この白い馬の「白」は「偽りの光」なのです。反キリストはあざむく者であり、盲にする者です。この乗り手は、来たるべき世界の支配者です。ダニエルはすでに、

この者を預言しています。

私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があつた。

その頭には十本の角があり、もう一本の角が出て来て、そのために三本の角が倒れた。その角には目があり、大きなことを語る口があつた。その角はほかの角よりも大きく見えた。

(ダニエル 7・20)

十本の角は、この國から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。

(ダニエル 7・24、25)

その姿かたちだけを見れば、白い馬の乗り手は平和の人らしく見えますが、彼が実は不法をなす人であることはだんだん明らかになつてくるのです。

だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて

神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

(II テサロニケ 2・3～4)

では、いつ反キリストがやつてくるのでしょうか。

不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があつて、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人気が現われますが、主は御口の息をもつて彼を殺し、来臨の輝きをもつて滅ぼしてしまわれます。

(II テサロニケ 2・7～8)

右に引用した、テサロニケ人への手紙第二2章7節の「引き止める者」とは、聖靈の宮、つまり「まことの教会」です。このまことの教会が、反キリストがその力をふるうことができないよう、「妨げ、引き止めている者」なのです。しかし聖靈の宮である教会は、教会が引き上げられる時に、聖靈とともに引き上げられてしまいます。その結果、反キリストがその力を自由に現わすことができるようになります。

しかし反キリストの力も、小羊イエス様によつて支配されています。裁きを行なう者たちは、神の御座から、「來なさい」と命令を受けました。しかしこれらの裁きを行なう者たちの力は全能ではなく、制限されたものでしかありません。真の裁きを行なわれるお方は、イエス様おひとりだけです。

小羊イエス様こそが世界の支配者であり、その支配権は決してだれにも渡されません。小羊イエス様のご計画が定められていることは、「馬に乗る者が四人であり、地上で殺されるものが四分の一である」という数字があらかじめ決められていることによつてもよくわかります。

悪魔でさえも、神のご計画と神のみこころを成就するために用いられるのです。裁きを行なう者たちは、主なる神の手の中にあるチエスの駒であり、全てのものは、神のご計画を成就するため用いられるのです。主なる神は、あらゆる力の上に立つておられます。イエス様をとおして神の子とされている全ての人々にとつて、何というすばらしい守りが与えられていることでしょう。

5

白い馬に乗っている者とそれに続く者

默示録6章3節から8節まで

- 1 小羊が第二の封印を解いたとき、赤い馬に乗っている者が出てきた
- 2 小羊が第三の封印を解いたとき、黒い馬に乗っている者が出てきた
- 3 小羊が第四の封印を解いたとき、青ざめた馬に乗っている者が出てきた

3-5 白い馬に乗っている者とそれに続く者

小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。³すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。

小羊が第三の封印を解いたとき、私は、第三の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。⁴私は見た。見よ。黒い馬であった。これに乗っている者は量りを手に持っていた。⁵すると私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の間で、こう言うのを聞いた。「小麦一
升は一デナリ。大麦三升も一デナリ。オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」

小羊が第四の封印を解いたとき、私は、第四の生き物の声が、「来なさい。」と言うのを聞いた。⁶私は見た。見よ。青ざめた馬であった。これに乗っている者の名は死といい、そのあとにはハデスがつき従つた。彼らに地上の四分の一を剣ときさんと死病と地上の獣によつて殺す権威が与えられた。

(默示 6・3-8)

默示録6章の全体をとおして、私たちは小羊イエス様を見失わないようにすることがたいへん大事だということを学びました。今回学ぶ箇所でもまた、3、5、7節に「小羊」という言葉が出てきます。

前に学んだ1、2節で、白い馬に乗っている者が、実は13章に出てくる獸、反キリストであることを学びました。この反キリストは、あざむく者であり、盲にするものであり、与えられた役

目に限つて勝利することを許されたのです。

このことは、もちろん、御座についておられる小羊イエス様の命令によるものであり、イエス様は悪いものを明らかにするために、それをなさいます。つまり、反キリストのあとに続く者たちによって、反キリストの正体がどのようなものであるかが明らかにされるのです。それは、羊の毛皮をかぶつた狼の正体が暴露されるようなものです。

このこと自体は問題の解決ではありませんが、これが「解決の始まり」となります。狼がその正体を暴露されることは、狼が正体を知られない今まで人々の間を自由に歩き回り、まちがつて誉めたたえられているよりもいいのです。

私たちは、次に、「白い馬に乗っている者」に続く者たちについて考えてみましょう。それは次の三人の乗り手です。

- ・ 小羊が第二の封印を解いたとき、赤い馬に乗っている者が出でました。
- ・ 小羊が第三の封印を解いたとき、黒い馬に乗っている者が出てきました。
- ・ 小羊が第四の封印を解いたとき、青ざめた馬に乗っている者が出でました。

私たちは、主なる神がはじめに地を創造されたとき、それが「非常によかつた。」（創世記 1・31）ということを知っています。しかし、罪をとおして、人が神から離れることをとおして、この地は呪われました。しかし、イエス様が、人間と全ての造られたものを悪魔の支配から買い戻すために十字架につかれ、全てを成就してくださったのです。

教会の携挙のあとで、この地上に与えられる裁きこそが、この地上に神の国を完成するためのただ一つの道です。次に出てくる三人の乗り手は多くの力を持っていますが、もちろん彼らの力は小羊イエス様によつて操られているに過ぎないのです。

1 小羊が第二の封印を解いたとき、赤い馬に乗っている者が出てきた

小羊が第二の封印を解いたとき、「赤い馬に乗っている者」が裁きを行ない始めました。

第一の乗り手、「白い馬に乗っている者」は、大きな働きをしましたが、しかしその平和は長くは続きませんでした。全ての人々が、彼に対して喜びの声をあげました。しかし間もなく戦争が起こり、その戦争は世界に広がりました。「赤い馬に乗っている者」の赤という色は、血を流すことを意味しています。默示録12章3節に、悪魔は「赤い竜」として示されています。

第二の乗り手、「赤い馬に乗っている者」の目的は、地上から平和を奪い去ることです。反キリストはかりそめの平和を約束しましたが、しかしその結果はおそるべき戦争だったのです。

第一の乗り手、「白い馬に乗る者」の目的は、世界の力を一つにすることによって、世界の平和を確保することでした。しかしその働きによつて、世界の北と東に大きな勢力が形成され、これらがイスラエルの近くで戦うことになります。これが、人が自分の力で全ての平和を造り出そうとする努力の結果です。

まことの平和の君であるイエス様なくして、平和を造り出すことは不可能です。

「悪者どもには平安がない。」と主は仰せられる。

(イザヤ 48・22)

本来、平和を持つていない者が平和をもたらすことはできません。反キリストの本質は争う者、悪者であるのは言うまでもありません。彼らの策謀の結果は、互いの殺し合い、戦争です。

その当時においても、王や皇帝たちは、国民に対して教育や福祉を約束し、平和をも約束しました。しかしヨハネは当時の教会に対して、「彼らは平和、平和といっているが、平和は来ない。」とはつきりと書き送ったのです。

「なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行なっているからだ。彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。」

「実に、彼らは、平安がないのに『平安。』と言って、わたしの民を惑わし、壁を建てる
と、すぐ、それをしつくいで上塗りしてしまう。」

(エレミヤ 6・13、14)

「エルサレムについて預言し、平安がないのに平安の幻を見ていたイスラエルの預言者
どもよ。」

(エゼキエル 13・16)

私たちは、人々が反キリストによってだまされることを見てきました。反キリストは、平和と清きの姿をよそおっていますが、その結果は戦争と流血です。もつともひどくだまされるのは、この反キリストを、喜びをもつて迎えるユダヤ人たちです。しかも、この反キリストによつてもつ

ともひどい迫害を受けるのもまた、ユダヤ人です。イエス様は、すでにこのことについて預言しておられます。

「わたしはわたしの父の名によつて来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。」

(ヨハネ 5・43)

ユダヤ人以外の全ての国民も、反キリストによつてだまされます。

人々が「平和だ。安全だ。」と言つているそのようなときには、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。

(イテサロニケ 5・3)

これが、全ての地上にのぞむ試みのときなのです。

あなたが、わたしの忍耐について言つたことばを守つたから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。

(黙示 3・10)

2

小羊が第三の封印を解いたとき、黒い馬に乗っている者が出てきた
赤い色は、戦争と血を流すことを意味しました。しかし黒い色は、ききんと憎しみを意味しま

す。ききんと憎しみは、つねに戦争の結果です。戦争は貧しさとおそるべき苦難をもたらします。

黒はまた悲しみの色であります。この「黒い馬に乗っている者」が持つてゐる量りは、分配を意味しています。パンが量られるということは、主食の欠乏を意味していきます。「小麦一升は一デナリ」とは、小麦の値段が15～20倍に値上がりすることを示しています。一デナリは、当時一人の労働者の一日分の給料です。一デナリで、一人の人間の生命を維持することはできるかもしれません。しかし家族と、家と、着る物と、その他の必要を満たすには十分ではありません。

またこの値上がりは、生きていく上でもっと必要なパンと小麦だけに起ころのです。油とぶどう酒はまだ十分に残っています。油とぶどう酒は、默示録ではつねに否定的な意味で使われる言葉です。これらはぜいたくや乱れた生活の象徴です。油も、ぶどう酒も、その当時のローマ帝国では支配階級が用いる贅沢品でした。

つまり、支配階級である金持ちたちはたくさんの中のものを持ち続け、一般の人々は食べるにもこと欠く非常な生活の苦しみを味わうのです。ここに見られるのは、利己主義、無関心、冷酷です。このような社会的な不公平の結果が憎しみを生み出します。しかしこの金持ちたちの幸せは長くは続きません。なぜなら第六の封印が解かれたとき、彼らは裁かれるからです。

人間は、真のふるさとである神を失い、神から離れてからといふもの、心の平安を失つただけでなく、思い煩いと心配で心が休まらないようになつてしましました。生活を守るという、私たちの日々の闘いは、一つの呪いです。多かれ少なかれ、全ての人々がこのような闘争の中に引き込まれています。この闘争に敗れ、破滅しないためには、あらゆる努力をしなければなりません。

悪魔は、私たちがこの世の闘いに巻き込まれることをとおして、イエス様から目を離すようにと望み、しむけています。そしてこの大きな力が私たちを毎日毎日捕えているのです。

かつて天から下ってきたマナが、荒野のイスラエルの民を四十年間養いました。イエス様も、天からのパンです。イエス様につき従い、いのちを持つものは、いつも満たされている者になります。

しかし、ここに見る、「黒い馬に乗っている者」は、マナでもなく、いのちのパンでもなく、生きんをもたらす許しを得ているのです。「黒い馬に乗っている者」は、パンを奪い取る許しを与えていたのです。そして、小麦一升が一デナリという価格は、天において定められた価格です。これは人々によって勝手に決められたものではなく、神の裁きなのです。

3 小羊が第四の封印を解いたとき、青ざめた馬に乗っている者が出てきた

「青ざめた色」というのは、病気と死を意味しています。

戦争とききんの結果は、病気です。戦争のあとで、人々は伝染病にかかりやすくなります。8節に出てくる「地上の獣」とは、病気の原因となる生物、微生物やビールスではないかと考えられます。今日、細菌爆弾が人為的、計画的に準備されています。「青ざめた馬に乗っている者」は、このような恐るべき兵器を使おうとしているのです。

この第四の「青ざめた馬に乗っている者」は、特に恐ろしい力を持っています。なぜなら、この者といつしょに、前の「三つの馬に乗っている者たち」が働くからです。「彼ら」には地上の四

分の一を殺す権威が与えられます。8節の中ほどでは特に「彼ら」と複数形で書かれています。ですからこの中には全ての馬の乗り手が含まれていることになります。この結果は、人類の四分の一が殺されるのです。これは非常に恐ろしい裁きです。

最後に、イエス様が私たちに与えようとしておられる真の平和、私たちが神の裁きに耐えるためを持たねばならない真の平和のことにについて、考えてみましょう。

「平和」は、ヘブライ語で「シャロム」といいます。シャロムという言葉は神と人との間のよい関係を意味しています。そして、人間同士の間の関係がよいことも意味しています。これはイエス様がくださる賜物であり、イエス様から離れている者には決して与えられないものです。

「悪者どもには平安がない。」と主は仰せられる。

(イザヤ 48・22)

創世記にあるように、この世界のはじめには、人は神との交わりを持つていました。しかし、罪をとおしてこの関係は破壊されました。そして「赦し」をとおして、神は元の関係を回復しようとしておられます。

「赦し」のあるところに、平和があります。

聖書は、平和の君であるイエス様の十字架によつて、神と人との対立の中に「赦し」が与えられたことをはつきりと告げています。

キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。

(エペソ 2・14、15)

私たち罪人が、イエス様の前にその罪を告白して、私たちの生活の支配権をイエス様に明け渡すなら、私たちは「神との平和」をいただけるのです。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによつて、神との平和を持つています。

(ローマ 5:1)

イエス様を受け入れる人には、「平和」が現実のものになるのです。神との交わりを正しくしようとしない人、つまり自分の罪を告白しようとする人は、神との平和を知ることができません。罪の問題が解決されていない人には、赦しも与えられず、平和も与えられません。そして神との平和を持っていない人々の間にあっては、平和は保たれず、お互いの間に争いと戦争とが起こるのであります。

イエス様は、ご自身の平和をあなたに提供しておられます。いま、あなたの罪を明るみに出しませんか。

神の目的は、人類の間に平和を与えるだけでなく、動物や植物までも含んだ全宇宙の被造物に平和を造り出されることです。しかし神の国がこの地上に建設されるに先だって、四頭の馬に乗った者たちが、この地上に恐ろしい裁きを行なわなければなりません。

ヨハネは御座におられる小羊イエス様を見ました。小羊イエス様は「赤い馬に乗っている者よりも強力なお方です。小羊イエス様は平和の君です。小羊イエス様は私たち全てを平和で満た

そうとしておられます。

小羊イエス様はまた、「黒い馬に乗つてゐる者」よりも強力なお方です。小羊イエス様は全てのもののに高く引き上げられたお方です。それゆえ、小羊イエス様は、私たちを全てのもののに引き上げ、私たちを満たそうとしておられるのです。

盜人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。　（ヨハネ　10・10）

小羊イエス様は、「青ざめた馬に乗つてゐる者」よりも強力なお方です。小羊イエス様は、死に打ち勝たれたお方です。そして私たちを、全てのことにおいて、イエス様にあつて圧倒的な勝利者にしようとなさつておられます。私たちはこのことを覚えて、心からこの小羊イエス様に礼拝をささげようではありませんか。

6

殉教者の数が満ちるまで

黙示録6章9節から11節まで

- 1 苦難の前半の殉教者
- 2 忠実なユダヤ人の残りの者
- 3 答えられた祈り

 - 1 白い衣
 - 2 どれだけ待たなければならぬか

小羊⁹が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、眞実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」¹⁰すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言い渡された。

(默示 6・9～11)

イエスがオリーブ山ですわつておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言つた。「お話をください。いつ、そのようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしよう。」そこで、イエスは彼らに答えて言られた。「人に惑わされないように氣をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、「私こそキリストだ。」と言つて、多くの人を惑わすでしよう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしようが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起ることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」

マタイの福音書の24章3節から9節と黙示録の6章とを比較してみるのは、大変興味深いことです。マタイの福音書24章3節から9節で、イエス様は、ユダヤ人のぞもうとしている苦難について述べておられます。同じことが黙示録6章にも記されています。どちらも同じように、戦争、ききん、病気、地震が、苦難の始まりとして述べられているのです。またマタイの福音書24章では、その次に迫害がやつてくることが語られていますが、同じことが黙示録でも記されています。

ここでは、三つのこと、「苦難の前半の殉教者」、「忠実なユダヤ人の残りの者」、そして「答えた祈り」についてごいっしょに考えてみましょう。

1 苦難の前半の殉教者

黙示録6章9節で、私たちは御座の前にある祭壇を見ることがあります。祭壇は礼拝がささげられる場所です。黙示録には祭壇について書かれたところが七カ所あります。祭壇には多くの殉教者たちの魂があります。彼らの殉教の原因は、イエス様を証ししたためでした。もし彼らが証しをせず、黙っていたならば、殺されることはなかつたでしょう。そして神の祭壇の下、神のもつとも近くにいることもなかつたでしょう。

この殉教者たちについては、次の三つのことが言えます。

はじめに、彼らは殺されたにもかかわらず、死んでいるのではなく、生きています。死ぬということは、決して存在がなくなることではなく、存在の場所を変えることです。

次に、この殉教者たちは、見られることができる存在でした。ヨハネは彼らを見ることができたのです。

そして最後に、彼らは御座のもつとも近くにいました。彼らはイエス様のそばにいたのです。このように、死も、殉教者たちを神から引き離すことはできませんでした。殉教をとおして、彼らはいつも神に近づいたのです。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・38、39)

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。しかし、もしこの肉体のいいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私はわかりません。私は、その一つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去つてキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。

(ピリピ 1・21、23)

私たちには、最初の四つの封印が解かれたとき、四つの生き物の声が「来なさい。」というのを聞き、馬に乗っているサタンの手下たちに裁きを行う命令が与えられたことを見てきました。神から離れている者たちに対する裁きは、御座から直接出たものです。しかし黙示録のこの部分での信者たちの苦難は、御座から出ているのではありません。ですからこの部分には、私たちは御座から出るどのような命令も見ることがないのです。

神はこれら裁きによる苦難を許しておられます。しかし神は悪魔の手綱を持つておられます。なぜなら、これらの苦難が、神の栄光を現わすために用いられるからです。

ここで私たちは、殉教者たちがいつ死ぬのかについてすこし考えてみましょう。

教会の挙げの後、反キリストが現われ、七年の間この地上を支配します。殉教者たちは、この七年のうちの最初の三年半の間に命を捨てるのです。ということは、これらの殉教者たちは、大きな苦難の前に死ぬのです。大きな苦難は、反キリストが支配する後半の三年半の間に起ころうです。

封印を破ることによつて、反キリストの七年の支配の間にどういうことが起ころうのかについては、私たちは伝聞の形で、また簡単な記述によつて示されています。

封印を破ることによつて行なわれる裁きは、あたかも本の目次のように順に示されています。つまり黙示録6章1節から8章1節までは、裁きの内容が簡単に記されています。封印が破られたあとで、巻物が開かれ、はじめて巻物の内容が詳しく述べられます。それについては、8章2節から22章5節までに書かれています。また、黙示録の中には、同じことが繰り返して述べられ

て いる箇所がで てき ます。

2 忠実なユダヤ人の残りの者

現代においては、まことの教会こそが神の証しです。しかし教会の携挙のあとには、ユダヤ人たちが神の証しとなります。彼らが告げ知らせるのは、神の恵みではなく、来たるべき神の国です。今日は、まだ、恵みと救いの時代です。私たちは、「イエス様のもとに来なさい。罪を告白しなさい。そしてあなたの自身をイエス様に明け渡しなさい。十字架について死なれたイエス様に感謝し、あなたの生活の支配権をイエス様に明け渡しなさい」という招きを受けています。

イエス様を本当に信じる者は、永遠のいのちを持つています。これらの人々は、携挙の時にイエス様の花嫁としてそこに置かれます。そして、教会の携挙のあとには、裁きと復讐の時が来るのです。パウロが瞬間に回心したように、その時にはイスラエルの民も神の靈に動かされて、神の国の到来を宣べ伝えるようになります。彼らも、イエス様をメシア、救い主として宣べ伝え るようになります。彼らの真実と勇気と熱心との結果、彼らは殉教者となるのです。

そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

(マタイ 24・9)

黙示録6章10節では、殉教者たちは復讐を求めて叫んでいます。イエス様もステパノも、その殉教のときに、「彼らをお赦しください」と祈られました。これが「恵みの時代の殉教」の特徴

です。しかし、この默示録の部分で、殉教者たちはどうして復讐を求めたのでしょうか。なぜなら、「恵みのとき」がすでに過ぎ去り、「復讐のとき」が来たからです。この殉教者たちは、証しのために命を捨てた殉教者たちです。

6章10節で、この殉教者たちは三つの言葉で神に對して呼びかけています。「主」、「聖なる方」、「眞実な方」です。

「主」とは、全てがその主人に属する、という意味です。11節の「しもべたち」も、この主のものです。もし、しもべが危害を受けるなら、その所有者も危害を受けます。もし、しもべが殺されるなら、その所有者は大切な持ち物を失うことになります。

さらに彼らは、「聖なる方」、そして「眞実な方」と呼びかけています。主なる神は、罪とけがれとを許すことができない眞実なお方です。殉教者の血を流すことは、不正の最たるものです。殉教者たちが眞実な方に呼びかけたのは、眞実な方は決して失望させないお方だからです。

しかしここでの裁きの訴えは、悲しみから出た声、自分自身に對する悲しみから出た叫びでは決してありません。なぜなら、彼らは自分の命をも惜しまなかつた人々であり、すでに神の御座の近くにおかれて喜んでいる人々だからです。神の近くにいることは、眞の幸福です。

彼らの叫びは神の栄光を悲しむ叫びでした。これらの人々は、神に向かつて「自分たちのために復讐してくれ」と言つているのではなく、「神の栄光のために復讐してくれ」と叫んでいるのです。

殉教者たちの思いは何だつたのでしょうか。彼らは、「神の栄光が問題である。神の国が問題で

ある。悪魔を滅ぼすことが問題である。神の栄光と神の義を現わすことが問題である。」と叫んでいるのです。彼らにとつて、もつとも大切なのは、自分自身でも、自分の名譽でも、自分の持ち物でも、自分の健康でもなく、ただ、神の栄光のみが問題だったのです。

しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしつかりつかまえられました。あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。

(詩篇 73・23～26)

しかし私にとつては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。

(詩篇 73・28)

殉教者はすでに、自分のことと神のことを分けることができない者になつてゐるのです。彼らはただ一つの願いを持っています。それは、神が「全てにおいて、全てになられる」ということです。

しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、「自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

(Iコリント 15・28)

殉教者たちは、地上の全ての場所における真理と正しさと、正義の勝利を求めました。殉教者たちは、イエス様だけがあがめられ、そしてほめたえられることだけを望んでいたのです。彼らの態度は、自分たちに何が起こるかではなく、イエス様だけがあがめられることを望む、というものでした。

しかし、彼らがこのような態度をとった結果、彼らはまわりの人々からもつとも悪い者だと言われるようになるのです。しかし、このような一見して悪魔の勝利に見えることも、実は悪魔の表面的な勝利にしか過ぎないのです。なぜなら、イエス様はこのような殉教者たちの祈りに対して、はつきりと答えられるからです。

3 答えられた祈り

次に、「答えられた祈り」について考えていきましょう。殉教者たちの祈りは、無駄ではありませんでした。彼らの祈りは答えられました。生きておられる主は私たちの祈りを聞いてくださいます。しかし、私たちの望みどおりに聞かれるとは限りません。

殉教者たちの疑問は、主はいつ正義を現わされるのかということです。それは「神の正義」を求める叫びでした。あらゆる不法に対し、神の正義が現わされなければなりません。このような叫びは、神に対する愛から来ます。なぜなら殉教者にとって、神の正義と神の栄光が踏みにじられることは耐えられないことだからです。

さて、黙示録の中には「地に住む者」という言葉が繰り返し出でてきます。地に住む者というの

は、どのような人のことを指すのでしょうか。

「住む」というのは、「気持ちよくしている」状態です。それは「巡礼する」ということの逆です。聖書によれば、この地とは悪魔の座のあるところです。したがって、地に住むというのは悪魔の座のあるところで気持ちよくしているということになります。地に住む者とは、あたかも自分が主人であるかのようにふるまう、神なしでいる、また神に敵対している人々のことです。

これに対して、「殉教者たち」とは巡礼者であり、この地上に対してはよそ者のように生きている人々です。したがって殉教者たちは、真の所有者であり真の支配者である主に向かって、神がその約束を成就し、神の国をこの地上にもたらしてくださることを求めているのです。

この祈りに対して、彼らに二つの答が与えられました。白い衣が与えられ、そしてどれだけ待たなければならぬか、ということを知らされたのです。

1 白い衣

白い衣とは、神に認められることを意味します。この世において、彼らは迫害を受け、悪い者であるといわれました。しかし、神は彼らを認めてくださるのです。

その昔、訴えられた人は黒い着物を着せられました。しかし無実だとわかつた人には白い着物が着せられました。殉教者たちは、この地上では悪者扱いされますが、天に帰ったときには白い衣を着せられるのです。

黙示録には、三種類の白い衣が出てきます。

そのひとつは、古語で「ストラ」という長いゆるやかな外衣です。默示録6章11節、7章9節と13節に出てくる白い衣はこれで、裁判のときに与えられるのもこのような着物です。

いまひとつは、古代ギリシャで見られるような、左肩に掛けて右の腰を巻きながら左腕に戻る長布、「ヒマチオン」という衣です。默示録3章4、5、18節、4章4節に出てくる白い衣はこれをお指し、勝利を得る者に褒美として与えられる衣です。

これら全ての白い衣は、全て神の証し人を表わします。

ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。

(マタイ 10・32～33)

殉教者たちは、その完全なご褒美を、第一の復活のときにいただくのです。

また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわつた。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獸やその像を拝まず、その額や手に獸の刻印を押されなかつた人たちを

見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となつた。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかつた。これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しても、第二の死は、なんの力も持つてない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

(黙示 20・4～6)

2 どれだけ待たなければならぬか

殉教者たちはまた、彼らの祈りに、はつきりとしたお答えをいただいたのです。そのお答えとは、苦難のときは短い間である、というものでした。苦難のときは、限られているのです。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

(IIコリント 4・17)

なぜ、苦難が必要でしようか。なぜなら、苦難以上に私たちをイエス様に近づけるものはないからです。多くの人々はそれぞれ、イエス様ゆえの隠れた苦しみ、悩みを持つています。そしてこれらの苦しみ、悩みはある意味で「殉教」に通じるものであり、これをとおしてイエス様のより近くに来ることができるのです。イエス様が望んでおられるのは、私たちがもつとイエス様のおそば近くに来ることです。そのために、苦難が必要なのです。

勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得

て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

(黙示 3・21)

苦難が必要であるもう一つの理由は、神の忍耐と神の慈愛です。

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(IIペテロ 3・9)

また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従つて、あなたがたに書き送つたとおりです。

(IIペテロ 3・15)

さて、教会の携挙はいつ起るのでしょうか。それは「救われた人たちの数が満ちた時」です。兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知つていていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになつたのは異邦人の完成のなる時までであり、⋮

(ローマ 11・25)

同じことを私たちは默示録6章に見ることができます。「いつまでですか」という問い合わせに対して、イエス様は、「あなたがたの兄弟である殉教者の数が満ちるまで」と言つておられます。この「兄弟たち」というのは、苦難の時に、反キリスト時代の残りの三年半の間に、イエス様を信じるようになるユダヤ人のことです。つまり、教会の数が満ちるだけではなく、殉教者の数も満ちるまで、ということが示されているのです。

ここで神は、「神が定められた殉教者の数が満たされるまで、殉教者が殺される」のを待つておられるのではなく、「救われる者の数ができるだけ多くなるように」待つておられる、と/or>ことが強調されています。

「いつまでですか」という問い合わせに対して、神は三年半というはつきりとした期間を示しておられます。この殉教者である「ほかの兄弟たち」について、私たちは默示録20章4節で、「獸やその像を押まず、その額や手に獸の刻印を押されなかつた人たち」であることを知ります。ここでのいわれる獸の像、すなわち反キリストの像は最後の三年半の間に建てられます。したがつて、殉教者たちが終わりの三年半の間にることは明らかです。

6章と20章に出てくる二種類の殉教者は、神からの榮光のからだを受け、そしてイエス様とともに千年王国を支配するようになります。

主イエス様が私たち全ての者に、私たちも死んだあと殉教者の群れに加わり、御座の近くで礼拝をささげるようになる確信を与えてくださいますように。そして殉教者の思いを持ち、自分自身が大切なではなく、神の国がうち建てられることが大切であるという確信を与えてください

ますように。そして、この世にあつてはよそ者として天国への巡礼者となり、天において主なる神の承認を受け、天で神に喜ばれる者になるという確信を与えられますように、心から祈りたいと思います。

しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしつかりつかまえられました。あなたは、私をさととして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょ。天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょ。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。この身とこの心とは尽き果てましょ。しかし神はどこしえに私の心の岩、私の分の土地です。それゆえ、見よ。あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。

しかし私にとつては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょ。
(詩篇 73・23～28)

世界全体が揺り動かされる

黙示録6章12節から17節まで

1 弟子たちの質問、世の終りの前兆

2 大きな地震

1 地球

2 天空

3 人間

3 恐れおののいて祈る人々

1 いつ祈っているか

2 誰に向かつて祈っているか

3 何を祈っているか

私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになつた。¹³そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。¹⁴地上の王、¹⁵高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隸と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、¹⁶山や岩に向かってこう言つた。「私たちの上に倒れかかるて、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまつてくれ。御怒りの大きいなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

(默示 6・12～17)

默示録6章12節から17節までの部分の題名は、「世界全体が揺り動かされる」、または「世界史の最後の章」です。この部分の内容は、「終わりの時代における最後の時」です。

七つの封印を解いていくことは、のちに起こることの要約を見ていくようなものだということを、私たちは学んできました。第六の封印が解かれる部分は、默示録の8章から20章までの内容を簡単に要約しています。この箇所では、世界がどのようにして最後の審判へと向かっていくかが語られています。

これから、次のことを学んでいきましょう。「弟子たちの質問」、「全てのものの震撼」、そして「恐れをもつて祈る人たち」です。

1 弟子たちの質問、世の終りの前兆

マタイの福音書24章で、弟子たちはイエス様に向かって、いろいろと質問しました。

イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言つた。
「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた。
「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大せい現われ、「私こそキリストだ。」と言つて、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしようが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは、必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起ります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」

(マタイ 24・3～9)

彼らは、将来起るべきこと、イエス様の御国が来る時や世の終わりについて知りたいと思つたのです。それに対してイエス様は、黙示録6章と同じ、終わりの時のことを話されました。この部分を少し見てみましょう。

弟子たちはマタイの福音書24章3節で、イエス様に尋ねました。「お話しください。いつ、その

ようなことが起こるのでしょう。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしよう。」と。

それに対するイエス様のお答えの4節から5節には、偽キリストのことが語られていますが、これと同じことは、黙示録では第一の封印が解かれる部分、6章1節から2節に白い馬に乗つている偽キリストとして書かれています。

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大せい現われ、『私こそキリストだ。』と言つて、多くの人を惑わすでしょう。」

（マタイ 24・4～5）

また、私は見た。小羊が七つの封印の一つを解いたとき、四つの生き物の一つが、雷のよくな声で「來なさい。」と言うのを私は聞いた。私は見た。見よ。白い馬であった。それに乗つている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行つた。

（黙示 6・1、2）

次に、マタイの福音書24章6節から7節前半には、戦争のことが書かれています。黙示録6章の第二の封印が解かれる部分では、戦争と死について書かれています。

「また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようになさい。これらは必ず起ることです。しかし、終わりが来たのではありません。民

族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」

(マタイ 24・6～7)

小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。すると、別の、火のよう赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであつた。また彼に大きな剣が与えられた。

(黙示 6・3、4)

マタイの福音書24章7節の後半には、ききんのことが書かれています。同じことが、黙示録6章5節から6節に書かれています。

民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。

(マタイ 24・7)

小羊が第三の封印を解いたとき、私は、第三の生き物が、「来なさい。」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。黒い馬であった。これに乗っている者は量りを手に持っていた。すると私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の間で、こう言うのを聞いた。「小麦一枡は一デナリ、大麦三枡も一デナリ。オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」

(黙示 6・5、6)

マタイの福音書24章7節の最後、またルカの福音書21章11節に書かれている地震、疫病は、默示録6章7節から8節に見ることができます。

「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」

(マタイ 24・7)

それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。」

(ルカ 21・10、11)

小羊が第四の封印を解いたとき、私は、第四の生き物の声が、「来なさい。」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。青ざめた馬であった。これに乗っている者の名は死といい、その後にはハデスがつき従つた。彼らに地上の四分の一を剣とききんと疫病と地上の獣によって殺す権威が与えられた。

(黙示 6・7、8)

マタイの福音書24章9節から13節までと同じことは、黙示録6章9節から11節に見ることができます。これは第五の封印が解かれる部分、迫害にあう信者を示しています。

「そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎れます。また、そのときは、人々が大ぜい

つまづき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」

(マタイ 24・9～13)

小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言ひ渡された。

(黙示 6・9～11)

マタイの福音書24章29節と同じことは、黙示録6章12節から17節に見ることができます。第六の封印が解かれると、世界が揺り動かされます。それは、大きな不安を伴います。

「だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。」

(マタイ 24・29)

そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめ

くために不安に陥つて悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。

(ルカ 21・25、26)

私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こつた。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隸と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かつてこう言つた。「私たちの上に倒れかかるつて、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまつてくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。誰がそれに耐えられよう。」

(黙示 6・12～17)

弟子たちの質問は、「あなたの来られる時や世の終りには、どんな前兆があるのでしよう」ということでした。この質問に対するイエス様のお答えは、「預言者ダニエルによつて語られたあの「荒らす憎むべき者」が、聖なる所に立つのを見たならば」(マタイ24・15)というものでした。預言者ダニエルによつて語られた「荒らす憎むべき者」というのは、旧約聖書の次の箇所にあります。

彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いにえとさざげ物とをやめせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。

(ダニエル 9・27)

つまりその前兆として、大きな苦しみがこの世を激しく襲い、偽キリストがエルサレムにある宮の中に入り、あらゆる人々に自分を礼拝するよう命じます。

だれでも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起り、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

(II テサロニケ 2・3～4)

イエス様は、弟子たちの「あなたの国はいつ来るのですか」という質問の答として、黙示録の第一から第六の封印が解かれる部分の内容を預言なさつたのです。そして、終わりの時には、世界はどうになつて終わるのかについて、次のように預言なさつておられます。

だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗つて来るのを見るのです。

(マタイ 24・29、30)

私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こつた。そして、太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになつた。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実を振り落とすようであった。天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山や島がその場所から移された。地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隸と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かつてこう言つた。「私たちの上に倒れかかつて、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまつてくれ。御怒りの大きいなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

（黙示 6・12～17）

これについて、もっとくわしく学んでみましょう。まず、大きな地震から見ていきましょう。

2 大きな地震

ここで起ころる地震とは、地球上の限られた部分で起ころる地震ではなく、地球の全体が、世界中が、さらには宇宙の全体が揺り動かされる大地震のことです。同じ大地震が、黙示録11章13節と16章18節にも記されています。

そのとき、大地震が起こつて、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

（黙示 11・13）

すると、いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があつた。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかつたほどのもので、それほどに大きな、強い地震であつた。

(默示 16・18)

1 地球

最初に揺り動かされるのは地球です。聖書において「地震」は、つねに裁きを意味しています。イエス様が私たちの罪のために裁きを受けられ、十字架の上で息を引き取られたときにも、地震が起きました。

すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

(マタイ 27・51)

主なる神は、地震をもつて、全ての罪に対する怒りを現わしておられるのです。そして默示録6章では、イエス様の裁きを受け入れなかつた人々が裁かれているのです。

興味深いことに、地震を記録する震度計は、原子爆弾の爆発による震動をも記録します。つまりこの地震は、原子爆弾によつて引き起こされるものかもしれないのです。

2 天空

しかし、地球が動かされるだけではなく、天空もまた動かされます。12節の後半には、「太陽

も黒くなる」と書かれています。太陽はしばしば、生ける神を象徴するものと考えられています。

まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒ませません。

(詩篇 84・11)

神なる主は、太陽です。

自然が太陽を必要とするように、人間は生ける神を必要とします。太陽が月に隠されるときに日蝕が起こります。多くの人々には、ちょうど日蝕で太陽が隠れてしまうように、自分の罪のために神が隠れてしまわれることがしばしば起こります。

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。 (イザヤ 59・2)

罪の問題が解決されていない状態では、神との交わりはありません。そして、光の源である神との交わりが失われるときに、暗やみがきます。暗やみはまた、裁きの象徴でもあります。

主はモーセに仰せられた。「あなたの手を天に向けて差し伸べ、やみがエジプトの地上に来て、やみにさわるほどにせよ。」モーセが天に向けて手を差し伸ばしたとき、エジプト全土は三日間真暗やみとなつた。三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかつた。しかしイスラエル人の住む所には光があつた。

(出エジプト 10・21～23)

出エジプト記においても、裁きのときにエジプト全土は真っ暗やみになりました。また、イエス様の裁きのときにも、暗やみが起きました。

さて、十二時から、全地が暗くなつて、三時まで続いた。

（マタイ 27・45）

終わりの時代にも、同じような暗やみが起ころる、と預言されています。

わたしは天と地に、不思議なしるしを現わす。血と火と煙の柱である。主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。

（ヨエル 2・30、31）

だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は振り動かされます。

（マタイ 24・29）

水素爆弾などの爆発により、地のちりが大空高くに舞い上がり、太陽を見えなくしてしまつといふこともあります。

太陽が光を失うときに、月もその光を失つてしまします。月はしばしば人間と人間の知恵を象徴します。私たちは文学、音楽、美術などにおいて、すでに人間の精神が暗くなつてゐるのを見ることができないでしようか。

星もまた地上に落ちます。ここでの星というのは流星群かもしれません。これらの人工衛星から水素爆弾が発射されるということ

はありうることです。

星というものは、よく、人間にはつきりとした方向、理想を指示示すものたとえとして用いられます。たとえば家族とか、結婚とか、真理とか、清さとか、忠実さなどの理想の方向を象徴する意味で用いられます。しかし、多くの人々は、自由とか、愛とか、平和とか、正義とか、そういう言葉の中にもつたく異なった概念をもちこみ、お互に理解しあっている気になっています。非常に多くの人々が、何が正しくて何が間違いであり、何が真理で何が偽りであるかをほんとうに理解してはいません。

このようにして、エゼキエル書32章8節にある「わたしは空に輝くすべての光をあなたの上で暗くし、あなたの地をやみでおおう。」という預言の言葉が成就されるのです。

黙示録6章14節をみると、「天は、巻き物が巻かれるように消えてなくなり…」とあります。聖書では、天はしばしば地球を取り巻いている空を意味しています。地球を取り巻く空気がなければ、人間も動物も植物も生きていいくことはできません。巨大な水素爆弾の多数の爆発によって、このような空気の層が破壊されることはあることがあります。空気の層が破壊されるとき、この地上の生命を守るものはなくなってしまいます。

6章14節には、続けて「すべての山や島がその場所から移された。」とあります。山は人間のしつかりとした土台であり、島は海の中にある人間の逃げ場のようなものです。しかし、これらのものは全て揺り動かされ、移されるのです。なものも動かないものはないのです。

黙示録6章10節において、私たちは殉教者たちの叫びと祈りを学んできました。第六の封印が

解かれるのは、この殉教者たちに対する神のお答えではないでしょうか。神は祈りに対して、しばしば地震をもつて答えられます。

彼らがこう祈ると、その集まつていた場所が震い動き、一同は聖靈に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

(使徒 4・31)

ところが突然、大地震が起こつて、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みんなの鎖が解けてしまつた。

(使徒 16・26)

「父よ。御名の栄光を現わしてください。」そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現わしたし、またもう一度栄光を現わそう。」そばに立つてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言つた。ほかの人々は、「御使いがあの方に話したのだ。」と言つた。イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためにです。」

(ヨハネ 12・28～30)

3 人間

地球や天空ばかりでなく、人間もまた揺り動かされます。全世界と全宇宙とを揺り動かした大地震は、人間をも揺り動かすのです。全てが揺り動かされます。揺り動かされないものは何一つありません。

この世界を研究し、この世界を支配することができると考えた人々は、これによつてどのように影響を受けるでしようか。「神なくして自分の力で美しい世界を造れる」。このように考えている人々は、その考えが「揺り動かされて」しまうのです。そして人間は、驚き、恐れ、絶望におそれます。このことについて、もつとくわしく見てみましょう。

3 恐れおののいて祈る人々

黙示録6章15節では、大ぜいの人々が集つてゐるのを見ることがあります。彼らは七つの異ったグループからなつていますが、この七という数字は、完全数です。ということは、小羊イエス様の救いを拒んだ全ての人が、ここに集つてゐるということを意味しています。恐怖が彼らを一つにしたのです。どんなに自説にがんこな人も揺り動かされるのです。この世でもつとも強い権力者も力を失つてしまふのです。ここでは神の救いを拒んだ思い上がりの人々が、もぐらのようにほら穴や山の岩間に隠れようとしています。しかし、これらの人々は、山や岩に向かつて「落ちてくる水爆から私を守つてくれ」と言つてゐるのではなく、「御座にある方、小羊の怒りから私を守つてくれ」と叫んでゐるのです。

これらの人々は、水素爆弾や人間の武力から隠れようとしているのではなく、小羊の怒りから隠れようとしているのです。

次に私たちは、「いつ祈つてゐるか」、「誰に向かつて祈つてゐるか」、そして「何を祈つてゐるか」についてごいっしょに考えていきましょう。

1 いつ祈つてゐるか

これらの人々が祈つてゐるその時は、「怒りと裁きの時」なのです。ですから、彼らの祈りはすでに「遅すぎる」のです。

私たちが生かされている今は、「恵みと救いの時」です。今日、すぐに罪を悔い改めてイエス様のみもとに来る人は、罪の赦しを受け、永遠のいのちと平安を得ることができます。

聖書からは、「神の怒り」について多くを学ぶことができます。しかし「小羊の怒り」については、あまり多くを知ることができません。「小羊の怒り」とは、「完全な破壊」を意味します。ご自身のあふれるばかりの愛から私たちにいのちを与えてくださった、その方が怒つておられるのです。

もしも、私たちに代わつて父なる神の怒りをその身に受けてくださつたお方が怒られるなら、だれがそれに耐えられるでしょうか。もしそういうことになつたら、全てはおしまいです。小羊が怒られる時には、もはや救いはないからです。

ちょうど逆のことを、私たちはローマ人への手紙8章にみることができます。

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまず死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。

(ローマ 8・31、32)

イエス様が私たちの味方であれば、だれも私たちの敵となることができません。しかし、イエス様が私たちの敵となるならば、だれが赦しと救い、解放と自由を与えてくださるでしょうか。小羊が怒られる時には、すべて、おしまいです。

2 誰に向かつて祈つているか

6章15節に書かれている人々は、山や岩に向かつて祈つています。これはむなしい祈りです。イエス様の御名を呼び求める者だけが救われるのです。ただまことの救い主、イエス様のみもとにのみ、救いがあるのです。イエス様は聖書において岩そのものと呼ばれるお方です。今日もなお、自分の支配権をイエス様にゆだねる人は、揺るがない永遠の岩の上に守られているのです。しかし、15節にある王や高官、金持ち、自由人たちは山や岩に向かつて熱心に祈つていますが、それは全く無駄です。ちょうどアダムとエバが神の前から逃げようとした時と同じく、これらの人々は恐怖と不安に捕えられているのです。

罪と良心の呵責とが、人間を神の前から逃げようとさせるのです。

罪こそ人間を臆病者に、そして神の前から逃げる者にさせるのです。
あなたは神の前から逃げている者でしょうか。そのようなことをやめて、悔い改めて神のもとに帰つてください。イエス様こそが、本当の逃れ場なのです。イエス様は、あなたを待つておられます。あなたを受け入れ、あなたを赦そうとなさつておられます。

3 何を祈っているか

また、15節に書かれている人々は、16、17節で、山や岩に向かって「私たちの上に倒れかかるて、御座にある方の御顔と小羊の怒りから、私たちをかくまつてくれ。」と祈っています。これらの人々は、神の前に出るよりも山や岩に押しつぶされて死ぬ方を望んでいます。

彼らはかつて、自分の罪を認めようとしませんでした。そして小羊イエス様の提供されている救いを受け入れようとしなかったのです。そして今、彼らは小羊イエス様の怒りから逃れようと恐れまどっているのです。

しかし、裁きと小羊イエス様の怒りからは、だれひとり逃げおおせることはできません。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている…

(ヘブル 9・27)

神の裁きと小羊の怒りとは、恐るべき事実です。「だれがそれに耐えられよう。」と彼らは言いました。しかしこれは、心からの問い合わせなどではなく、自分たちの恐れから出た単なる叫び声なのです。

だれも、神の裁きを受ける時には、その裁きがどうなるかという疑問は持つていません。なぜなら、小羊イエス様の裁きが正しいことを、全ての人が知っているからです。

その昔、裁判を受ける者は、裁判官の前にひざまずくか、ひれ伏すかしなければならず、ただ無罪の者だけが立つことを許されていました。しかし最後の裁きの時には、小羊イエス様の前に

よろこびの集い

主イエス様を知るようになった方々は、イエス様とつながりたいと望むようになります。人にすすめられたから、または強制されているから交わりたいのではありません。主にある交わりが必要なことをよく知っておられるからです。

だからこそ、毎年ドイツから、またアメリカ、カナダ、タイから、主にある兄弟姉妹たがはるばる日本まで来られるのです。主にある交わりのためです。そうして日本からも多くの人々が、主にある交わりのためにほかの国々に行かれます。一九九八年にドイツ、そしてスイスに行かれた日本のキリスト集会の方々は五百人近くに達しました。

ここ二年の間に、あわせて四十回の「よろこびの集い」が世界中で行われたのです。

その中のひとつ、ドイツでの「よろこびの集い」の写真と、たいせつなことばをここに紹介いたします。主イエス様にある交わりのすばらしさを、より多くの方に知つていただければ、幸いです。

主にある真の交わりの秘訣は、イエス様のみことばです。
「わたしにとどまりなさい！」

DIAKONISSEN-MUTTERHAUS





しかし、もし神が光の中におられるように、
私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、
御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。 (ヨハネ1・7)







「わたしのところに来なさい!」(マタイ11・28)





「わたしにとどまりなさい!」
(ヨハネ15・4)





キリスト・イエスが私を捕えてくださった。 (ピリピ3:12)





「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。」

(ヨハネ15・5)





あなたがたは、神によって
キリスト・イエスのうちにあります。 (1コリント1・30)





「わたしはまことのぶどうの木であり、
わたしの父は農夫です。」（ヨハネ15・1）





キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、
また、義と聖めと、贖いとになられました。

(1コリント1・30)

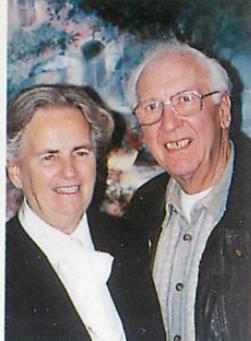




もはや私が生きているのではなく、
キリストが私のうちに生きておられるのです。

(ガラテヤ2・20)





私の主であるキリスト・イエスを
知っていることのすばらしさの
ゆえに、いっさいのことを
損と思っています。
私はキリストのために
すべてのものを捨てて、
それらをちりあくたと思っています。
それは、私には、キリストを得、
また、キリストの中にある者と
認められているからです。

(ピリピ3・8,9)

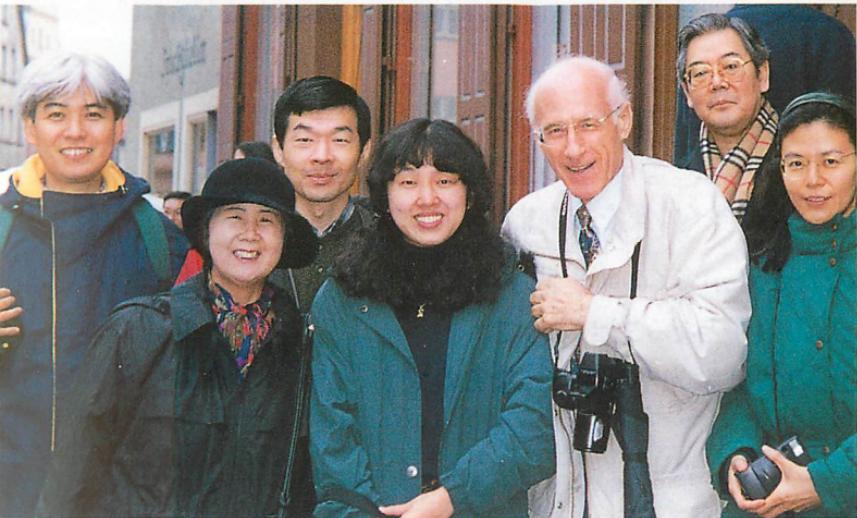






神である主、イスラエルの聖なる方は、
こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、
あなたがたは救われ、落ちついて、信頼すれば、
あなたがたは力を得る。」(イザヤ30・15)





主の前に静まり、
耐え忍んで主を待て。 (詩篇37・7)

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。

(詩篇62・1)





「人がわたしにとどまり、わたしも
その人の中にとどまっているなら、
そういう人は多くの実を結びます。」（ヨハネ15・5）

「あなたがたが多くの実を結び、
わたしの弟子となることによって、
わたしの父は栄光をお受けになるのです。」

（ヨハネ15・8）





「父がわたしを愛されたように、
わたしもあなたがたを愛しました。
わたしの愛の中にとどまりなさい。」

(ヨハネ15・9)





「わたしがこれらのこととをあなたがたに話したのは、
わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、
あなたがたの喜びが満たされるためです。」

(ヨハネ15・11)





「わたしがあなたがたを愛したように、
あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」

(ヨハネ15・12)





海外でのよろこびの集い

ドイツ(ミヘルスベルグ)

1998年 9月25日～10月 8日



スイス(ベアーテンベルグ)

1998年10月10日～10月16日

タイ(バンコク)

1998年11月 7日～11月10日



アメリカ(ロサンゼルス)

1998年11月26日～12月 1日



わずか一秒でも立つことのできる者は、一人もいません。なぜなら、救いのためには、もはや何の可能性もないからです。救い主であるイエス様ご自身が、裁き主となられるからです。この第六の封印が解かることは、私たちにとつともっとも厳粛な知らせです。そのことは私たちに、全てのものが速度を増し、解体し、無秩序になり、混乱に向かっていくことを示します。

しかし私たちは、神と小羊イエス様が御座におられることに注意しましょう。破壊と裁きとは、小羊イエス様が封印を破られる結果として起こるのです。封印を破られるその御手は、かつて私たちのために十字架に釘づけられたその手なのです。この裁きは、祈る殉教者と、そしてうめきつつある被造物に対する答えなのです。

これらの裁きは、神のご計画を実現するための手段です。これらの破壊と裁きは、「神の国の実現」と支配に対して邪魔になる、全てのものを清めるための手段」なのです。

小羊イエス様の怒りは、考えられるかぎりのうちでもつとも恐ろしいものです。

人のために神の怒りを取り除かれた、その方が怒られる時、だれがその怒りから逃れることができるでしょうか。

最後に、三つの質問について考えてください。この三つの質問は、今まで学んできた二つの項目と同じことをあなたに問うものです。
・「あなた」はいつ祈るのでしょうか。

あなたは今、恵みの時、恵みを受け入れられる間に祈るでしょうか。それとも恵みの時が過ぎ去り、全てのものが振り動かされる時になつて、遅すぎる祈りを始めるのでしょうか。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

(イザヤ 55・6)

「あなた」は誰に向かつて祈るのでしょうか。

あなたは生けるまことの神に向かつて、永遠の救いを提供しておられるイエス様に向かつて祈るのでしょうか。それとも、全てが振り動かされるのちの日に、岩や山に向かつてむなしく祈るのでしょうか。

「あなた」は何を祈るのでしょうか。

あなたは一時的な、あなたの身の守りについてのみ祈るのでしょうか。それともあなたの不滅の魂のために祈るのでしょうか。あなたの永遠のいのちのために祈るのでしょうか。

私たちは、今のうちに「罪人の私をあわれんください」と祈るほうが、はるかに賢明です。自分の罪がイエス様の血によつておおわれている人だけが、世界全体が振り動かされるその日に守られるのです。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。

(詩篇 32・1、2)

イエス様は、今の恵みの時にはなお救い主ですが、しかし裁きの日には、裁き主となられます。

御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれている。

(ヨハネ 3・18)

こういうわけで、私たちは振り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。こうして私たちは、慎みと恐れとをもつて、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。

(ヘブル 12・28)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会つことがなく、死からいのちに移っているのです。

(ヨハネ 5・24)

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

(ローマ 8・1)

あなたの生活の基礎は何でしょうか。それがイエス・キリストにある人は幸せです。

というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

(Iコリント 3・11)

主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走つて行つて安全である。

(箴言 18・10)

今日もなお、永遠の愛を持つておられるお方の声が聞こえます。

御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

(詩篇 2・12)

イエス様を信じる私たちにとつては、來たるべきまゝ暗な裁きの日を前にして、何よりも一つのこと�이大切となります。それはまず、まだ救わていらない人々のために絶え間なく祈ること、そしてそれらの人々をイエス様のみもとに連れてくるために、愛の労苦をすることです。

8

大きな患難の始まりと
終わりにおける神の民

黙示録7章1節から8節まで

十四万四千人の証印

1 証印の時

2 証印の意味

3 証印を受ける人々

黙示録第七章のテーマは、「大きな患難の始まりと終わりとにおける神の民」です。まず、この章の1節から8節までには、イスラエルの十四万四千人の神のしもべたちの額に、「印が押される」ことが記されています。そしてそのことは、大きな患難の時に先だって行なわれるのです。

この後、私は見た。四人の使いが地の隅に立つて、地の四方の風を堅く押さえ、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていった。²また私は見た。もうひとりの使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えた四人の使いたちに、大声で叫んで言つた。³「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまって、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であつた。

ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人、⁶アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、⁷シメオンの部族で一万二千人、レビの部族で一万二千人、イッサカルの部族で一万二千人、ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、印を押された者がいた。

（黙示
7・1～8）

これに続く黙示録の7章9節から17節では、あらゆる世界の民のうちから、数えきれないほど

大ぜいの人々が、御座と子羊の前に立っているあります。そしてこのことは、大きな患難の後で起ころうのです。

また大きく見ますと、默示録の4章、5章、6章は一つのものですが、7章はそれらに続く章ではなく、全く異なる内容をもつています。

默示録を始めから読んでいくと、現実の歴史の中で起ころうことが、必ずしも順序通りに書かれているとは限りません。また默示録には、同じできごとが、ある時は簡単に短く、またある時はくわしく長く、くりかえして書かれているのです。

さて、今から学ぶ默示録の7章は、1節から8節までの「大きな患難の前に起ころうできごと」と、9節から17節までの「大きな患難の後に起ころうできごと」の二つの部分に分けられます。

この7章の前の6章では、「大きな患難の終わりの時代」のあらましを見てきました。そしてヨハネは、終わりの時代のできごとをくわしく示される前に、大きな慰めとなる一つの幻を与えられたのです。

まず始めに、7章の1節から8節までを、ごいっしょに見ていきましょう。

1 証印の時

「印を押す」ことが「大きな患難の起ころう前」になされることは明らかです。まず、7章1節の「四方の風」は、6章にある「四頭の馬」を思い出させます。「四頭の馬」がそうであつたように、「四方の風」も、終わりの時代の「地を滅ぼす力」を意味しています。また、旧約聖書のダニエル

書にも、「四方の風」と「四頭の大きな獸」が記されています。

ダニエルは言つた。「私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、四頭の大きな獸が海から上がつて來た。その四頭はそれぞれ異なつていた。」

(ダニエル 7・2、3)

默示録の御使いたちは、「地を滅ぼす命令と権威」を与えられました。この四人の御使いたちは、終わりの時代に「嵐を送り込む権威」を与えられ、同時にそれを「止める権威」も与えられました。ですから四人の御使いたちは、終わりの時代の嵐を地上に送りこもうとした時、もう一人の御使いが生ける神の印を持つて現われ、その命令を止めてしまいました。なぜなら地が滅ぼされる前に、「神のしもべたちの額に印が押されることが必要だった」からです。「印を押すこと」は、「大きな患難の起つる前」になされるのです。

2 証印の意味

「印を押す」ということは、何を意味しているのでしょうか。それは多くの場合、一個人の所有物であることの宣言です。当時の習慣もまたそうでした。そして印を押すためには、刃物で傷をつけたり、サインをしたりしました。印を押されたものは、印を押した人の所有物です。また印を押すことは、「所有物」であることをおおやけに示すだけでなく、所有者によつて「保護される」ことも意味します。所有者は、印を押した所有物に害が加えられると、その害が「自分にも

加えられた」とみなします。ですからイエス様に印を押された人々は、同時にイエス様の「護り」もいただきます。イエス様は、「印を押す」ことによつて、大きな患難の時に、忠実な人々を護り、保護することを約束なさつたのです。

主は彼にこう仰せられた。「町の中、エルサレムの中を行き廻り、この町で行なわれているすべての忌みきらうべきことのために嘆き、悲しんでいる人々の額にしるしをつけよ。」また、私が聞いていると、ほかの者たちに、こう仰せられた。「彼のあとについて町の中を行き廻つて、打ち殺せ。惜しんではならない、あわれんではならない。年寄りも、若い男も、若い女も、子どもも、女たちも殺して滅ぼせ。しかし、あのしるしのついた者にはだれにも近づいてはならない。まずわたしの聖所から始めよ。」そこで、彼らは神殿の前にいた老人たちから始めた。

(エゼキエル 9・4-6)

どんな敵も、印を押された者に「害を加える」ことはできません。ですから最後の裁きは、「印が全部に押され終わつた後」に行なわれます。イスラエルの民はエジプトを出る時に、ほふられた小羊の血による贖いによって、主の裁きから守られました。

旧約聖書の他の部分を見ますと、「印を押す」つまり主の裁きから守られるとということは、イスラエルの民に「聖靈が注がれる」ことを通して行なわれたのがわかります。

しかし、主の名を呼ぶものはみな救われる。主が仰せられたように、シオンの山、エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残つた者のうちに、主が呼ばれる者がいる。

見よ。わたしがユダとエルサレムの捕われ人を返す、その日、その時、わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシヤバテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。

(ヨエル 3・1、2)

わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の靈を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失つて嘆くように、その者のために嘆き、初子を失つて激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

(ゼカリヤ 12・10)

今の時代の信者たちは、聖靈を通して、確認の印、「証印」を押されています。

神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御靈を私たちの心に与えてくださいました。

(Ⅱコリント 1・22)

またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによつて、約束の聖靈をもつて証印を押されました。

(エペソ 1・13)

神の聖靈を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖靈によって証印を押されているのです。

(エペソ 4・30)

聖靈を通しての証印は、「目には見えない」ものです。なぜなら、この証印は私たちの内に住まる聖靈を通して押されるからです。

一方、黙示録に書かれている十四万四千人のイスラエルの人々に押される証印は、「目に見える」証印です。彼らの額に押された証印は、はつきりと見ることができます。

しかし証印には、イエス様のものでない別の刻印もあります。黙示録13章16節から18節には、イエス様にそむいて獸を挾む人々の右の手かその額に別の刻印を受けることが記されています。主は以前にも、ご自分の民を「しるし」をつけることによって区別されました。たとえば、かもいに塗られた小羊の血のしるしや、割札のしるしなどです。

このように、押された証印は「所有と保護の保証」です。あなたは、イエス様の所有物とされ、保護の保証をいただいているでしょうか。罪を悔い改め、罪の赦しの確信をいただいているでしょうか。イエス様は、今日も私たちを招き、そして永遠のいのちを提供しておられます。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

(マタイ 11・28)

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖つたのだ。

わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

(イザヤ 43・1)

私たちへの証印は、聖靈を通してしるされます。

神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御靈を私たちの心に与えてくださいました。

(IIコリント 1・22)

けれども、もし神の御靈があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御靈の中にいるのです。キリストの御靈を持たない人は、キリストのものではありません。

(ローマ 8・9)

「キリストの御靈を持たない人はキリストのものではありません。」とあります。キリストに属する者は、キリストに所有されているだけでなく、キリストの護りの保証をいただいています。イエス様は、「だれも父なる神の御手から私たちを奪い去ることはできない」と言つておられます。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」

(ヨハネ 10・28、29)

創世記5章21節から23節に記されているエノクは、眞の教会の象徴です。エノクは大洪水の前に、天に引き上げられました。同じように、イエス様はご自身の教会を「大きな患難の起る前」に天に引き上げられるのです。

また、ノアは主に忠実な人、眞のイスラエル人の象徴です。ノアは洪水という大きな患難に会いましたが、主によって守られました。同じように、イエス様はご自身に忠実な人々、眞のイスラエル人を、「大きな患難の中」で守られるのです。

3 証印を受ける人々

いまで默示録を読んだ多くの人々が、7章に書かれている「十四万四千人」とはどのような人々だろうかと考え、研究してきました。そしていつの時代にも、「われわれこそ、この十四万四千人のイスラエル人だ」と主張する人々が大ぜいいました。

眞の教会は、「生まれながらのイスラエル人」ではなく、「靈のイスラエル人」によつて形づくられています。眞の教会はユダヤ人と異邦人でかたちづくられていますが、このような眞の教会は、默示録4章以降の教会の携挙の後には、もうこの地上に存在しなくなります。

こんにち、特にエホバの証人（ものみの塔）の人々が、「我々だけがこの十四万四千人に属する者である」と主張しています。エホバの証人の信者の間では、少数の人だけがキリストの体に属し、パンと葡萄酒による聖餐にあづかることができるということです。

この人たちの説くところによると、十四万四千人という数は、すでに千八百八十一年に満席に

なつており、もはや空席は、その中で墮落した人々の代わりの分しかないとのことです。ですからその空席に着けない多くの信者たちは、この地上に千年王国を建設することに全力を尽くすことになります。そして彼らの説によれば、千年王国の建設はすでに千九百十四年から始まつているとのことです。また多くのエホバの証人たちは、「われわれは天国には入りたくない。私たちは神の子ではない。私たちは義とはされない」と言っています。彼らは、間違つた教えを信じています。そして他の人々をも、その間違つた教えへと導き入れようとしています。

では、聖書にはどう書いてあるでしょうか。聖書には、この十四万四千人は明らかにユダヤ人である、と記されています。そうでなければ、5節から8節にわたつて十二部族の名前をあげる意味がありません。

また、ここに書かれているのは、靈的なイスラエル人のことではありません。なぜなら、異邦人とユダヤ人とからなる眞の教会はすでに地上から取り去られ、もはや地上にはないからです。ですからここに記されているのは、文字通りユダヤ人のことなのです。このユダヤ人たちとは、おそらく默示録11章にある、二人の証し人の働きを通して救われるユダヤ人たちのことでしょう。またここでは、ダンとエフライムの二つの部族について述べられていてませんが、なぜでしょうか。創世記49章17節によると、「ダンは道のかたわらの蛇になる」と記されているからです。また、士師記17章から18章にあるとおり、士師記の時代にダンは組織的な偶像礼拝を持ち込みました。さて、ダン族は自分たちのために彫像を立てた。

そこで、王は相談して、金の子牛を二つ造り、彼らに言つた。「もう、エルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上つたあなたの神々がおられる。」それから、彼は一つをベテルに据え、一つをダンに安置した。このことは罪となつた。民はこの一つを礼拝するためにダンにまで行つた。 (イ列王記 12・28-30)

エフライムもまた、これに似た偶像崇拜を行ないました。おそらくダンの部族の中から、反キリストが起こると思われます。このダンとエフライムの部族は、印を押されることなく、反キリストへの怒りと裁きのときには守られないのです。けれども、この二つの部族が永遠に見捨てられることはあります。二つの部族は、彼らの偶像崇拜によつて、主の道具として用いられることはありませんが、千年王国建設の時には、これらの部族も含まれます。エゼキエル書によれば、ダンの名前は、第一にあります。

部族の名は次のとおりである。北の端からヘテロンの道を経てレボ・ハマテに至り、ハマテを経て北のほうへダマスコの境界のハツアル・エナンまで——東側から西側まで——これがダンの分である。ダンの地域に接して、東側から西側までがアシエルの分。アシエルの地域に接して、東側から西側までがナフタリの分。ナフタリの地域に接して、東側から西側までがマナセの分。マナセの地域に接して、東側から西側までがエフライムの分。エフライムの地域に接して、東側から西側までがルベンの分。ルベンの地域に接して、東側から西側までがユダの分である。

(エゼキエル 48・1-7)

なお、残りの部族は、東側から西側までがベニヤミンの分。ベニヤミンの地域に接して、東側から西側までがシメオンの分。シメオンの地域に接して、東側から西側までがイッサカルの分。イッサカルの地域に接して、東側から西側までがゼブルンの分。ゼブルンの地域に接して、東側から西側までがガドの分。ガドの地域に接して南側、その南の境界線はタマルからメリバテ・カデシユの水、さらに川に沿って大海に至たる。以上が、あなたがたがイスラエルの部族ごとに、くじで相続地として分ける土地であり、以上が彼らの割り当て地である。

(エゼキエル 48・23～29)

先の者は後になり、後の者は先になるでしょう。

「いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」

(ルカ 13・30)

イスラエルの民は、救世主であるイエス様を拒んでしまった結果、世界中の民族の中に散らされてしましました。しかし、イスラエルのすべての部族はやがて再び集められ、そして救われるになります。

諸国の民よ。主のことばを聞け。遠くの島々に告げ知らせて言え。「イスラエルを散らした者がこれを集め、牧者が群れを飼うように、これを守る。」と。(エレミヤ 31・10)

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知つていていただきたい。…その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになつたのは異邦人の完成のなる時までであり、…

(ローマ 11・25)

黙示録によると、教会の携挙の後で一人の証し人が現われて悔い改めをすすめ、その後来るべき主を告げ知らせます。これを通して、多くの人々が眞の信仰に導かれるのです。

悔い改めのない信仰は、ありえません。神は、ご自身の前に告白された罪、ご自身が認められた罪、そしてご自身が憎まれた罪を全て赦してくださいます。その赦しのあとで「証印」が押されるのです。証印を押されたユダヤ人たちの使命は、世界中の人々に対して「神の証し人」になることです。

この御国福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

(マタイ 24・14)

これらの証印を押されたユダヤ人たちは、イエス様を来るべき救世主として人々に告げ知らせます。この伝道を通して、多くの人々が信仰を持つことになるのです。

私たちの時代は、嵐が止んでいる静かな時代のように見えます。戦争や、恐慌、破局、飢饉、また多くの問題がありますが、それでもまだ、今は静かな時代です。

しかしこの静かに見える時代は、「良い政治」の結果でも、「人間の努力」の結果でもあります

ん。この背後には全能の神が立つて、全てを支配しておられるのです。

神はその昔、創世記18、19章にあるように、ロトの家族が救い出されるまで、ソドムとゴモラの町の人々に対する裁きを延ばされました。同じように、神は十四万四千人のイスラエルの民に「印が押されてしまう」まで、「大きな患難」を延ばしておられるのです。

なぜ真の教会の携挙が、まだ起こらないのでしようか。

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえつて、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(IIペテロ 3・9)

神はまだ、「救い」と「印を押す」ことを、求めておられるのです。何によつて、人は証印を押されるのでしょうか。何によつて、「自分はすでに神のものとなり、神に護られている」という確信を得ることができるのでしょうか。

それはただ、「真理のみことばによつて」与えられるのです。

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのこと書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持つてることを、あなたがたによくわからせるためです。

(イヨハネ 5・13)

「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思いださない。」
(イザヤ 43・25)

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖つたからだ。」
(イザヤ 44・22)

すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人、「子よ。しつかりしなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。

(マタイ 9・2)

「なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」

(ヘブル 8・12)

しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、：

(ヘブル 10・12)

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとつて楽しみとなり、心の喜びとなりました。

(エレミヤ
15・16)

あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。

(詩篇 119・103)

いつ「証印が押される」のでしょうか。それは私たちが「信仰を持った時」です。そして「信仰を持つ」とは、イエス様を受け入れ、イエス様のご支配を受け入れことです。

何によつて、「証印を受ける」のでしょうか。「聖靈によつて受ける」のです。聖靈による証印を押された人は、天国に入る権利を与えられます。この証印によつて、私たちは悪魔の誘惑から守られるのです。

「教会に属しているかどうか」、また「聖書の知識を持つてゐるかどうか」は重要ではあります。私たちが「内住の御靈を受けてゐるかどうか」が、大切です。

私たちが自分の罪を告白して、子供のような素直さをもつてイエス様を受け入れ、イエス様のご支配にすべてを委ねるなら、その瞬間から、私たちは永遠に至る救いを得ることができます。

9

苦難の後に御座に集う人々

黙示録7章9節から17節まで

1 1 どのような人々か

教会ではなく

旧約時代の信者ではなく

3 3 苦難の時に救われるあらゆる国々の人々

2 2 彼らが集う場

1 1 そこへの手段

途中での経験

3 3 苦難の後の栄光

1 1 御座の前で仕える

しゅろの枝

3 2 神への賛美

3 1 神へのつとめ

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大せいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を持つて、御座と小羊との前に立つていた。彼らは、大声で叫んで言つた。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」¹¹御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立つていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、¹²言つた。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」

長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いつたいだれですか。¹³どこから来たのですか。」と言つた。そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存知です。」¹⁴と言つた。すると、彼は私にこう言つた。「彼らは、大きな患難から抜け出て來た者たちで、¹⁵その衣を小羊の血で洗つて、白くしたのです。だから彼らは神の御座の前にいて、聖所で昼も夜も、神に仕えていけるのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。彼らはもはや、¹⁶飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取つてくださるのです。」

(黙示 7・9～17)

黙示録7章9節から17節には、あらゆる国民のうちから、数えきれないほど大せいの群衆が御座と小羊の前に立つてゐるあります。黙示録には、「その後」とか、「この後」

という言葉がよく出でますが、これらはたいへん大切な言葉です。前に見た4章1節にある「この後」とは、いつのことでしょうか。それは教会の時代が終わり、眞の教会は天に引上げられ、地上に眞の教会がなくなった、「その後」を指しています。その時、制度としての教会は残っています。しかし、聖靈によつて印を押された本当の信者たちはすでに天に引き上げられてしまつています。

いま学んでいる7章1節にある「この後」は、「場所」が移り変わつたことを意味します。といふのは、6章まではヨハネは天を見ていたのですが、7章から彼は地上を見ています。彼は、地上において十四万四千人のユダヤ人たちが「印を押されている」のを見ているのです。

7章9節に、また「その後」が出てきますが、これも場所が変わつています。それまでヨハネは地上を見ていましたが、9節からは天で行なわれていることを見ているのです。この場合は單に場所が変わるだけでなく、周囲の靈的な状態もまた変わつています。

1節から8節までは、これから起くる「さばき」の前の緊張感がありました。しかし9節から17節では、「勝利の歌」が歌われています。というのは戦いはすでに過ぎ去つて、そこは平和と喜びに包まれた場所に変わつていてなのです。

この章では、三つの問題、御座と小羊の前に立つてゐる大ぜいの人々とは「どのような人々か」、また「彼らが集う場」、「御座の前で仕える」ことについて見ていきましょう。

1 どのような人々か

默示録7章9節にある、御座と小羊の前に立っている大ぜいの群衆とは、どのような人々でしょうか。

1 教会ではなく

彼らは、十四万四千人のユダヤ人たちの伝道を通してイエス様のもとに導かれた人々です。十四万四千人のユダヤ人たちは、「主イエス様がまことの救世主である」こと、そして「イエス様の流された血潮によって、罪が赦される」ことを伝えました。

その結果、数えきれないほどの人々が救われることになるのです。この人々とは、教会を指すのではなく、反キリストの大きな苦難のときに救われる人々の群れを指します。

ヨエル書2章32節の預言が、ここに成就されます。

しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。主が仰せられたように、シオンの山、エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残った者のうちに、主が呼ばれる者がいる。

(ヨエル 2・32)

教会の長老のひとりが、ヨハネに次のように聞きました。「この人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか」と。こう聞いたのは、これらの人々が教会ではなくて別のグループの人々だったからに違いありません。

4章4節、5章8節などで、長老が冠をかぶり、立琴を持って小羊の前にひれ伏しているあり

さまであります。7章9節にある大せいの群衆は、冠をかぶらず、立琴を持たないで、しゅろの枝を持つて、御座と小羊との前に立っています。

2 旧約時代の信者ではなく

これらの人々は、旧約時代の信者でもありません。なぜなら旧約時代の信者たちは、教会の携挙の時に天に引き上げられたからです。

旧約時代の信者なら、ヨハネにも彼らが誰であるか、すぐわかつたことでしょう。なぜならイエス様の弟子だったヤコブやペテロやヨハネは、山の上でイエス様のところにエリヤとモーセが現われた時に、教えられなくてもそれらの人々を見分けることができたのですから。

イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。

そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなつた。しかも、モーセとエリヤが現われてイエスと話し合っているではないか。すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声がした。

(マタイ 17・1～5)

ですからこれらの人々が、旧約時代の信者でないことは明らかです。

3 苦難の時に救われるあらゆる国々の人々

しゅろの枝を手に持ち、御座と小羊との前に立っている人々は、「大きな患難の中」から救い出された人々です。彼らは、あらゆる国々の中から救われてきました。この人々はそれまで、はつきりと福音を伝えられたことがありませんでしたが、撲殺の時に驚き、そして目を覚ました人々です。

しかし、福音をはつきりと伝えられながらそれを拒み、受け入れなかつた人々は、反キリストの苦難の時に、その反キリストに欺かれることになります。

その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもつて彼を殺し、来臨の輝きをもつて滅ぼしてしまわれます。不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるためには真理への愛を受け入れなかつたからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるよう、惑わす力を送り込まれます。それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。

(Ⅱテサロニケ 2・8～12)

大きな苦難の時に、大ぜいの人々が救われます。これはまさに、神による「奇蹟」です。反キ

リストの苦難を通して、多くの者が救いにあずかることがあります。

2 彼らが集う場

これら大ぜいの群衆は、どこにいるのでしょうか。これらの人々は、天におられる神の御座の前にいます。ではさらにくわしく、「そこへの手段」、「途中での経験」、「苦難の後の栄光」についてごいっしょに考えていきましょう。

1 そこへの手段

どのようにして、彼らは、御座の前へ行くのでしょうか。

それはもちろん、「自分自身の努力」によってではありません。また「苦しみ」によってでもありません。多くの人々は、苦しみの結果として、その報酬として、神は天国へ招いてくださると思いがちですが、それは間違っています。

苦しみを通して、人は天国へ招かれるのではありません。苦しみは、人を神のみもとへ来させるために、神のとられる手段にすぎません。

これら大ぜいの人々は、白い衣を着ています。その衣は、小羊の血によって白くされました。ルカの福音書15章にあるように、放蕩息子は、彼が心から悔い改めたときに、新しい着物を与えられました。こんにちも主は、悔い改める人々の罪を、かならず赦してくださいます。「悔い改め」と「白い衣」がなければ、その人々は外に投げ捨てられます。

「ところで、王が客を見ようとしてはいって来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで王は言つた。「あなたは、どうして礼服を着ないで、ここにはいつて来たのですか。」しかし彼は黙つていた。そこで王はしもべたちに、「あれの手足を縛つて、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。」と言つた。招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」

（マタイ 22・11～14）

これらの人々は、ただ「小羊の血を通して」、神の御座の前に近づくことができるのです。

それで、律法によれば、すべてのものは血によつてきよめられる、と言つてよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

（ヘブル 9・22）

「罪の赦し」は、ただイエス様の犠牲の血によつてしか与えられません。「罪の赦し」がなければ、私たちは天におられる神の御座の前に出ることはできません。「イエス様の血」だけが、「赦しきよめ」とを与えてくださいます。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（ヨハネ 1・9）

そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪惡な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもつて、真心から神に近づこうではあります

せんか。

(ヘブル 10・22)

2

途中での経験

大ぜいの群衆は、神の御座の前へ行く途中で「多くの患難」を経験します。

弟子たちの心を強め、この信仰にしつかりとどまるように勧め、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならぬ。」と言つた。
(使徒 14・22)

このような患難はイエス様自身、また全てのイエス様の弟子たちによつて予告されています。

イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畠を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畠を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。」
(マルコ 10・29、30)

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知つてゐることのすばらしさのゆえに、いつさいのことを損と思つています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思つています。
(ピリピ 3・8)

彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。

彼は報いとして与えられるものから目を離さなかつたのです。 (ヘブル 11・26)

いつの時代でも、イエス様の側に立つ人々は、苦難を経験することになります。ましてサタンが反キリストを通してその力を現わす時には、どのような苦難を経験することでしょうか。

默示録13章17節によれば、「獸の刻印を持つている者以外は「買うことも売ることもできなくなる」とあります。また、人々は飢餓をも経験することでしょう。獸、つまり反キリストの刻印を拒んだ人々は、大きな苦難を経験することになるのです。

また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隸にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。また、その刻印、すなわち、あの獸の名、またはその名の数字を持つている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。

(默示
13・16、17)

3 苦難の後の栄光

この苦難の後に、彼らは何を経験するでしようか。

彼らは、これまで死ぬほどの迫害を受けてきましたが、いまは神のみもとでなぐさめられています。彼らは喜びの中でイエス様を賛美し、イエス様との交わりを経験しています。彼らには新しい着物が与えられ、足りないものはなく、彼らのあらゆる望みはすべて満たされています。

3 御座の前で仕える

次に神の御座の前にいる人々は、何をしているのかを考えてみましょう。

1 しゅろの枝

戦いの時は、すでに過ぎ去りました。これらの人々は、しゅろの枝を手に持っています。しゅろの枝は、平和の象徴です。

しゅろは、勝利の象徴でもあります。当時の運動の選手は、勝利のしるしとしてしゅろの枝を与えられました。さらに、しゅろ、なつめやしは喜びの象徴でもあります。

「最初の日に、あなたがたは自分たちのために、美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の大枝、また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、主の前で喜ぶ。年に七日間、主の祭りとしてこれを祝う。」
(レビ 23・40、41)

また、この祭りには七日間、仮庵に住まなければならぬことが旧約聖書に記されています。

「これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、彼らを仮庵に住まわせたことを、あなたがたの後の世代が知るためにある。わたしはあなたがたの神、主である。」
(レビ 23・43)

イスラエルの人々は、仮庵の祭りによつて神がエジプトから救い出してくださつた時のこと

思い起こしてきました。彼らはその祭りで喜びのしとして、しゅろの枝を手に持ったのです。また神の御座の前にいる人々は、しゅろの枝を持つていただけではありません。

2 神への賛美

彼らは神の御座と小羊との前に立ち、「神と小羊とをほめたたえて」います。そして、だれひとり自分を誇らず、ただひたすら、全ての誉れを神と小羊とに帰しています。

これらの人々は、自分の力や努力では決して天国には行けないことをよく知っています。「礼拝」が、彼らのすべての中心になっています。彼らのただひとつ願いは「主に礼拝を捧げたい」ということです。ここではもう、どのような嘆きも、訴えも、自慢話も聞くことはありません。これらの人々は、イエス様のご支配のもとにあり、イエス様の保護のもとにあり、それこそが彼らの幸せなのです。なぜなら、そこが彼らの故郷だからです。そこで彼らは生ける神、小羊イエス様との交わりを持っています。「神の前で仕える」ことこそが、私たちにとって大きな「特権」であり、また喜びです。

黙示録12章7節から9節によると、サタンは天で戦いを起し、そこから投げ落とされてしまいます。その後サタンは、この地上で救われる人々を彼の力で堕落させようとしています。しかしこの終わりの時代には、もはや救われている人々を告発しようとするとする者などどこにもいないのです。なぜならサタンはすでに投げ落とされてしまったからです。

そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と

国と、また、神のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」
（黙示 12・10）

3 神へのつとめ

そして、彼らは昼も夜も神に仕えています。この終わりの時代には、御座の前に、昼も夜も神に仕える人々の群れがあります。あらゆる国々の大ぜいの人々が、昼も夜も神に仕え、また礼拝するようになります。

16節からは、「彼らがもはや「飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはない」と記されています。

これまで彼らは飢えと渴きに会い、迫害の炎熱を受け、多くの苦しみを経験してきました。しかしいま、すべては過ぎ去って、彼らはこれらの苦難から解き放たれています。

17節では、すばらしい三つの約束が彼らに与えられています。御座の正面におられる小羊が「彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださる」、そして「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取つてくださる」という約束です。

主が「彼らの牧者となる」ということは、「彼らを支配される」ということです。主の「支配のもとにある者には、本当の安らぎと、喜びと、満たしとが与えられます。

小羊であるイエス様が彼らを導いてくださいます。どこへ導いてくださるのでしょうか。「いのちの泉」である父のみもとへと、導いてくださるのです。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ 14・6）

黙示録第七章のこの部分で、私たちは数えきれないほど大せいの救われた人々、幸せな人々が御座の前にいるありさまを見てきました。幸いなことに、私たちもこのように神の栄光の御座の前に出ることができるのです。

あなたはこのような幸せな人々の群れの中におられるでしょうか。小羊イエス様の血によつてきよめられた人々の中に入つておられるでしょうか。アモス書4章12節の「あなたはあなたの神に会う備えをせよ。」という呼びかけに答え、イエス様に従いたいと思つておられるでしょうか。

主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞くなら、メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。

（詩篇 95・7、8）

このようにイエス様は、「自身の血潮によって、御座の前に立つ人々を大きな喜びをもつて主を賛美する幸せな者としてくださいました。また私たちにも、同じようにしてくださいます。イエス様は、あなたをきよめ、ご自身のご榮光にふさわしい者にしてくださるのです。

もしあなたが、「これから先、自分の人生はいつたいどうなるのだろう。また死後、永遠に、自分はどうなってしまうのだろう」という不安と心配をお持ちでしたら、いま、あなたはご自分の

罪を告白し、イエス様の流された犠牲の血潮に感謝を捧げていただきたいと思います。そうすればあなたもまた、御座におられる神をほめたたえる者に変えられます。あなたが次のような確信をもつて神と小羊とをほめたたえることができれば、本当に幸いです。

あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもつて栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

(ユダ
24、25)

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Iヨハネ5・13　Iペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Iヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Iペテロ2・24　IIコリント5・21

基礎的なみことば

			四 血潮の価値
イザヤ	1 · 18	ローマ	3 · 24、 25
黙示	12 · 11	Iヨハネ	1 · 7
確信の根拠		エペソ	1 · 7
イザヤ	43 · 1、 25	Iペテロ	1 · 18、 19
マタイ	13 · 22	ルカ	7 · 48
詩篇	103 · 12	ヘブル	8 · 12
試練の時	マタイ 6 · 25 ヤコブ 6 · 32	ヘブル	10 · 17
ヤコブ	1 · 12	ピリピ	4 · 6、 7
Iペテロ	1 · 5 · 7	Iコリント	10 · 13
イザヤ	40 · 29 31	Iペテロ	5 · 8 · 10
		詩篇	55 · 22

「ヨハネの黙示録」第1巻のおすすめ



すぐに起こるはずのこと「ヨハネの黙示録」第1巻のおすすめ

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、靈的に正しく読み解くことは困難になってしまいます。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の婦人のための学び会で、約1年半ほどの間に行なわれたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には始めの3章が収められています。第1部にはイエス・キリストの黙示、第2部には七つの教会への手紙について、説きあかされています。

すぐに起こるはずのこと 「ヨハネの黙示録」第1巻

ゴットホルド・ベック著

価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号記入の上
〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町4-9
—11 吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は
本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。



実を結ぶ命がんにうち勝つたドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷靜に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されいつたというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」

(エレミヤ 31・3)

リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたりバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拝り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。さらに病床にあつて本の読めない方々のために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ(8本1組)があります。

ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命 がんにうち勝つたドイツ少女リンデ

価格三三〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上)〒180-0004武藏野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

絶えず祈れのおすすめ

ゴットホールド・ベック著

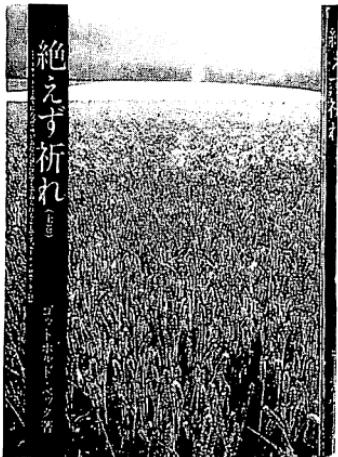
主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそこまでしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらを開けるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によつて祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージがおさめられています。

絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホールド・ベック著

上巻価四〇〇円・下巻価二五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集 上下巻の別、
冊数、氏名、住所、電話番号）記入の上〒180-10
004 武藏野市吉祥寺本町4-9-11 吉祥寺キリスト
教会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振
込用紙でお振込みください。



絶えず祈れ のおすすめ

神の愛（上・下巻）のおすすめ



なものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻） ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ロトマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い靈的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願つておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

なものも私たちを

神の愛
から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック編著
各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何巻、上下巻の別）、
冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180-10
00-4 武藏野市吉祥寺本町4-9-11 吉祥寺キリスト
集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振
込用紙でお振込みください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

第1集

25人の証し

価格三三〇円

第2集

25人の証し

価格二五〇円

第3集

42人の証し

価格二三〇円

第4集

66人の証し

価格二五〇円

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Deinへ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

松見敬二さんの「暁からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのぼりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

江藤善清・恵士夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの聲」、納富信子さんの「主のこ眞実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださつたことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

ニュースキャスター・山川千秋さんの夫人穂子さんの「ここに、主がおられる」、故篠川郁夫・公子夫妻の「もやは私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚一郎助教授の「高慢を碎かれ」などが掲載されています。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町4-9-11 吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。

第5集

67人の証し

価三八〇円

第6集

70人の証し

価三八〇円

第7集

69人の証し

価四〇〇円

第8集

88人の証し

価四〇〇円

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会つたことは、私にとてしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ」、「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

神竹孝至・礼子夫妻の「真理への道」「神様の計画」、飽戸弘教授・安子夫妻の「奇蹟コミニケーションで回心」「目を開かれて」、友野雅志・和子夫妻の「私のすべてであられる主」「主だけを見上げて」、岡本雅文、恵子夫妻の「弁解の余地はない」「生きよと言られた主」など。

がんで召された小川泰徳さんの「主とひとつになつて」、道川勇雄・節子ご夫妻の「神はすべてのことを益としてくださつた」「冷えた信仰から熱い信仰へ」、須藤辰郎・セツ子ご夫妻の「薬物依存からの解放」「主の憐みゆえに」、「死に直面した方々の証し」「希望にあふれて」など。

日本とドイツの出会い　のおすすめ



日本とドイツの出会い「ドイツよろこびの集いの記録」のおすすめ

このグラフは一九九四年秋に開かれた「ドイツよろこびの集い」のカラー写真集です。世界中から集まつた約四百人のかたがたの写真と証し、またドイツ各地で行なわれたキリスト集会やメサイアの贊美の模様など、主にあるみなさまのよろこびにあふれた記録を通して、主のご臨在とご榮光がひしひしと伝わってきます。四十年間日本のために祈り続けられたドイツの主にあるかたがたとの出会いを感動的に証しするアルバムです。B4変形判で百ページ、全て色刷りです。

40年間日本のために祈り続けた

出会い ドイツの主にある兄弟姉妹との

価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180-0004武藏野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

キリスト集会のご案内

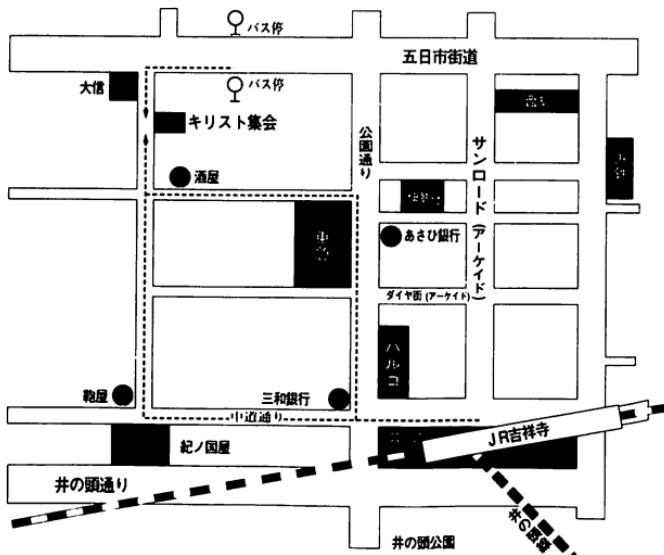
- ・ 牧師制度がありません……キリスト集会には牧師制度はありません。いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いつさいの強制はなく、純粹に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。
- ・ 組織も、会則もありません……キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもつてなされます。
- ・ 会員制度がありません……会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいつさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられるることを祈り求めている集会です。
- ・ 献金制度がありません……月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行なわれ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。
- ・ 日曜礼拝……祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあざかります。あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。礼拝の後は福音集会で、兄弟によつて主のみことばがとりつがれます。
- ・ 家庭集会……家庭でひきかれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くの所で日曜礼拝が行なわれます。
- ・ よろこびの集い……西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。快適で経済的な宿泊設備を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粹に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになつて聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G. ベック	0422-22-2016	東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11	〒180-0004
日曜礼拝	10:30	14:00	19:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00
子供日曜学校	9:00		
中高生日曜クラス	9:00		



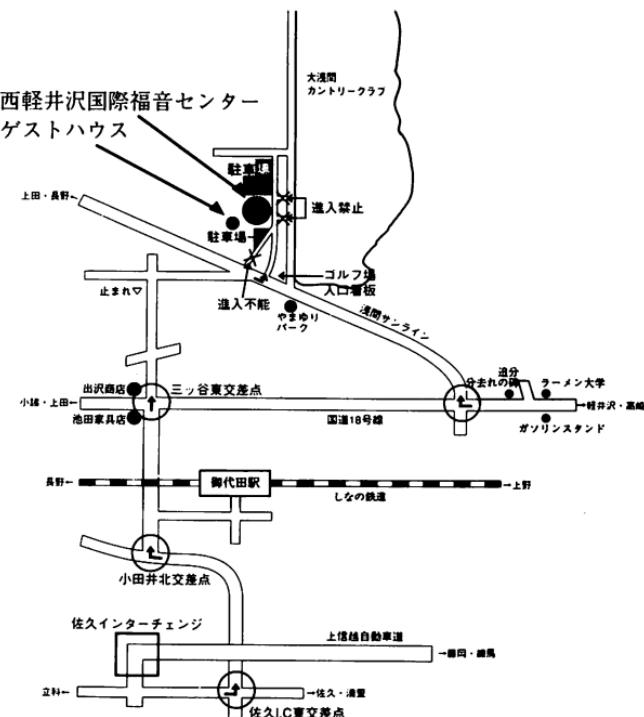
西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター

0267-32-6400 (代) 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

0267-32-6444 長野県北佐久郡御代田町塩野 450-33 〒389-0201



- ・上信越自動車道で佐久インターチェンジから出て上図を参考にしてください。
- ・しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分=1000円程度。徒歩約45分=3km。
御代田へは東京駅から長野行新幹線「あさま」で軽井沢乗りかえ、しなの鉄道3つ目御代田下車。
- ・国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、2つ目の追分宿の信号を越え、左にESSOのガソリンスタンドを越えて浅間サンラインに右折して入ります。そこから約3kmです。
- ・道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

すぐに起ころるはずのこと

ヨハネの默示録

第2巻

定価 250 円
(本体 238 円)

1999年5月1日初版

著者 ゴットホルド・ベック

編 集 酒井千尋 福留伸子 石塚優子
井野文雄・潤子 岡庭道
デザイン版下 飯守格太郎 上野文子 小林珠美
連 格 清水まみ
印 刷 新生宣教団

発行所 キリスト集会
〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
電話 0422-21-8450 (集会所)

価格 250円（本体価格 238円）

ミヘルスベルグのよろこびの集いで、ドイツの姉妹がたとのお別れ会。

